

轉。竟就絶於尺組之下。既而玄宗狩成都。肅宗受禪靈武。明年大兕歸元。大駕還都。尊玄宗爲太上皇。就養南宮。遷于西內。時移事去。樂盡悲來。每至春之日冬之夜。池蓮夏開宮槐秋落。梨園弟子玉筥發音。聞霓裳羽衣一聲。則天顏不怡。左右獻歎。三載一意其念不衰。求之夢魂杳不能得。適有道士自蜀來。知上皇心念楊妃如是。自言有李少君之術。玄宗大喜命致其神。方士乃竭其術以索之不至。又能游神馭氣。出天界沒地府以求之不見。又旁求四虛上下。東極天海跨蓬壺。見最高仙山。上多樓闕。西廂下有洞戶。東向闔其門。署曰玉妃太真院。方士抽簪叩扉。有雙童女出應問。方士造次未及言。而雙鬟復入。俄有碧衣侍女。又至詰其所從。方士因稱唐天子使者。且致其命。碧衣云。玉妃方寢。請少待之。于時雲海沈々洞天日晚。瓊戶重闔悄然無聲。方士屏息斂足拱手門下。久之而碧衣延入。且曰。玉妃出見。一人冠金蓮披紫綃。珮紅玉曳鳳翥。左右侍者七八人。揖方士問皇帝安否。次問天寶十四年已還事。言訖惘然。指碧衣取金釵鈿合。各析其半授使者曰。爲謝太上皇。謹獻是物尋舊好也。方士受辭與信將行。色有不足。玉妃固徵其意。復前跪致詞。請當時一事不爲他人聞者驗於太上皇。不然恐鈿合金釵負新垣平之詐也。玉妃茫然退立若有所思。徐而言之曰。昔天寶十載。侍輩避暑驪山宮。秋七月。牽牛織女相見之夕。秦人風俗。是夜張錦綉陳飲食瓜果。焚香于庭號爲乞巧。宮掖間猶尙之。夜殆半。休侍衛於東西廂獨侍上。上凭肩而立。因仰天感牛女事。密相誓心。願世々爲夫婦。言畢執手各嗚咽。此獨君王知之耳。因自悲曰。由此一念又不得居此。復墮下界且結後緣。或爲天或爲人。決再相見好合如舊。因言。太上皇不亦久人世。幸唯自安無自苦耳。使者還奏太上皇。皇心震悼日々不豫。其年夏四月。南宮晏駕。元和元年冬十二月。太原白樂天。自校書郎尉于鹽屋。

鴻與瑯琊王質夫家于是邑。暇日相携遊仙遊寺。話及此事相與感歎。質夫舉酒于樂天前曰。夫希代之事。非遇出世之才潤色之。則與時消沒不聞于世。樂天深於詩多於情者也。試爲歌之如何。樂天因爲長恨歌。意者不但感其事。亦欲懲尤物窒亂階垂于將來也。歌既成使鴻傳焉。世所不聞者。予非開元遺民不得知。世所知者有玄宗本紀在。今但傳長恨歌云爾。

(唐書卷七十六后妃傳參閱)

●俊賴無名抄卷下

むかしもろこしに、玄宗と申すみかどおはしけり。もとより色をなごこのみ給ひける。いみじうあいたまひける女御、ささきなどおはしける。ささきをば源憲皇后といひ、女御をば武淑妃となむさこえ給ひける。いみじくあしおはしけるほどに、相ついでふたりながらうせ給ひにけり。それをおぼしなげきて、これらに似たる人やあるともとめたまひけるに、楊元琰といふ人のむすめありける、かたちよにすぐれて、めてたくなむありける。帝これをさこしめして、むかへとりて御覽じけるに、はじめおはしける女御、ささきにもまさりて、めてたくなむおはしける。三千人のてうあい、一人にのみになむありける。かくてめてたくおはしけるを、もてあそび給ひけるほどに、世の中のまつりごとをもしたまはず、春は花のもとにてあそび、秋は月をともし御覽じ、夏はいづみをあし、冬はゆきをふたり見たまひき。これによりて御いとまなく、この女御の御せうとに、楊國忠といふ人になん、世のまつりごとをばまかせてせさせたまひける。これによりて、世の中なんいみじくなげきていひける。世にあらむ人は、をのこ

はまうけずして、女ごをなんまうくべきとぞいひけるをききて、よの人のこゝろにしたがひて、安祿せんといふ人、いかで帝をあやぶみ奉りて、この女御をころさんとおもふ心ありけり。漁陽といふところにあそばせ給ひけるほどに、このあえろくせん、いくさをおこし、ほこをこしにさして、御こしの前にふして申しけるやう、ねがはくはそのやう貴妃をたまはりて、天下のいかりをなごめむと申しければ、をしみたまはずして、この女御をたびてけり。あえろく山たまはりて、みかどの御前にしてころしけり。帝これを御らんじて、きもころまどひ、涙をよもにながして、見給ふにたへずぞありける。かくて都にかへり給ひて、位をば東宮にゆづりたまひてけり。この事をおぼしなげきて、春の花のちるをもしらず、秋は木の葉のおつるをも見たまはず、木の葉にはにつもりたれども、あへてはらふ事なし。かくおぼしなげくことをききて、まぼろしといふ道士まわりて申さく、我れみかどのつかひとして、この女御のおはしどころもとめはべらむと申しければ、帝よろこびて、しからばわがために、この人のあり所をたづねて、わが事をつたへよ。このみことをうけたまはりて、上は大ぞらをきはめ、下はそこら、ねの國までもとめけれども、つひにたづねえず成りにけり。ある人のいはく、ひんがしの海に、蓬萊といふ一しまあり。その島のうへは、玉妃の大真院といふ所あり。それになむおはするといひければ、たづねていたりにけり。その時に、山のはに日やうく入りて、海のおもてくらがりゆく。花のとびらみなたて、人のおともせざりければ、この戸をたゞきけり。青さきぬきたるをとめの、びづらあげたる出てきたりていはく、なんぢはいかなる所より來たれる人ぞ。まぼろしこたへていはく、みかどの御使なり。申すべきことのある

によりて、かくはるかに尋ねきたれるなり。このをとめいはく、玉妃まさにねたまへり。ねがはくはしばらく待ちたまへ。そのとき、まぼろし手をたひけてぬたり。夜あけて、このまぼろしをめしよせて、玉妃のたまはく、帝はたひらにおはしますやいなや。つきには、天寶十四年よりこのかたけふに至るまで、いかなる事かありつる。まぼろし、その間の事をかたりいひけり。かへりなんとしけるときにのぞみて、玉のかんざしをなむをりてたまはせける。これをもちてみかどにたてまつれ。むかしの事、これにておぼしいてよとなむ申したまひける。まぼろし申さく、玉のかんざしは、よにあるものなり。これは奉らんに、わが君まこと、おぼしめさじ。たゞむかし、きみとしのびて語らひたまひけんことの、人にしられぬ事ありけん、それを申したまへ。さてなむ、まこととはおぼすべきと申しければ、楊貴妃しばらくおぼしめぐらしてのたまはく、我むかし七月七日に、たなばたあひ見し夕に、みかどわれに立ちそひていひ給ひし事は、たなばたひこぼしのちぎりあはれなりき。我もかくなむあらむとおもふ。もし天にあらば、つばさをならべたる鳥とならん。地にあらば、ねがはくは連理のえだをさしまじへたる木とならん。天もながく地もひさしくして、時にをはることあらむ、このうらみめんくとして、たゆる期なからむと申し、とんかたらひたまひける。かへりてこのよしを申しければ、帝おほきにななしび給ひて、つひにかなしびにたへずして、いくほどなくして、うせたまひにけりとぞいひつたへたる。

●唐物語

むかし、唐の玄宗と申しけるみかどの御時、世の中めてたくをさまりて、ふく風も枝をならさず、ふる雨

も時をたがへざりければ、みな人あめのしたおだしきにほこりて、花をしみ月をあそぶよりほかのいとみなし。御門も、色にめて香にのみふけり給へる御心のひまなきにや、よろづをば右大臣(一本楊國忠ニ作ル)と聞ゆる人にまかせて、みづからのまつりごとおこたらせ給ひけり。これよりさきに、元獻皇后、武淑妃などきこえたまひしきさき、世にならびなく、御ころさしふかくおはしましき。それはかなくならせ給ひてのちは、あまたのなかに、御ころにかなひたる人おはせざりき。これにより高力士におほせられて、みやこのほかまでたづねもとめさせ給ふに、楊家の娘をえ給ひてけり。其のかたち、秋の月の山の端よりたかくのぼるこちして、そのいきざしは、夏の池にくれなるのはちすはじめてひらけたるにやと見ゆ。ひとたびおぼるに、もゝの媚なりて、人の心まどぬひへし。すべてこの世のたぐひにあらず、たとゝ天人などの、しばしあまくだれるとぞ見えける。かゝりければ、うへ内裏のうちに、たちまちにいて湯をほらせて、このひとにあむせ給ふ。湯よりいてたるすがた、まことにこゝろぐるしく、うすものゝころもなほおぼげになん見えける。色ざしあゆみいてたまへるけしき、かるびたる物から、けだかくあいしくして、さすかまたおもふところあるやうにふるまひ給へり。うへこれを見給ふたびに、うれしくよろこばしくおぼさるゝ事たぐひなし。たとゝ見めかたちの人にすぐれ、しわざありさまの世にならびなきのみにあらず、よろづにつきてくらからず、ことにふれてなさけふかくなんものし給ひける。またうへの御心のうちにおぼせる事をば、さながらそらにしりてふるまひければ、かぎりなき御心ざしをも、世の人ことわりとおもへり。おなじくるま、ひとつゆかにあらねば、みゆきしいね給ふ事な

し。三千人の女御さき、われもくとさぶらひたまへど、御めのつてにだにかけ給はず、たとゝこの人のみぞ、月日にそへてたぐひなきものにおぼしける。また驪山の宮にみゆきし給ひて、霓裳羽衣のまひをそうせさせたまふ。まひの袖かぜにひるがへるたびに、たまのかざり庭におちつもりて、極樂世界のるりの池もかくやあらむとおぼえたり。おほよそ、驪山宮の秋のゆふべに心をとめの人なし。春ははるのおそびにしたがひ、夜はよのみじかきことをなげき給ひける。かくて夜もすがらいぬもすに時をわかず、これよりほかの御いとみななかりければ、國のまつりごとの、すみにごれるをいかにもしらせたまはざりけり。すべてこの楊貴妃のはぐくみによりて、世のくるしきことをわすれつゝ、ほこりおこれる人其のかずをしらず。又あめのしたの人、たかきもいやしきも、心にたがはじとおもへるけしきなべてならず。見る人さく人、うらやみめづるさまいひつくすべからず。これによりて、女子をうめるものはよろこびかしづきて、かゝるたぐひを心にかけるも、をこがましくこそ。またみかどの御おとらに寧王とまをす人、御かたはらはなれず、まぢかくゆかをならべて、よるひるをわかぬ御あそびにも、かならずさぶらひ給ひけり。この親王、るりのたまのふえを、ちやうのうちにかくしおかせ給へりけるを、楊貴妃なにとなくふきならしたまふ。みかどこれを御覽じつけて、たまのふえは、あるじにあらずしてふくことなし。しかるを、心ざしのおもきにはこりて、禮をあやまてり。ことのみだれにはあらずやと、ことのほかに御けしきはりにけり。これによりて、楊貴妃いたみおぼすころやふかゝりけん、びむのかみ一ふさをさりて、帝にたてまつり給ひ、我が身のはだへ、かしらのかみならては、みなこれ君のたま

物にあらずや。しかるを我いま御心にそむきぬれば、つみにふしておこたりをまをすべしと、なくく聞えさせ給ふに、御つかひも、いとはしたなきまでおぼえつゝ、このよしを奏するに、御心もあわて、物もおぼえさせたまはずながら、時のまにめしかへして、世になほたくひなくもある心ばせかたとおぼしつゞくるに、御心ざしのふかさ、日比にはすぎにけり。はつ秋の七日のゆふべ、驪山宮にみゆきし給ひて、たなばたひこぼしのたえぬちぎりをうらやみ、はかなきこの世のわかれやすきことをぞ、かねてなげき給ひける。かたちは六つのみちにかはるとも、あひ見むことはたゆる時あらじと契り給ひて、

すがたこそはかなき世々にかはるともちぎりはくちぬものところさけ

などの給ひつゝ、御手をと리카はして涙をながし給ひけるを、すゑの世にきく人さへ袖のうへ露けし。かくてとし月をおくらせ給ふに、右大臣楊國忠、楊貴妃のせうとにて世のまつりごとをとれりけれど、ひとのこゝろにそむく事おほくつもりにければ、世の中いさどほりふかくなりぬ。そのなかに、楊貴妃の養子に左大臣安祿山ときこゆる人、いきほひをあらそひて、心のうちいさどほりふかけれども、これをあやむるひとさらになし。これによりて、たちまちにはもの十五萬人あつめて、つひに楊國忠をほろぼすに、世の中みだれてさわぎのしりあへり。もしきのうちまでもおそれふかければ、みかどほかににげさせ給ふ。東宮楊貴妃、御かたはらにさぶらひ給ふ。楊國忠、高力士、陳玄禮、韋見素、また御供に候ふ。かくて蜀といふ國へしりぞさせ給ふに、いかならむ野のすゑ山のなかなりとも、このひとだにふたりあらば、いけらんかぎりおもふことあらじとおぼさるゝに、人のけしきおもはずにかはり

て、はしたなく見えければ、みかどあやしみとはせ給ふ。陳玄禮といふ人、東宮にまをしていはく、はやく楊國忠まつりごとをみだり、人の心をやぶるゆゑに、君もけふこの事にあはせ給ふ。しかじ、たゞ楊國忠をうしなひて、人のうれへをやすめむにはと聞えさす。東宮これをゆるし給ふにより、楊國忠のまへにはかなくなりぬ。帝あさましくはかなくおぼされながら、こののちゆかむとしたまふに、つはものどもたちまはりつゝ、みだれのねなほありと申して、心よからぬけしきありけり。この時に、うへ楊貴妃のまぬかるまじき事をしらせ給ひにければ、御かほに袖をおほひて、ともかくもきこえさす事なし。この世に楊貴妃、いかならんいはほのなかなりとも、おぼつかながらぬ御すまひならば、いと心ぐるしからずおぼしけるに、おもひのほかに、いのちもたえぬべきにやと、あさからぬわかれのなみだ、ちしほのくれなゐよりも色ふかくて、せんかたなく見え給ひながら、なほみかどにめをかけたてまつりて、かくれさせ給ふまで、かへり見給へる御ありさま、なににたとふべしとも見えず。なてしこの露にぬれたるよりもらうたく、あをやぎの風にしたがへるよりもよらかに、太液の芙蓉、未央の柳にかよひたまへるをしも、なさけなく、みちのほとりのてらの中にして、ねりたるきぬを御くびにひきまつひつゝ、つひにはかなくなしたてまつる。物のあはれをしらぬ草木までも色かはり、なさけなき鳥けだものさへなみだをながせり。

ものごとにかはらぬ色ぞなかりけるみどりの空もよもの木ずゑも

御ともに侍りける人、こゝろあるも心なきも、たけきもたけからぬも、涙におぼれてゆきがたもしらず。

帝の御心のうちには、

何せんに玉のうてなをみかきけん野邊こそつひのやどりなりけれ

たゞ御袖のしたより、ちの涙ぞながれいづる。御こゝろまよひにや、うまのうへあやふく見えさせ給へば、人々うらうへにそひたてまつりて、やう／＼ゆかせ給ふに、つはものどもかてにつかれて、帝にしたがひたてまつらんこと、二心なきにあらねば、陳玄禮もとむべきことせず。かゝるほどに、益州といふ國より、みつぎもの數しらずはこべりけるを、御前につみおかせて、さぶらふ人々にわかちたまはせて、のたまはく、我まつりごとのすみにごれるをしらざりしより、このみだれにあへり。わが身ひとつによりて、さがりがたきおやはらからにもわかれ、二つなきいのちをもすて、なほわれにしたがへり。われまたいは木ならねば、むくう心あさからむや。早くこの物をたまうて、おの／＼ふるさとへ歸りねとのたまはす。御袖のうへ、秋のくさ葉よりもつゆけく見ゆ。この御ことをうけたまはるもの、みな涙をおさへて、申していはく、いのちのをはらむまては、たゞ君にしたがひたてまつるべし。かくて日もゆふぐれになるほどに、かたはらさびしきにつけても、いかなる中有のたびの空に、ひとりややみにまよふらむなど、おぼしみだれたる心ぐるしさ、あはれにかなしなどいふもあろかなり。夜もやう／＼あけがたになりぬれば、いてゆかせたまふに、ありあけの月にしかたぶくほど、雲井はるかになきわたるかりがねをさかせ給ふにも、御心のうちかきくらされて、いづかたへゆくともおぼされず。蜀山といふやまさかしくて、とだえがちなる雲のかけはし、あゆみわたらせ給ふ。御けしき、よそにだになほ忍びがたし。も

ものつかさびとかずおとろへ、いきほひいかめしかりしはたなどさへ、雨にぬれ露にしをれて、その物とも見えず。御ともに候ふ人々、なにごとにつけても、もの心ほそくおぼえて、鳥のこゑもせぬみ山に、かみの宮いと怪しきさまなり。月のかけよりほかに、光なきこゝちのみして、あるにもあらずあさましきほどなれど、所につけたる御すまひはさまかはりて、かゝらぬをりならばをかしくもありぬべし。これにつけても、九重のにしきの帳の内のたまの床のうへに、枕をならべ衣をへだてざりしむかしは、われなに事をおもひけんなどおぼされけるも、まことにことわりなり。かゝるほどに、東宮はゆづりをうけて位につかせ給ひぬ。あしき心あるものを失ひぬ。世の中をしづめて、太上天皇をむかへとりたてまつらせたまふ。間ぢかく内裏をならべて、よろづをまをし合せつゝ、御政あるべしと聞えさせ給へど、この御物おもひのあまりに、さるべき事どもおぼされず。世もたひらぎ、御心もしづまりて後は、御なげさもわくかたなく、一すぢになりぬ。時うつり事をはり、たのしびつきかなしみ來たる。池のはちす夏ひらけ、庭の木の葉秋られるごとに、御心のなぐさめがたさ、たぐひなくおぼされける時は、はかなく別れにし野へ行幸せさせ給ひけれど、あさぢが原に風うち吹きて、ゆふべの露玉とちるを御覽しても、さえいりぬべくぞおぼしける。

もろともにかさねし袖もくちはて、いづれの野邊の露むすぶらん
かやうにももひつゝ、なみだをおさへてかへらせ給ふ。御ありさまのよわ／＼しさも、いはとあろかなるべし。

別れにし道のほとりにたづね来てかへさはこまにまかせてぞゆく

春の風に花のひらくるあした、秋の雨に木の葉ちる夕、宮のうちあれさびしくて、さまざまの草の花、庭の面に咲きみだれたり。色々のもみぢ、はしの上にもちり積む。むかしの楊貴妃の、間ちかくつかひ給ひし女房など、月くまなき夜は、昔をこひなみだにむせびつゝ、ことしらべびはをひきけるにも、いと御袖の上、ひまなく見ゆる心ぐるしさは、よそのたもとまでもせきかぬるこゝちす。わすれてもまどろませ給ふ時なれば、ゆめのうちにも、あひ見給ふ事はありがたし。よるのさりくすまくらにすだくこゑにも、御なみだまさり、ゆふべのほたるのみぎはにわたるおもひにも、御むねのくるしさあさへがたし。かべにそむけたるのこりのともし火ひかりかすかにて、あさゆふもろともにおきふし給ひしこのうへも、ちりつものつゝ、ふるき枕ふるさふすま、むなしくて御かたはらにあれども、たれともにか御身にもふれさせ給ふべき。かくて二とせばかりにもなりぬるに、まぼろしといふ仙人まゐりて、我が君の御こゝろに、楊貴妃をおぼせる事のかぎりなきをしれり。六つの道おぼつかなき所なし。ねがはくは、うまれたまひつらん所をたづね見て、かへりまゐらんとぞきこえさするに、うれしくおぼさるゝ事限りなくて、御物おもひたちまちにおこたりぬ。まぼろし、そらにのぼり地にいりて、いたらぬ所なくもとむるに、そのしるしなし。雲にのりつゝ、なほ東さまにとびゆくに、わたつみのなかにいと高き山あり。そのうへに、たまのうてなこがねの殿ども、軒をならへいらかをつらねたるよそほひありさま、すべてこの世のたぐひにあらず。またそのうちに、仙女あまたあそびたはぶる。この所に行きむかひて、たま

とざしをうちたゝくに、いひしらずこの世ならぬひといてて、まぼろしにあへり。楊貴妃のうまれ給へる蓬萊宮これなりといふをさくに、うれしさかぎりなくて、唐の玄宗の御つかひなりとさこえさす。楊貴妃たゞいまいねたまへり。あしたをまつべしといひてかへりぬるのち、心もとなくてひとりたてり。ゆふべのあらしとなくて、なみのうへはるかに入日さすほど、をりからにや、あはれに心ぼそくて、やうく夜もなかばするほどに、花のとぼそにしら露ひまなくおけるを見て、

あけやらぬ花のとぼそをつゆけさにあやなく袖のそぼらぬるかな

かゝるほどに、夜もあけ日も出てぬれば、楊貴妃いて給へり。こがねのかむざしひかりあざやかに、たまのかざりめもかゞやくほどなり。まぼろしにあひむかひて、しばしこと葉もいだし給はず、まづおつるなみだをぞ所せげにおぼさる。方士も袖のしづくひまなくて、やゝひさしくなるほどに、楊貴妃のたまはく、天寶十四年よりこのかた、御こゝろのうちをおもひやるに、なやましくくるしきことかざりなし。かばかりたへなる所にうまれたれど、ちぎりのふかきによりて、我がうき名をとめしふるさとのみ心にかゝれるなど、さまざまのたまはするありさま、なほ霓裳羽衣のまひにぞ似たまへる。方士みかどの御こゝろをしれりければ、ありのまゝに聞えさせつ。たがひに心のいぶせさはるけて、方士かへりなむとするに、楊貴妃こがねのかんざしををりつゝ、我がものとして、みかどにたてまつれとのたまはす。方士これをとりて、ことあさくやおもひけん、こがねのかむざしは、たぐひなきものにもあらず。そのかみ、さだめて人しれぬ御ちぎりありけむものを、ねがはくはうけたまはりて奏せしめむといふに、楊貴

妃けしきかはり、なみだまさりて、おぼしみたる、事ありと見ゆ。むかし天寶十年の秋、驪山の宮に侍りしとき、たなばたひこぼしあひ見るゆふべ、長生殿のうちおとなくて、よはのけしきものあはれなりしに、御門われにたちそひてのたまひき、天にあらば、羽をかはす鳥となり、地にあらば、枝をかはす木とならんと、これ君よりほかにまたしる人なし。このちぎりかぎりなきによりて、かならず下界におちて、さだめてふたゝびあひ見て、むつまじき事ふるさがごとくならむ。我このことをかねてしれり。おもへばしかもかなしく、思へばまたうれしからずやなど、聞えさせたまふ御ありさまにも、しのびがたき御心のうちあらはれて、馬嵬のみちのほとりに、いまはかぎりと見えたまひしゆふべのうらみも、なほ只今のやうにおぼせるけしき、まことに梨花一枝はるの雨をおびたり。

ひかりさす玉のかほばせしほたれてなほそのかみのこゝちこそすれ

方士かへりまわりて、このよしを奏せしむるに、御心日をへてなやみまさりたまひて、うまれたまはんほどをも、心もとなくやおぼしけむ、そのとしの夏四月に、みづからはかなくならせたまひにけり。

しらざりしたまのありかをしりえてぞよはのけふりと君もなりにし

これひとときみのみにあらず、人と生れて木石ならねば、みなおのづからなさけあり。いにしへより今にいたるまで、たかきもいやしきも、かしこきもはかなきも、このみちにいらぬ人はなし。いりとしいりぬれば、まよはずといふ事なし。しかし、たゞ心をうごかす色にあはざらんには、おほよそこの世は、みなゆめまぼろしのごとし。八つの苦みのがる、事なければ、いとひてもいとふべし。天上のたのしみか

ざりなければども、いつゝのおとろへざる事なければ、ねがふべきにもたらず、生れてもよしなし。たゞ心を一つにして、三界をいとひ、九品をねがふべし。極樂をねがふとも、この世に執をとどめば、ともづなをとかずして、ふねをいださんがごとし。極樂をねがはずば、ながえをそむけて、車をはしらしめむがごとし。この世をいとひ、極樂をねがはざ、くるしみをあつめたるうみをわたりて、たのしみをさほめたるくくにいたらむ事はうたがふべからず。ゆめく、いてがたき惡道にかへらずして、ゆきやすき淨土にいたるべし。

●太平記卷三十七楊國忠事

昔唐ノ玄宗位ニ即キ給ヒシ始、四海無事ナリシカバ、樂ニ誇リ驕ヲツ、シマセ給ハザリシカバ、アダナル色ヲノミ御心ニシメテ、五雲ノ車ニ召サレ、左右ノ侍兒人ニ手ヲ引カレ、殿上ヲ幸シテ、後宮三十六宮廻リ、三千人ノ后ヲ御覽ズルニ、玄獻皇后、武淑妃二人ニ勝レル容色モ無カリケリ。君無限此二人ノ妃ニ思召シ移リテ、春ノ花秋ノ月、イヅレヲ捨ツベシトモ思召サリシニ、色アル者ハ必ズ衰ヘ、光アル者ハ終ニ消エヌル憂世ノ習ナレバ、此二人ノ后無ニ幾程ニ共ニ御隱アリケリ。玄宗餘リニ御歎有テ、玉體モ不レ穩シカバ、大臣皆相計テ、イヅクニカ前ノ皇后淑妃ニ増リテ、君ノ御心ヲモ慰メ進スベキ美人ノアルト、至ラヌ隈モナクゾ尋ネケル。爰ニ弘農ノ楊玄琰ガ女ニ、楊貴妃ト云フ美人アリ。是ハ其母晝寢シテ、楊ノ陰ニネタリケルニ、枝ヨリ餘ル下露、婢子ニ落懸リテ胎内ニ宿リシカバ、更々人間ノ類ニテハ不可レ有、只天人ノ化シテ、此土ニ來ル物ナルベシ。紅顏翠黛ハ、元來天ノ生セル質ナレバ、何ゾ必ズジモ瓊粉

金膏ノ假ナル色ヲ事トセン。漢ノ李夫人ヲ寫セシ畫工モ、是ヲ畫カバ、遂ニ筆ノ不_レ及事ヲ怪ミ、巫山ノ神女ヲ賦セシ宋玉モ、是ヲ讚セバ、自ラ言ノ方ニ卑シキ事ヲハデナン。其語ルヲ聞テモ迷ヌベシ。況ヤ其色ヲ見ン人ヲヤ。加様ニワリナク覺エシ顔色ナレバ、時ノ王侯貴人、公卿大夫、媒妁ヲ求メ、婚禮ヲ厚クシテ、夫婦タラン事ヲ望シカドモ、父母カツテ不_レ許、祕シテ深窓ニ有シカバ、天々タル桃花ノ曉ノ露ヲ含ンデ、墻ヨリ餘ル一枝ノ霞ニ匂ヘルガ如ク也。或人はヲ媒シテ玄宗皇帝ノ連枝ノ宮、寧王ノ御方ヘ進セケルヲ、玄宗天威ニ誇ツテ、濫ニ高將軍ヲ差遣シテ、道ヨリ奪ヒ取テ、後宮ヘゾ冊入_レ奉_リケル。玄宗ノ叔威寧王ノ御思、花開ク枝ノ、一方ハ折レテシボメルニ相似タリ。サレバ月來ニ前殿ニ早、春入ニ後宮ニ遲ト、詩人モ是ヲ題セリ。尋常ノ寒梅樹折レテ軍持ニ上レバ、一段ノ清香人ノ心ヲ感ゼシム。民屋蕭颯タル垂楊柳、移リテ宮苑ニイレバ、千尺ノ翠條、別ニ春風長カルベシ。サラデダニ妙ニ勝レタル容色ノ上ニ、金翠ヲ莊_リ薫香ヲ散ゼシカバ、只歡喜園ノ花ノ陰ニ、含脂夫人ノ粧ヲナシテ、春ニ和セルニ不_レ異。一度君主ニ面ヲマミエシヨリ、袖ノ中ノ珊瑚ノ玉、掌ノ上ノ芙蓉ノ花ト、見ル目モアヤニ御心迷ヒシカバ、暫シモ其側ヲ離_レ給ハズ、晝ハ終日ニ輦ヲ共ニシテ、南内ノ花ニ酔ヲ勸メ、夜ハ通宵席ヲ同ウシテ、西宮ノ月ノ宴ヲナシ給フ。玄宗餘リノワリナサニ、世人ノ面ニ紅粉ヲ施シ、身ニ羅綺ヲ帶ビタルハ、皆假ナル嬋娟ニテ、眞ノ美質ニ非ズ。同ジクハ楊貴妃ノ顯シタル膚ヲ見バヤト思召テ、驪山宮ノ溫泉ニ瑠璃ノ沙ヲ敷キ、玉ノ甃_ヲ滑ニシテ、貴妃ノ御衣ヲヌギ給ヘル貌ヲ御覽ズルニ、白ク妙ナル御ハダヘニ、蘭膏ノ御湯ヲ引カセケレバ、藍田日暖玉低_レ涙、庾嶺雪融梅吐_レ香カトアヤシマル、程也。牛車ノ宣旨ヲ被ツテ、宮

中ヲ出入セシカバ、光彩ノ榮耀門戸ニ滿テ、服用ハ皆太長公主ニ均シク、富貴甚ダ天子王侯ニモ越エタリ。此貴楊妃ノ兄セウトニ楊國忠ト云フ者アリ。元來家賤シクシテ、吠故ノ中ニ長トナリシカバ、才モナク藝モナク、文ニモ非ズ武ニモ非ザリシカドモ、后ノ兄ナリシカバ、聽テ大臣ニゾナサレケル。此時ニ安祿山ト云ヒケル舊臣、權威爵祿共ニ楊國忠ニ被_レ越テ、不_レ安思ヒケレドモ、スベキ様ナケレバ力不_レ及。係ル處ニ、天子色ヲ重ンジテ政ヲ亂リ、小人高位ニ登テ國ノ弊ヲ不知ヲ見テ、吐蕃ノ國々皆王命ヲ背クト聞エシカバ、誰ヲカ打手ニ向クベキト議セラレケルニ、楊國忠武威ヲ恣ニセン爲ニ、大將ノ印ヲ被_レ授バ、罷_リ向ツテ輒ク是ヲ靜ムベキ由ヲ望ミ申シケル間、是ニ上將軍ノ宣旨ヲ被_レ下ケル。楊國忠則チ五十萬騎ノ勢ヲ率シテ、大荒峰ニ陣ヲ取ル。夫レ大將トナル人ハ、士卒ノ志ヲ一ニセン爲ニ、士未_レ食將不_レ食、士宿_レ野將不_レ張_レ蓋、得_レ一豆之飯_ニ與_レ士喫、淋_ニ一樽之酒_ニ與_レ士飲トコン申スニ、此楊國忠明レバ旨酒ニ漬ツテ、兵ノ飢エタルヲ不知、暮レバ美女ニ纏ハレテ、人ノ訴ヲモ不_レ聞入。只長時ノ樂ニノミ誇_リ、軍ノ事ヲバ忘レテモ不_レ云ケルコソ淺猿ケレ。去程ニ兵疲_レ將懈_リテ、進ム勢無_リケレバ、吐蕃ノ戎狄共、二十萬騎ノ勢ヲ引テ、逆寄ニコソ寄セタリケレ。大將ハ元來臆病ナリ、士卒ノ心ヲ一ニセザレバ、一戰モ不_レ戰、楊國忠ガ五十萬騎、我先ニト河ヲ渡シテ、五日路マデ逃ゲタリケレバ、大荒ノ四方七千餘里、吐蕃ニ隨ヒ靡キニケリ。敵ハサノミ追ハザリシカ共、楊國忠此ニモ猶タマリ得ズシテ、都ヲ差シテ引ケルガ、今度大將ヲ申請テ、發向シタル甲斐モナク、一軍セデ歸ランコト、上聞其憚アリケレバ、御方ノ勢ノ中ニ、馬ニモ不_レ乘、物具モセデ疲レタル兵ヲ、一萬人首ヲ刎ネテ、各鋒ニ貫キ、是皆吐蕃ノ徒ノ首ナ

リト號シテ、都へゾ歸リケル。罪ナクシテ首ヲ刎ネラレタル兵共ノ親子兄弟幾千萬、悲ヲ含テ聲ヲ吞ミ、家々ニ哭ストイヘドモ、楊國忠ガ漏聞ンズル事ヲ恐テ、奏シ申ス人ナケレバ、御方ノ兵一萬人ハ、敵ノ首トナシテ、獄門ノ木ニ懸ケラレ、大荒ノ地千里ハ、打平ゲタル所ト號シテ、楊國忠ニゾ行ハレケル。上亂レ下不背ト云フ事ナケレバ、世ヲ舉ツテ只楊國忠ヲ滅サンズル事ヲゾ計リケル。安祿山此比大荒ノ境ニ吐蕃ヲ防ントテ居タリケルガ、時至リヌト悦テ、諸侯ニ約ヲナシ、士卒ニ禮ヲ深クシテ、楊國忠ヲ打ツベシト、宣旨ヲ給ヒタリト披露シテ、兵ヲ催スニ、大荒ニテ楊國忠ニ打タレタリシ一萬人ノ兵共ノ親類兄弟大ニ悦テ、我先ニト馳集リケル程ニ、安祿山ガ兵ハ、程ナク七十萬騎ニ成ニケリ。則チ崔乾祐ヲ右將軍トシ、子思明ヲ左將軍トシテ都へ上ルニ、路次ノ民屋ヲモ不煩、城郭ヲモ不責。安祿山朝敵ニ成テ、長安へ責上ルトハ、夢ニモ人思ヒモヨラズ、簞食壺漿ヲ持テ、士卒ノ疲ヲ勞リケル。此勢既ニ都ヨリ七十里ヲ隔テタル潼關ト云フ山ニ打チアガリテ、初テ旗ノ手ヲオロシ、時ノ聲ヲゾ揚ゲタリケル。玄宗皇帝ハ折節驪山宮ニ行幸成テ、楊貴妃ニ霓裳羽衣ノ舞ヲマハセテ、大梵高臺ノ樂モ、是ニハ過ギジト思召シケル處ニ、潼關ニ馬煙オビタマシク立テ、漁陽ヨリ急ヲ告グル聲鼓ノ、雷ノ如クニ打チツマケタリ。探使度々馳歸テ、安祿山ガ徒、崔乾祐、子思明等、百萬騎ニテ寄セタリト騒ギケレバ、事ノ體ヲ見テ參レトテ、歌舒翰ニ三十萬騎ヲ相副テ、咸陽ノ南へ被ニ差向。安祿山既ニ潼關ノ山ニ打舉リテ、歌舒翰僅ニ馳向ヒタレバ、カサヨリマツクダリニ懸落サレテ、官軍十萬餘騎河水ニ溺レテ死ニケリ。歌舒翰僅ニ打チナサレテ、一日猶長安ニ支へ居タリケルガ、使ヲ馳セテ幾度戰フトモ、勝ツ事ヲ難得。急ギ龍駕ヲ被廻テ、

蜀山へ落チサセ給フベキ由ヲ申シタリケレバ、サシモ面白カリツル霓裳羽衣ノ舞モ未レ終ニ、玄宗皇帝ト楊貴妃ト、同ジク五雲ノ車ニ被レ召テ、都ヲ落チ給ヘバ、楊國忠ヲ始トシテ、諸王百官悉ク歩跌ナル有様ニテ、泣々六軍ノ跡ニ相順フ。歌舒翰長安ノ軍ニモ打負テ、鳳翔縣へ落チケレバ、安祿山ガ兵君ヲ追懸ケ進セテ、旗ノ手五十町計ノ跡ニ連リタリ。龍駕既ニ馬嵬ノ坡ヲ過ギサセ給ヒケル時、供奉仕ル官軍六萬餘騎、道ヲ遮ツテ君ヲ通シ進セズ。是ハ何事ゾト御尋アリケレバ、兵皆戈ヲフセ地ニ跪イテ、此亂俄ニ出來テ、天子宮闕ヲ去ラセ給フ事、偏ニ楊國忠ガ驕ヲ極メ、罪ナキ人ヲ切りタリシ故也。然レバ楊國忠ヲ官軍ノ中へ給ヒテ首ヲ刎ネ、天下ノ人ノ心ヲ息メ候フベシ。不然バ縱ヒ安祿山ガ鋒ニハ死ストモ、天子ノ龍駕ヲバ通シ進スマジトゾ申シケル。跡ヨリ敵ハ追懸ケタリ。惜ムトモ不レ可レ叶ト思召シケレバ、早ク楊國忠ニ死罪ヲタプベシトゾ被レ仰ケル。官軍大ニ喜テ、楊國忠ヲ馬ヨリ引落シ、戈ノ先ニ指貫キ、一同ニドツトゾ笑ヒケル。是ヲ御覽ジケル楊貴妃ノ御心ノ中コソ悲シケレ。角テモ官軍猶アキタラザル氣色アリテ、龍駕ヲ通シ進ラセザリケレバ、此上ノ憤リ何事ゾト尋ネラル、ニ、兵皆后妃ノ德タガハハ、四海ノ靜マル期アルベカラズ。褒姒周ノ世ヲ亂リ、西施吳ノ國ヲ傾ケシ事、統纘耳ヲ塞ガズ、君何ゾ思召シ知ラザラン。早ク楊貴妃ニ死ヲ給ハラズバ、臣等忠言ノ爲ニ胸ヲ裂テ、蒼天ニ血ヲ淋グベシトゾ申シケル。玄宗是ヲ聞食テ、遁ルマジキ程ヲ思召シケレバ、兎角ノ御言ニモ不レ及、御胸モフサガリテ、御心消エテ、風輦ノ中ニ倒レ伏サセ給フ。震ノ袖ヲ覆ヘ共、荒キ風ニハ散ル花ノ、カクル、方モ無カリケルニ、楊貴妃サテモヤ遁ル、ト、君ノ御衣ノ下へ御身ヲ側メテ隠レサセ給ヘバ、天子自ラ御貌ヲ胸ニカキヨセテ、

先づ睨ヲ失ヒテ後、彼ヲ殺セト歎カセ給ヒケレバ、指モ忿レル武士共モ、皆戈ヲ捨テ、地ニ倒ル。其中ニ邪見放逸ナル戎ノ有リケルガ、角テハ、不可レ叶トテ、玉體ニ取付カセ給ヒタル楊貴妃ノ御手ヲ引放シテ、轅ノ下ヘ引落シ奉リ、懸テ馬ノ蹄ニゾ懸ケタリケル。玉ノ^{カシ}銅地ニ亂レテ、行人道ヲ過ギヤラズ、雪ノ膚泥ニマミレテ、見ル人袖ヲホシカネタリ。玄宗ハ無力シテ、御貌ヲモ^ヒ擡グサセ給ハズ、臥沈マセ給ヒシカバ、今ハノキハノ御有様ヲ、マノアタリ御覽ゼザリシコソ、中々絶ヌ玉ノ緒ノ長キ恨トハ成ニケレ。其後ニ二陣ノ兵フセギ矢射テ、前陣ノ龍駕ヲ早メケレバ、程ナク蜀ヘ落着カセ給ヒケリ。則チ回紇十萬騎ノ勢ヲ率シテ馳參ル。嚴武、歌舒翰、又國々ノ兵ヲ催シ立テ、五十萬騎蜀ノ行在ヘゾ參リケル。安祿山ガ勢ハ、始メ楊國忠ヲ打ントスル由ヲ聞テコソ、我モ^ノト馳集リシガ、今ノ如キハ只天下ヲ奪ントスルモノナリケリトテ、兵多ク落失セケル間、安祿山ガ榮華タ、春一時ノ夢トゾ見エタリケル。加樣ニ都ノ敵ハ日々ニ減ジ、蜀ノ官軍ハ國々ヨリ參リケレ共、玄宗皇帝ハ楊貴妃ノ事ニ思ヒ沈マセ給ヒテ、萬機ノ政ニモ御心ヲ不被懸、只死シテモ生レ合フベクハ、イキテ命モ何カセント思召ス外ハ他事モナシ。嚴武、歌舒翰、回紇等、角テハ叶フマシト思ヒケレバ、玄宗皇帝ノ第二ノ御子肅宗ノ、鳳翔縣ト云フ所ニ隱レテオハシケルヲ、天子ト仰ギ奉ツテ、四海ニ宣旨ヲ下シ、諸國ノ兵ヲ催シテ、八十萬騎先づ長安ヘゾ寄セタリケル。安祿山、崔乾祐、子思明ヲ大將ニテ、是モ八十萬騎長安ニ馳向フ。兩陣相挑ンデ未レ戰處ニ、祖廟ノ神靈百萬騎ノ兵ニ化シ、黃ナル旗ヲ差シテ、歌舒翰ガ勢ニ加リ、崔乾祐ト戰ヒケル間、安祿山ガ兵共ニ破レ立チテ、一時ニ皆亡ビニケリ。朝敵忽ニ被レ誅テ、洛陽則チ靜マリケレバ、肅宗位ヲ辭シテ、

又玄宗ヲ位ニ即ケ奉ラン爲ニ、官軍皆蜀ヘ御迎ニゾ參リケル。玄宗ハカク天下ノ程ナク靜マリヌルニ付テモ、只楊貴妃ノ世ニオハセヌ事ノミ思召シテ、再ビ天子ノ位ヲ踐マセ給ハン事モ、御本意ナラネドモ、馬嵬ノ昔ノ跡ヲモ御覽ゼバヤト思食ス御心ニ急ガレテ、懸テ還幸ノ儀則チ促サレケル。馬嵬ノ道ノ邊ニ風輦ヲ留メラレテ、是ゾ去年ノ秋、楊貴妃ノ武士ニ被レ殺テ、ハカナク成シ跡ヨトテ御覽ズレバ、長堤ノ柳ノ風ニシナヘルモ、枕ニ懸リシネミダレ髮ノ、朝ノ面影御泪ニ浮ビ、池塘ノ草ノ露ニシヨレタルモ、落チテ地ニ亂レケン玉ノ鈿、角ヤト思食シ知ラレテ、イト^ト御心ヲ惱マサレ、ウカレテ迷フ其魄ノ跡マデモ、猶ナツカシケレバ、只日暮レ夜明クレ共、此ニテ思ヒ消エバヤト思食シケレ共、翠花搖々トシテ東ニ歸レバ、爰ヲサヘ亦別レヌル事ヨト、御涙更ニ塞^セアヘズ、遙ニ跡ヲ顧ミサセ給フニ、蜀江水綠蜀山青、聖主朝々暮々情、譬ヘテ云ハン方モナシ。日ヲ經テ長安ニ還幸成テ、楊貴妃ノ昔住ミ給ヒシ驪山ノ華清宮ノ荒レタル跡ヲ御覽ズルニ、物ゴトニ堪ヘヌ御悲ノミ深ク成行キケレバ、今ハ四海ノ安危ヲモ叡慮ニ懸ケラレズ、御位ヲサヘ肅宗皇帝ニ奉讓、玄宗ハタ^トイツトナク御涙ニシヨレテ、仙院ノ故宮ニゾ御坐ケル。爰ニ臨叩ノ道士楊通幽、玄宗ノ宮ニ參リテ、臣ハ神仙ノ道ヲ得タリ。遙ニ君王展轉ノ御思ヲ知レリ。楊貴妃ノオハスル所ヲ尋ネテ歸リ參ラント申シケレバ、玄宗無限叡威有テ、則チ高官ヲ授ケテ大祿ヲ與ヘ給フ。方士則チ天ニ登リ地ニ入テ、上ハ碧落ヲ極メ、下ハ黃泉ノ底マデ尋ネ求ムルニ、楊貴妃更ニオハシマサズ。遙ニ飛去テ、天海萬里ノ波濤ヲ凌グニ、アハヒ七萬里ヲ隔テ、蓬萊方丈瀛洲ノ三ノ島アリ、一ノ龜是ヲ戴ケリ。中ニ五城峙チテ、十二ノ樓閣アリ。其宮門ニ金字ノ額アリ。立寄テ是ヲ見レ

バ、玉妃太真院トゾ書キタリケル。楊貴妃サテハ此中ニ御坐ケリトウレシク思テ、門ヲアラ、カニ敲キケレバ、内ヨリ雙鬟ノ童女出デテ、イヅクヨリ誰ヲ尋ヌル人ゾト問フニ、方士ヲ斂メテ、是ハ漢家ノ天子ノ御使ニ、方士ト申ス者ニテ候ガ、楊貴妃ノ是ニ御座アルト承テ、尋ネ參テ候ト答ヘ申シケレバ、雙鬟ノ童女、楊貴妃ハ未ダオホトノゴモリテ候。此由ヲ申シテ歸リ侍ラントテ、玉ノ扉ヲ押シタテ、内ヘ入ヌ、方士門ノ傍ニ立テ、今ヤ出ヅルト是ヲ待ツニ、雲海沈々洞天ニ日晩ヌ。瓊戸重ネテ閉ヂテ、悄然トシテ無聲。良有テ雙鬟ノ童女出デテ、方士ヲ内ヘイザナヒ入ル。方士手ヲ揖シテ、金闕ノ玉ノ庇ニ跪ク。時ニ玉妃夢サメテ、枕ヲ推シノケテ起キ給フ。雲鬢刷ハズシテ、羅綺ニダモ堪ヘザル體、譬ヘテ言フニ比類ナシ。左右ノ侍兒七八人、皆金蓮ヲ冠ニシ、鳳鳥ヲ著シテ相隨フ。五雲飄々トシテ、玉妃堂ヨリ出デ給フ。雲頭艶々トシテ、曉月ノ海ヲ出ヅルニ不異。方士泪ヲ押ヘテ、君王展轉ノ御思ヲ語ルニ、玉妃ツクトト聞キ給ヒテ、含情凝睇謝ニ君王、一別音容兩渺茫云々トナン恨ミ給ヒテ、中々御言葉モナケレバ、玉容寂寞トシテ涙闌干タリ。只梨花一枝春雨ヲ帶ブル如シ。將ニ歸リ去リナントスルニ及ビテ、玉妃ノ御信ヲ給ハリ候ヘ。尋ネ奉ル驗ニ獻ゼント申シケレバ、玉妃手ヅカラ玉ノ釧ヲ半バ擘テ方士ニタブ。方士釧ヲ給ハリテ、是ハ尋常世ニアル物也。何ゾ是ヲ以テ驗トスルニ足ランヤ。願クハ玉妃君王ニ侍リシ時、人ノ曾テ不レ知事アラバ、其ヲ承リテ驗トセン。不然バ臣忽ニ新垣平ガ詐ヲ負テ、身鉄鉞ノ罪ニ當ル事ヲ恐ルト申シケレバ、玉妃重ネテ宣ハク、我七月七日長生殿、夜半無人、上ノ傍ニ侍リシ時、牽牛織女ノ絶ニニ契ヲ羨ミテ、在天願作ニ比翼鳥、在地願爲ニ連理枝ト誓ヒキ。是ハ君王ト我トノミ知レリ。是ヲ以テ

驗トスベシトテ、泣々玉ノ臺ヲ登リ給ヘバ、音樂雲ニ隔リ、團扇天ニ隠レテ、夕陽ノ影ノ裏ニ、漸々トシテ消去リヌ。方士釧ノ半バト言ノ信トヲ受テ、宮闕ニ歸參シ、具ニ此ヲ奏スルニ、玄宗思ニ堪兼ネテ、伏沈マセ給ヒケルガ、其年ノ夏未央宮ノ前殿ニシテ、遂ニ崩御ナリニケリ。一念五百生、緊念無量劫トイヘリ。況ヤ知ラヌ世マデノ御契淺カラザリシカバ、死レ此生レ彼、天上人間禽獸魚蟲ニ生ヲ替テ、愛著ノ迷ヲ離レ給ハジト、罪深キ御契ナリ。

●曾我物語卷ニ玄宗皇帝の事

唐に玄宗皇帝、楊貴妃と申せし后を、安祿山が戰のために奪はれ、遂に馬嵬が原にして失ひ奉る。皇帝その思ひ堪へずして、蜀の法師に仰せ、魂のありかを尋ねよとあり。法師神通にて、一天三千界を尋ねまはりしに、こゝに大真苑とうちたる額あり。即ち蓬萊宮これなり。こゝに到つて玉妃にあひぬ。この處を見れば、浮雲重なりて、人跡の通ふべき處ならねば、釧をぬきて扉を敲くとき、雙鬟童女二人出でて、何處より如何なる人ぞと問ふ。唐の天子の使、蜀の法師と答へければ、さらばそれに待ち給へ、玉妃にこのよし申さんとて、内に入りぬ。處は雲界沈々として東天に日暮れなんとす。まことに悄然として待つところ、玉妃出で給ふ。即ち楊貴妃なり。左右の童女七八人あり。法師に揖して、皇帝の安寧を問ふ。法師細やかに答ふ。いひ終りて、玉妃あひ給へる印とや、玉の釧をぬきて法師にたぶ。その時法師、これは世の常にあるものなり、證にたらず。叡覽にいかなる密契かありし。玉妃暫く案じて、天寶十四年の秋七月七日の夜、天にありて願はくは比翼の鳥、地にあらば願はくは連理の枝、天長地久にして盡くる事なかん

と、しらず奏せんに、御疑あるべからずといひて、玉妃は去り給ひぬ。法師歸りまゐりて、皇帝に奏聞す。さる事あり、法師あやまりなしとて、飛車といふ車に乗り、我が朝尾張國に天降り、八劍大明神と現れ給ふ。楊貴妃は熱田の明神にてぞわたらせ給ひける。蓬萊宮は即ちこの處とぞ申候。

震旦吳招孝見流詩戀其主語 第八

今昔震旦ノ□ノ代ニ吳ノ招孝ト云フ人有ケリ心ニ悟リ有ケリ其ノ人若カリ時宮ノ内ヨリ流レ出タル河ノ邊ニ行テ遊ケニ木ノ葉ノ流レテ下ケル見テ取テ見バ柿ノ葉ノ赤ク紅葉ニ詩ヲ書ケリ招孝此レヲ見ルニ女ノ手ニテ有リ此レ何ナル人ノ作テ書タルナ思フニ誰レト不知モ心バセ有様思ヒ被レ遺テ戀キ事无限シ終ニハ思ヒニ成テ可レ爲キ様モ不思ザリケ其ノ詩ヲ和シテ其レモ柿ノ葉ニ書テ其ノ河ノ水上ニ行テ流シケ宮ノ内ニ流レ入リ招孝責テ戀シカリ時ハ彼ノ柿ノ葉ノ詩ヲ取出ツ見テ泣ケル然テ年來チ經ケル程ニ宮ノ内ニ被レ打籠一テ徒ニ□女御員數有ケリ然レド天皇御覽ズル事モ无カリケ天皇此等□□憑テ徒ニ年ヲ送ル極テ糸惜□少々ヲ祖々ニ返シテ男ニモ嫁ヨト仰セ給テ少々返シ給テケ其ノ中ニ一人ノ女御有ケリ形ヲ端正也祖ニ返シ給レバ其ノ祖有テ彼ノ招孝ヲ其ノ女御ニ合セテ聲ツ然レド招孝彼ノ柿ノ葉ニ詩書ケル人ノミ誰トハ不知モ戀シク思エテ何ニモ異人ニ物云トモ不思ザリケ祖ノ爲ル事バ心ニモ非ズ聲ニ成テ有ニ此ノ妻ノ思フ様ニテ哀レニ心苦シク思レバ彼ノ夜ル晝ル戀ヒ悲ツル柿ノ葉ニ詩書タル人ノ事モ漸ク思ヒ忘レテ有ケル程ニ女ノ男ニ云ケル様其怪ク物思ル人ノ氣色ニテ見エシ何ナリ事ソ其ノ事我レニ不レ隠サズ云ヘト招孝答テ云ク我レ早ウ宮ノ外ニシ河ノ流レニ遊ビシ水上ニ木ノ葉ノ有リシ取テ見シカ柿ノ葉ノ赤ク紅

葉シニ女ノ手ニテ一ノ詩ヲ書キ其レヲ見テ後其ノ手ノ主ニ合ハム思フニ誰ト不知モ尋キ方无クテ可レ合キ様ノ无バケレ今日今ニ忘ル事无シ然レド君ト親ク成テ後ハ事ノ外ニ思ヒ愛スル也ト女此レヲ聞テ云ク其ノ詩ハ何ガ有シ亦其ノ詩ノ和ヤ作タリ招孝然有キ思ヒ遣シニ宮ノ内ノ女作コソト思バ其ノ水上ニ行テ和ヲ作テ自然ラ見ル事モヤ有テ流シテ答バ女此ノ事ヲ聞クニ涙落テ契ノ不レ思ヌ事ヲ知テ招孝ニ云ク其ノ詩ハ自ラ作テ書シ也和ノ詩亦後ニ我レ見付カバ于レ今我が許ニ有ト云テ各取出シテ見レ互ニ我が手ニテ有レバ淺キ契ニハ非ザリケ知テ泣々ク彌ヨ契ケリ女ノ云ク我レ此ノ詩ヲ作リシ事ハ我レ天皇ノ召ニ隨テ宮ノ内ニ參タリ云ヘト天皇ニ見エ奉ル事无クテ徒ニ月日ヲ送リシ事ヲ歎テ河ノ邊ニ遊ビシ一ノ詩ヲ作テ柿ノ葉ニ書テ河ニ流シテ後ニ亦其ノ河ノ邊ニ行シ磐ノ迫ニ流レ留タル木ノ葉ヲ取上テ見シカ一ノ詩ヲ只柿ノ葉ニ書キ若シ有シ我詩ヲ見付ケル□思テ取テ置タル也ト男此レ□難レ忍ク思ケム然レバ夫妻ノ契前ノ世ノ宿世也ケリ互ニ思ケルト語リ傳ヘタトヤ

◎合璧事類

唐僖宗時。于祐於御溝拾一紅葉。題詩云。流水何太急。深宮盡日閒。殷勤謝紅葉。好去到人間。祐題一葉云。曾聞葉上題紅怨。葉上題詩寄阿誰。置溝上流。爲宮女韓拾之。後祐託韓泳門館。因帝放宮女三千人。泳以韓有同姓之親。作伐嫁祐。及成禮。各於笥中取紅葉。相示曰。事豈偶然。乃前定也。

◎本事詩

唐顧況在洛。乘間與一二詩友遊於苑中。流水中得大梧葉。上題詩曰。一入深宮裏。年々不見春。聊題一片葉。寄與有情人。況明日於上游。亦題葉上泛於波中。詩曰。花落深宮鶯亦悲。見驚啼柳絮飛。上陽宮女斷腸時。帝

城廣記作不禁東流水。葉上題詩欲寄誰廣記作後十餘日。有客來苑中尋春。又於葉上得一詩。故以示況。詩曰。
一葉題詩出禁城。誰人酬和廣記作獨含情。自嗟不及波中葉。蕩漾乘風取次行。

●俊頼無名抄卷下

もろこしに吳招孝といひける人の、九重のうちより流れ出てたる川のながれにあそびけるに、柿の葉の
もみぢしたりけるに、詩をつくりてかきたりけるが、ながれ出てたりけるを見つけて、みけるより後、女
の手にてありければ、いかなる人つくりけむと、この人のゆかしさに、物おもひになりて、すべきやうも
おぼえざりければ、その詩の和をつくりて、同じ柿の葉にかきて、その川のみなかに流しければ、九重
のうちに入りけり。その後こひしきたびに、この柿のはの詩をとりいて見て、なくより外のことな
かりけり。さて年ごろをふるに、かの宮の中にこめられて、いたづらに年をおくる女御、かずあまたつも
りぬれば、いとをし、われをたのめて、いたづらに年をおくる。せうくをば、おのく親にかへして、
をとこをもせさせんとて、かへさせ給ひけり。その一人、かの招孝をむこにとりつ。招孝、かの柿のはに
詩かさつけたる人のみこひしくて、いかにもことくせんともおぼえざりけれど、親のすることなれ
ば、心にもあらずむこにはなりてけり。この女のおもふさまにて、あはれに心ぐるしかりければ、かのあ
けくれかなしびつる人も、やうくおもひわすれてふるほどに、女のいひけるは、我が物おもひ人のす
がたにて見えしは、いかなることぞや。ねがはくは我にかくす事なかれ。招孝こたへていは、われむか
し、宮のほとりしてあそびき。水のうへに木の葉のあるを見れば、女の手にてひとつの詩かけり。それ

を見て後、その手のぬしにあひあはんのおもひありて、今にわするることなし。しかはあれど、きみにし
たしくなりて後、このほかに思ひなくさめることありといへり。女これをきいて、その詩はいかにあり
し。又その詩の和作りたりしといひければ、しかありきといひければ、女この事をきくに、なみださきに
たちて、契りあるかならぬことをしりぬ。その詩は、みづからがせしなり。和の詩又みづからがもとにあ
りといひて、おのくとりいてたるを見れば、たがひにわが手にてあるに、おぼろげのちぎりにてあら
ずと知りぬ。そもくいかにしてか我が詩をばえし。この身、いたづらに月日をおくることをなげきて、
川のほとりにあそびき。岩のはさまにながれとまりたる木の葉を見れば、一つの詩あり。もしありしわ
が詩を見ける人の、つくりけるかとおもひて、あきたりつるなりとぞ申しける。これをきけば、妹背のな
からひは、ささの世のちぎりの、あるかならぬよりおもひよることなれば、あしよしとも、さだむべきに
あらぬことか。

臣下孔子道行値童子問申語 第九

今昔震旦ノ周ノ代ニ魯ノ孔丘ト云フ人有ケリ父ハ叔梁ト云フ母ハ顔ノ氏也此ノ孔丘ヲ世ニ孔子ト云フ此レ也身ノ長
九尺六寸也心賢テ悟リ深シ幼稚ノ時ニハ老子ニ隨テ文籍ヲ習フニ不悟得メト云フ事无シ長大ノ後ニハ身ノ才廣
テクシ弟子其ノ數多シ然レバ公ニ仕ヘテ政ヲ直シ私ニ行テハ人ヲ教フ惣ベテ事テシ不愚ラズ此レニ依テ國ノ人皆首ヲ臣
貴フ事无シ限シ而ル間孔子車ニ乗テ道ヲ行キ給フニ其ノ道ニ七歳許ノ童三人有テ戲レ遊ブ其ノ中ニ一人ノ童不ニ戲

臣下ノ二字
目次ニナラシ
衍字ナラシ

問テ云クノ
下脱文アラ

遊^ズ道ニ當テ土ヲ以テ城ノ形ヲ造レリ其ノ時ニ孔子其ノ側ニ來リ給テ童ニ語テ云ク汝等速ニ道ヲ避テ我ガ車ヲ可
レ過シト童咲テ云ク未ダ不^レ聞ズ車ヲ避ル城ヲ去ル車ヲ聞クト然レバ孔子車ヲ去テ城外ヨリ過ギ給ヒヌ
孔子童ニ問テ云ク汝ガ姓名何^{イカニ}ト童答テ云ク姓ハ長也我レ年八歳ガ^ル故ニ字无キ也ト孔子ノ云ク汝ヲ知ヤ何レノ
樹ニカ枝无キ何レノ牛ニカ犢无キ何レノ馬ニカ駒无キ何レノ夫ニカ婦无キ何レノ女ニカ夫无キ何レノ山ニカ石无キ何レ
ノ水ニカ魚无キ何レノ人ニカ字无キト童答テ云ク枯木ニハ枝无シ土牛ニハ犢无シ木馬ニハ駒无シ仙人ニハ婦无シ玉女
ニハ夫无シ大山ニハ石无シ井ノ水ニハ魚无シ空城ニハ人无シ小兒ニハ字无シト孔子此レヲ聞テ此ノ童只ノ者ニハ非
ト^{ケリ}思テ過ギ給ヒヌ亦孔子道ヲ行キ給フニ七八歳許ノ二人ノ童道ニ值ヒヌ孔子ニ問テ云ク一人ノ童ノ云ク日ノ始メテ
出ヅル時ハ日近シ日中ニ至テハ日遠シト一人ノ童ノ云ク日ノ始メテ出ヅル時ハ日遠シ日中ニ至テハ日近シト先ノ童亦
返シテ云ク日ノ出ル時ハ熱クシ湯ヲ探ルガ如シ日中ニ至バ^レ涼シト後ノ童亦返テ云ク日ノ出ル時ハ涼シ日中ニ至レバ
熱クシ湯ヲ探ルガ如シ豈ニ日ノ出ヅル時^ニ日中ヲ遠シト云ハム如^ク此ク二人シテ諍ヲ問フト云モ孔子裁^ト給
フ事不能ズ其ノ時ニ二人ノ小兒咲テ云ク孔子ハ悟リ廣クシ不^レ知ヌ事不^レ在^{コソ}ト知リ奉ルニ極メテ疎^ニ在^レト孔
子此レヲ聞キ給テ此ノ二人ノ童ヲ感ジテ只者ニハ非ヌ者也^{ナム}讀メ給ヒケ昔ハ小兒モ如此キ賢ケル也只孔子諸ノ弟
子共ヲ引具シテ道ヲ行キ給ニ道ノ邊ナル垣ヨリ馬ノ頭ヲ指出テ有ケル見給テ孔子此ニ牛ノ頭ヲ指出タル宣^レレバ弟子
共正シク馬ヲ牛ト宣フ怪キ事也ト思ドモ^{ミテ}終道^ヲ各ノ心得ムト思ヒケ顏回ト云フ第一ノ御弟子一里ヲ行
テ心得ケル様日讀ノ午ト云フ字ヲ頭ヲ指出シテ書タル牛ト云フ字ニテ有レバ此ノ馬ノ頭ヲ指出バ^レ人ノ心ヲ試ムト牛
ト宣ケル也ト^{ケリ}思テ師ニ問ヒ申ケレ然カ也ト答ヘ給ケル次々ノ御弟子共次第二十六町ヲ行テゾ心得ケル然レバ人ノ

心ノ疾キ遲キ顯也孔子ハ此ク智リ廣ク在^レバ世ノ人皆首ヲ但テ貴トヒ敬ケルト語リ傳ヘダトヤ

○法苑珠林卷四日月篇地動部

列子曰。孔子東游。見兩小兒辯鬪問其故。一小兒曰。我以日始出去人近。而日中時遠。一小兒以爲日初出時
遠。而日中時近也。一兒曰。日初出大如車蓋。及其中纒如槃蓋。此不爲遠者小而近者大乎。一小兒曰。日初
出滄滄涼涼。及其中如探湯。此不爲近者熱而遠者涼乎。孔子不能決也。兩小兒笑曰。孰謂汝多智乎。

桓譚新論曰。予小時聞閭巷言。孔子東遊。見兩小兒辯鬪問其故。一兒曰。我以日始出時近日中時遠。一兒以
日初出遠日中時近。長水校尉關子楊。以爲天去人上遠而四傍近。以星宿昏時出東方。其間甚疎相去丈餘。
夜半在上視之。甚數相去唯一二尺。日爲天陽火爲地陽。地陽上昇天陽下降。今置火於地。從傍與上診其熱。
遠近不同乃差半焉。日中在上當天陽之衝。故熱於始出。從太陽中來故涼。西在桑榆大小雖同。氣猶不如清
朝也。

◎世說卷十二夙慧篇

晉明帝數歲。坐元帝膝上。有人從長安來。元帝問云々。因問明帝。汝意謂長安何如日遠。答曰日遠。不聞人
從日邊來。居然可知。元帝異之。明日集群臣宴會。告以此意。更重問之。乃答曰日近。元帝失色曰。爾何故異
昨日之言耶。答曰。舉目見日。不見長安。

(晉書卷六明帝紀參閱)

◎宇治拾遺物語卷十二八歳童孔子問答の事

今昔物語集 卷十

今はむかしもろこしに、孔子道をゆきたまふに、八つばかりなる童あひぬ。孔子にとひ申すやう、日の入る所と洛陽と、いづれか遠きと、孔子いらへ給ふやう、日の入るところは遠し、洛陽は近し。童の申すやう、日の出て入るところは見ゆ、洛陽はまだ見ず。されば日の出づるところは近し、洛陽は遠しと思ふと申しければ、孔子かとき童なりと感じたまひける。孔子には、かく物とひかくる人もなきに、かくとひけるは、たゞものにはあらぬなりけりとぞ人いひける。

●俊頼無名抄卷下

かきこしに午を牛とはいはねども人の心のほどをしるかな

この歌は四條中納言の、小式部内侍のがり遣はしける歌なり。その心は、孔子の弟子どもを具して道をおはしけるに、垣のひまより、馬のかしらをさしいててありけるを見て、牛よなどのたまひければ、弟子ども怪しと思ひて、あるやうあらんとおもひけるに、顔回といひける第一の弟子、十六町をゆきて心えけり。ひよみの午といふ文字の頭さし出たるは、牛といふ文字なれば、人のこゝろを見んとて、のたまひけるなりと思ひて、問ひ申しければ、しかなりとぞ答へ給ひける。つき／＼の弟子どもは、しだいに十六町を行きてぞ心えける。されば、それならねども、人の心を見んとて讀まれたるなり。

●十訓抄中卷

魯の仲尼、門徒を具して路におはしけるに、或所に、垣より馬の頭をさし出だしたるを見て、牛とのたまひけり。始めはこれと思ひわかず、各案じめぐらすに、顔回よりはじめて、思慮の深き、次第に心得ける。

ひよみの午の頭を出だすは牛なり。

孔子逍遙值榮啓期聞言語 第十

今昔震旦ニ孔子云フ所ニ林ノ中ノ岳ノ有ル所ニ行テ逍遙シ給ケリ孔子ハ琴ヲ彈キ給フ弟子十餘人許ヲ引將テ廻ニ令レ居メテ文ヲ令レ讀ム其ノ時ニ海ヨリ小船ニ乗タル翁ノ帽子ヲ着タル漕ギ來テ船ヲ葦ニ繫テ陸ニ登テ杖ヲ突テ來テ孔子ノ彈キ給フ琴ノ調ベ聞ク孔子ノ弟子等此ノ翁ヲ見テ怪シビ思フ問ニ翁弟子一人ヲ招ク然レド弟子等目不見係テ不レ行ズ翁強ニ招ク時ニ一人ノ弟子寄リメ翁弟子ニ問テ云ク此ノ琴彈キ給フ人ハ誰ソ若シ國ノ王カト弟子國ノ王ニモ非ズト翁云ク然ラバ國ノ大臣カト弟子云ク大臣ニモ非ズト翁云ク然ラバ國ノ司カト弟子云ク國ノ司ニモ非ズト翁云ク然ラバ何人ソト弟子云ク只國ノ賢コキ人トシ公ノ應直シ惡キ事ナ止メテ吉キ事ヲ勸ムル人也ト翁此レヲ聞テ疵咲テ云ク此レ極タル嗚呼人也ト云テ去メ弟子翁ノ言ヲ聞テ歸テ孔子ニ此ノ事ヲ語ル孔子此レヲ聞テ云ク其レハ極タル賢キ人ソ有ナレ速ニ可ニ呼還シト弟子走り行テ翁ノ今船ニ乗テ既ニ漕ギ出ラ呼ビ還ス翁被レ呼テ還テ孔子ニ會メ孔子翁ニ云ク君何人ソト翁云ク我レ何人ニモ無シ只船ニ乗テ心ヲ行ガ爲ニ罷リ行ク翁也亦君ハ何事ナ役トシ給フ人ソト孔子云ク己ハ世ノ應直シ惡キ事ナ止メ善キ事ヲ行ガ爲ニ罷リ行ク者也ト翁云ク其レ極テ墓无キ事也世ニ蔭ヲ賦フ人有リ晴ニ出デテ蔭ヲ離レム走ル時ニハ蔭ヲ離ル、事无シ蔭ニ寄テ心靜ニ居ナバ蔭ハ可レ離キニ然ハ不レ爲ズ晴ニ出デテ離々ト爲ル時ニハ身ノ力コソ盡レド蔭離ル、事无シ亦犬ノ死骸水ニ流レテ下ル此レヲ要シテ走ル者有リ即チ水ニ溺レテ死ヌ然レバ此等ノ譬ノ如ク此レ極テ益无キ事也只可然キ所ニ居

離々一本離
ニ作リ又上
ニ蔭ヲトア

示ハ占ノ假
カ此ノ生一本
此ノ生一本
作ル

所ヲ示テ靜ニ一生ヲ被レ送ム。此レ此ノ生ノ望也而ルニ其ノ事ヲ不レ思_テ心ヲ世々ニ染メテ被レ騷ル、事極テ墓无キ事也我カ身ニハ三ノ樂有リ人ト生タル此レ一ノ樂也人ニ男女有リ而ルニ男ト生ル此レ二ノ樂也我レ今年九十五ニ成ル此レ三ノ樂也ト云テ孔子ノ答ヲ不レ聞_テ還リ行テ船ニ乗テ漕ギ出テ去_テ孔子其ノ漕ギ行ク翁ノ後ヲ見テ二度ビ禮シ給フ船ニ乗テ行ク棹ノ音不レ聞ズ成_テ禮ミ入テ居給ヘリ棹ノ音不レ聞ズ成_テ後ニ車ニ乗テ還リ給ケル此ノ翁ノ名ヲ榮啓期トナ_ヒヒケ人ノ語リ傳ヘタトヤ

○莊子卷六漁父篇

孔子遊乎緇帷之林。休坐乎杏壇之上。弟子讀書。孔子絃歌鼓琴。奏曲未半。有漁父者下船而來。鬢眉交白。被髮揄袂。行原以上距陸而止。左手據膝。右手持頤以聽。曲終。而招子貢子路二人俱對。客指孔子曰。彼何爲者也。子路對曰。魯之君子也。客問其族。子路對曰。族孔氏。曰。孔氏者何治也。子路未應。子貢對曰。孔氏者。性服忠信。身行仁義。飭禮樂。選人倫。上以忠於世主。下以化於齊民。將以利天下。此孔氏之所治也。又問曰。有士之君與。子貢曰非也。侯王之佐與。子貢曰非也。客笑而還行。言曰。仁則仁矣。恐不免其身。苦心勞形以危其真。嗚呼遠哉。其分於道也。子貢還報孔子。孔子推琴而起曰。其聖人與。乃下求之至於澤畔。方將杖屨而引其船。顧見孔子還嚮而立。孔子反走再拜而進。客曰。子將何求。孔子曰。曩者先生有緒言而去。丘不肖未知所謂。竊待於下風。幸聞咳唾之言。以卒相丘也。客曰。嘻甚矣。子之好學也。孔子再拜而起曰。丘少而修學。以至於今六十九歲矣。無所得聞至教。敢不虛心。客曰。同體相從。同聲相應。固天地之理也。吾請釋吾之所有。而經子之所以。子之所以者人事也。天子諸侯大夫庶人。此四者自正。治之美也。四者離位。而亂莫大焉。官治其

職人憂其事。乃無所陵。故田荒室露。衣食不足。徵賦不屬。妻妾不和。長少無序。庶人之憂也。能不勝任官事不治。行不清。白羣下荒怠。功美不有。爵祿不持。大夫之憂也。廷無忠臣。國家昏亂。工技不巧。貢職不美。春秋後倫不順天子。諸侯之憂也。陰陽不和。寒暑不時。以傷庶物。諸侯暴亂。擅相攘伐。以殘民用。禮樂不節。財用窮匱。人倫不飭。百姓淫亂。天子有司之憂也。今子既上無君侯有司之勢。而下無大臣職事之官。而擅飭禮樂。選人倫。以化齊民。不泰多事乎。且人有八疵。事有四患。不可不察也。非其事而事之。謂之總。莫之顧而進之。謂之佞。希意道言。謂之諂。不擇是非而言。謂之諛。好言人之惡。謂之讒。折交離親。謂之賊。稱譽詐僞以敗惡人。謂之隱。不擇善否。兩容頰適。偷拔其所欲。謂之險。此八疵者。外以亂人。內以傷身。君子不友。明君不臣。所謂四患者。好經大事。變更易常。以挂功名。謂之叨。專知擅事。侵人自用。謂之貪。見過不更。聞諫愈甚。謂之狠。人同於己。則可。不同於己。雖善不善。謂之矜。此四患也。能去八疵。無行四患。而始可教已。孔子愀然而歎。再拜而起曰。丘再逐於魯。削迹於衛。伐樹於宋。圍於陳蔡。丘不知所失。而離此四謗者何也。客悽然變容曰。甚矣子之難悟也。人有畏影惡迹而去之走者。舉足愈數。而迹愈多。走愈疾。而影不離身。自以爲尙遲。疾走不休。絕力而死。不知處陰以休影。處靜以息迹。愚亦甚矣。子審仁義之間。察同異之際。觀動靜之變。適受與之度。理好惡之情。和喜怒之節。而幾於不免矣。謹修而身。慎守其真。還以物與人。則無所累矣。今不修之身。而求之人。不亦外乎。孔子愀然曰。請問何謂真。客曰。真者。精誠之至也。不精不誠。不能動人。故強哭者。雖悲不哀。強怒者。雖嚴不威。強親者。雖笑不和。真悲無聲而哀。真怒未發而威。真親未笑而和。真在內者。神動於外。是所以貴真也。其用於人理也。事親則慈孝。事君則忠貞。飲酒則歡樂。處喪則悲哀。忠貞以功爲主。飲酒以樂爲主。處

喪以哀爲主。事親以適爲主。功成之美無一其迹矣。事親以適不論所以矣。飲酒以樂不選其具矣。處喪以哀無問其禮矣。禮者世俗之所爲也。眞者所以受於天也。自然不可易也。故聖人。法天貴眞不拘於俗。愚者反此。不能法天而恤於人。不知貴眞。祿々而受變於俗。故不足。惜哉子之蚤湛於僞。而晚聞大道也。孔子又再拜而起曰。今者丘得遇也。若天幸然。先生不羞而比之服役。而身教之。敢問舍所在。請因受業而卒學大道。客曰。吾聞之。可與往者。與之至於妙道。不可與往者。不知其道。慎勿與之。身乃無咎。子勉之。吾去子矣。乃刺船而去。延緣葦間。顏淵還車子路授綬。孔子不顧。待水波定不聞擘音。而後敢乘。子路旁車而問曰。由得爲役久矣。未嘗見夫子遇人如此其威也。萬乘之主千乘之君。見夫子未嘗不分庭伉禮。夫子猶有倨傲之容。今漁父杖桴逆立。而夫子曲要磬折。再拜而應。得無太甚乎。門人皆怪夫子矣。漁父何以得此乎。孔子伏軾而歎曰。甚矣由之難化也。湛於禮義有間矣。而樸鄙之心至今未去。進吾語汝。夫遇長不敬失禮也。見賢不尊不仁也。彼非至仁不能下人。下人不精不得其眞。故長傷身。惜哉不仁之於人也。禍莫大焉。而由獨擅之。且道者萬物之所由也。庶物失之者死。得之者生。爲事逆之則敗。順之則成。故道之所在聖人尊之。今漁父之於道可謂有矣。吾敢不敬乎。

○淮南子卷九主術訓

夫榮啓期一彈。而孔子三日樂。感于和〔高誘注〕孔子遊于太山。見榮啓期行乎郕之野。鹿裘帶索。鼓琴而歌。孔子問曰。先生所以樂何也。對曰。吾樂甚多。天生萬物。唯人爲貴。而吾得爲人。是一樂也。男女之別。男尊女卑。故以男爲貴。吾既得爲男矣。是二樂也。人生有不見日月不免襁褓者。吾既已行年九十矣。是三樂也。

貧者士之常也。死者人之終也。處常得終尙何憂哉。孔子曰。善乎能自寬者也。

◎宇治拾遺物語卷六帽子叟孔子と問答の事

今はむかしもろこしに、孔子林の中の岡だちたるやうなる所にて逍遙し給ふ。我は琴をひき、弟子どもは書をよむ。こゝに舟にのりたる叟の帽子したるが、舟を蘆につなぎて陸にのぼり、杖をつきて琴のしらべのをはるを聞く。人々あやしきものかなと思へり。このあきな、孔子の弟子どもを招くに、ひとり弟子まねかれてよりぬ。叟のいはく、この琴ひき給ふは誰ぞ、もし國の王かと問ふ。さもあらずといふ。さは國の大臣か。それにもあらず。國のつかさか。それにもあらず。さは何ぞと問ふに、たゞ國の賢き人として政をし、あしき事をなほし給ふ賢人なりとこたふ。翁あざわらひて、いみじき痴者シヤかなといひて去りぬ。御弟子不思議におもひて、聞きしまゝにかたる。孔子聞きて、賢き人にこそあなれ、とく呼び奉れと。御弟子はしりて、今舟こぎ出づるを呼びかへす、呼ばれて出て來たり。孔子のたまはく、何わざし給ふ人ぞ。あきないはく、させるものに侍らず、たゞ舟に乗りて、心をゆかさんがために、まかりありくなり。君は又何人ぞ。世の政をなほさんために、まかりありく人なり。叟のいはく、さはまりてはかなき人にこそ。世に影を厭ふものあり、晴に出てて離れんとはしる時、影はなるゝことなし。陰にゐて心のかに居らば、影はなれぬべきに、さはせずして、晴に出てて離れんとする時には、力こそつくれ、影はなるることなし。又犬の屍の水に流れてくだる、これを取らんとはしるものは、水に溺れて死ぬ。かくのごとくの無益の事をせらるゝなり。只しかるべき居所しめて、一生をおくられん、これ今生の望なり。この

事をせずして、心を世にそめてさわがるゝ事は、極めてはかなきことなりといひて、返答も聞かてかへり行き、舟にのりて漕ぎ出てぬ。孔子そのうしろを見て二度をがみて、棹の音せぬまでをがみ入りて居給へり。音せずなりてなん、車にのりて歸り給ひにけるよし、人のかたりしなり。

莊子 許借粟語 第十一

今昔震旦ノ周ノ代ニ莊子ト云フ人有ケリ心賢クシ悟リ廣シ家極テ貧クシ貯フル物无シ而ル間今日可レ食キ物絶メ心ニ思ヒ煩フ間ニ其ノ隣ニト云フ人有リ其ノ人ニ今日可レ食キ黄ノ粟ヲ請フニト云ク今日ヲ經テ我が家ニ千兩ノ金ヲ得メト其ノ時ニ在マセ其ノ金ヲ進ラム何デカ然カ止事无ク賢ク在マス人ニ今日食フ許ノ粟ヲ進ラム還テ我が爲ニ可レ恥辱シト莊子ノ云ク我レ一日道ヲ行キシ間ニ忽ニ後ニ呼ブ音有リ見還テ見ルニ呼ブ人无シ怪シト思テ吉ク見レバ車ノ輪ノ跡ノ窪ル所ニ大キナ鮒一有リ見レバ生キテ動キ迷フ何ゾノ鮒ニカ有ラム思テ寄テ吉ク見レバ水少許リ有ル所ニ鮒生キテ動ク我レ其ノ鮒ニ問テ云ク何ゾノ鮒ノ此ニハ有ソト鮒答テ云ク我レハ此レ河伯神ノ使トシ高麗ニ行ク也我レハ東ノ海ノ波ノ神也而ルニ不意ニ飛ビ誤テ此ノ窪ニ落テカクテ有也水少クシ喉乾テ我レ既ニ死ナム我レヲ助ケヨ思テ君ヲ呼ツル也ト我レ云ク今三日ヲ經テト云フ所ニ遊ガ爲ニ我レ行ムト其ノ所ニ汝ヲ將行テ放タム云ヘバ鮒ノ云ク我レ更ニ三日ヲ不レ可レ待ズ只今日一滯ノ水ヲ令レ得テ先ヅ喉ヲ潤トヘヨ云シカ鮒ノ云フニ隨テ一滯ノ水ヲ與ヘテ助ケテ然レバ彼ノ鮒ノ云シガ如ク我が今日ノ命物不レ食テハ更ニ不レ可レ生ズ後ノ千金益不レ有ジト云ケリ其ノ時ヨリ後ノ千金ト云フ事ハ如此ト云フ也トナ語リ傳ルヘトヤ

○莊子卷五外物篇

莊周家貧。故往貸粟於監河侯。監河侯曰諾。我將得邑金。將貸子三百金可乎。莊周忿然作色曰。周昨來。有中道而呼者。周顧視。車轍中有鮒魚焉。周問之曰。鮒魚來。子何爲者邪。對曰。我東海之波臣也。君豈有斗升之水而活我哉。周曰諾。我且南遊吳越之王。激西江之水而迎子可乎。鮒魚忿然作色曰。吾失我常與。我無所處。吾得斗升之水然活耳。君乃言此。曾不如早索我於枯魚之肆。

○說苑卷十一善說篇

莊周貧者。往貸粟於魏文侯。曰。待吾邑粟之來而獻之。周曰。乃今者周之來。見道傍牛蹄中有鮒魚焉。太息謂周曰。我尙可活也。周曰。須我爲汝南見楚王決江淮以溉汝。鮒魚曰。今吾在盆甕之中耳。乃爲我見楚王。決江淮以溉我。汝則求我枯魚之肆矣。今周以貧故來貸粟。而曰。須我邑粟來也而賜臣。卽來亦求臣傭肆矣。文侯於是乃發粟百鍾。送之莊周之室。

●宇治拾遺物語卷十五後の千金の事

今はむかし、もろこしに莊子といふ人ありけり。家いみじうまづして、けふの食物たえぬ。となり監河侯といふ人ありけり。それがもとへ、けふくふべき料の粟をこふ。監河侯がいはい、今日ありておはせよ。千兩の金をえんとす、それを奉らん。いかてかやんごとなき人に、けふまゐるばかりの粟をたてまつらん。返すくおのがはぢなるべしといへば、莊子のいはく、昨日みちをまかりしに、あとによばふ聲あり。かへりみれば人なし。たゞ車の輪あとの、くぼみたる所にたまりたる少しの水に、鮒一つふため

く。何ぞのふなにかあらんと思ひて、よりて見れば、すこしばかりの水に、いみじう大きな鮒あり。なにぞの鮒ぞと問へば、ふなのいはく、われは河伯の神の使に、江湖へ行くなり。それが飛びそこなひて、この溝に落ちりたるなり。のどかわき死なんとす。われをたすけよと思ひて、呼びつるなりといふ。こたへていはく、われ今二三日ありて、江湖といふ所にあそびしにいかんとす。そこにもて行きてはなさんといふに、魚のいはく、更にそれまでえまつまじ。たゞけふ、一提ばかりの水をもて、のどをうるへよといひしかば、さてなんとすけし。鮒のいひしこと、我が身にしりぬ。更にけふのいのち、物ははずば生くべからず。後の千のこがね、さらに益なしとぞいひける。それより後の千金といふ事、名譽せり。

莊子行人家主煞鴈備肴語 第十二

今昔震旦ニ莊子ト云フ人ケリ心賢クシ悟リ廣シ此ノ人道ヲ行ク間一ノ杣山ヲ通ル而ルニ杣ノ多ク木ノ中ニ鈎ツガノ鳴ナミ一ノ木有リ年久ク成レリ莊子此ノ木ヲ見テ杣人ニ問テ云ク此ノ木ノ年久ク成ルマ命ヲ持ツハ何ナル事ソト杣人答テ云ク杣ニハ吉ク直キ木ヲ撰テ取レバ此ノ木ハ鳴ミ鈎ニ依テ不用ノ物ニ材木ニモ不レ取バザレカク年久ク成タル也ト莊子然也ト聞テ過ア亦ノ日ニ成テ莊子ノ家ニ行ニ家ノ主饗ア儲テ令レ食ム先ツ酒ヲ令レ吞ニ肴ノ无レバ其ノ家ニ鴈ニ飼フ家ノ主其ノ鴈一ヲ煞シテ御肴ニ備ヘヨ云フニ其ノ鴈ヲ預リテ飼フ人ノ申サク吉ク鳴ク鴈ヲ可レ煞キ不レ鳴ク鴈ヲ可レ煞ト主人ノ云ク鳴クヲ生ケテ令レ鳴メヨ不レ鳴クヲ煞シテ御肴ニ可レ備シト主人ノ云フニ隨テ不レ鳴ク鴈ノ頭ヲネデテ煞シテ調テ御肴ニ備ヘタ其ノ時ニ莊子ノ云ク昨日ノ杣山ノ木ハ不用ナル以テ命ヲ持ツ今日ノ主人ノ鴈ハ才

有ルヲ以テ命ヲ生ケ此レヲ以テ心得ルニ賢キ者モ愚ナル者モ命ヲ持ツ事ハ其レニ不レ依ズ只自然ラ令レ然ル事也然レバ才有レバ不レ死ザル不用ナレ死ヌルゾ不レ可レ定ズ不用ノ木モ命長シ不レ鳴ク鴈モ忽ニ死ヌ此レヲ以テ諸ノ事ハ可レ知シト此レ莊子ノ言也トナ語リ傳ヘタトヤ

○莊子卷四山木篇

莊子行於山中。見大木枝葉盛茂。伐木者止其旁而不取也。問其故。曰。無所可用。莊子曰。此木以不材得終其天年。莊子出於山。舍於故人之家。故人喜。命豎子殺雁而烹之。豎子請曰。其一能鳴。其一不能鳴。請奚殺。主人曰。殺不能鳴者。明日弟子問於莊子曰。昨日山中之木。以不材得終其天年。今主人之雁。以不材死。先生將何處。莊子笑曰。周將處夫材與不材之間。

●十訓抄上卷

大方世にある道の、煩はしくふるまひにくき事、薄き氷を踏むよりも危く、けはしき流れに竿さすよりも甚だしきものなり。莊子山を過ぎ給ふに、木を伐るものあり。直なるをばきりて、ゆがめるをばさらず。又人の家にとどり給ふに、雁二つあり。主よく鳴くをばいけて、鳴かざるをば殺しつ。明くる日、弟子、莊子に申していはく、昨日山中の木は、直なるをば伐りて、ゆがめるをばさらず。又家の二つの雁は、よく鳴くをばいけて、なかなざるをば殺しつ。よき木もさらされ、よくなかなざるをも殺されぬと申す。莊子いはく、世の中のためし、これにありと答へ給へり。かゝるにつけても、よく慥慢をばすて、身を慎むべしと見えたり。

莊子見畜類所行走迹語 第十三

今昔震旦ニ莊子ト云フ人有ケリ心賢テ悟リ廣シ此ノ人道ヲ行ク間澤ノ中ニ一ノ鷺有テ者ヲ伺テ立テリ莊子此レヲ見テ竊ニ鷺ヲ打ムト思テ杖ヲ取テ近ク寄ルニ鷺不レ迹ズ莊子此レヲ恠ムテ彌ヨ近ク寄テ見レバ鷺ノ一ノ蝦チ食シテ立テル也ケリ然レバ人ノ打ムト爲ルヲ不レ知ザル也ト知ヌ亦其ノ鷺ノ食ムト爲ル蝦チ見レバ不レ迹ズ有リ此レ亦一ノ小虫チ食ムト鷺ノ伺フヲ不レ知ズ其ノ時ニ莊子杖ヲ棄テ、迹テ心ノ内ニ思ハク鷺蝦皆我レチ害セム爲ル事チ不レ知ズシ各他チ害セム事チノ思フ我レ亦鷺チ打ムト爲ルニ増サル者有テ我レチ害ト爲ルヲ不レ知ジ然レバ不レ知ジ我レ迹ナム思テ走リ去ヌ此レ賢キ事也人如此キ可レ思シ亦莊子妻ト共ニ水ノ上ヲ見ルニ水ノ上ニ大キナ一ノ魚浮ビ遊ブ妻此レヲ見テ云ク此ノ魚定メテ心ニ喜ブ事可有シ極テ遊ブト莊子此レヲ聞テ云ク汝ハ何デ魚ノ心ヲバ知ゾト妻答テ云ク汝ハ何ア我ガ魚ノ心ヲ知リ不レ知バ知ゾト其ノ時ニ莊子ノ云ク魚ニ非バザレ魚ノ心チ不レ知ズ我レニ非バザレ我ガ心チ不レ知ズト此レ賢キ事也實ニ親シト云モヘド人他ノ心チ知ル事无シ然レバ莊子ハ妻モ心賢ク悟リ深カリケリ語リ傳ヘタトヤ

○莊子卷四山木篇

莊周遊乎雕陵之樊。視一異鵠自南方來者。翼廣七尺。目大運寸。感周之類而集於栗林。莊周曰。此何鳥哉。翼殷不逝。目大不覩。蹇裳躃步。執彈而留之。視一蟬方得美蔭而忘其身。螳螂執翳而搏之。見得而忘其形。異鵠從而利之。見利而忘其真。莊周怵然曰。噫。物固相累。二體相召也。捐彈而反走。虞人逐而許之。莊周

反入三月不庭。爾且從而問之。夫子何爲頃間甚不庭乎。莊周曰。吾守形而忘身。觀於濁水而迷於清淵。且吾聞諸夫子。曰。入其俗從其俗。今吾遊於雕陵而忘吾身。異鵠感吾類。遊於栗林而忘真。栗林虞人以吾爲戮。吾所以不庭也。

費長房夢習仙法至蓬萊返語 第十四

今昔震旦ノ□ニ代ニ費長房ト云フ人有ケリ道ヲ行ケル間途中ニ枯レテ連タル死人ノ骨有リ行キ違フ人ニ踏マル費長房此レヲ見テ哀ビノ心ヲ成シテ此ノ骨ヲ取テ道邊チ去ケテ土ヲ深ク掘テ令レ埋メツ其ノ後費長房ノ夢ニ誰トモ不レ知ヌ人ノ氣色人ニモ不レ似ヌ體ナル來テ費長房ニ語テ云ク我ニ死テ後骸道ノ中ニ有テ行キ違フ人ニ踏レツ可ニ取隱キ人无キニ依テ如此ク踏レツ歎キ悲シ思ヒツ問君此ノ骸ヲ見テ哀ビノ心ヲ以テ令ニ埋隱メ給ハレ我レ喜ビ思ヒ進ル事无レ限シ我ガ實ノ魂ハ死テ後天ニ生レテ樂チ受ル事无レ限シ亦骸ヲ護ラム爲ニ一ノ魂骸ノ邊チ不レ去ズシ副ヒ居タル也而ルニ君ノカク令レ埋隱メ給ハレ其ノ喜ビ申ガム爲ニ參ツル也我レ此ノ事チ可ニ報申キ様无シ但シ我レ昔シ生タリ時仙ノ法ヲ習テ行ヒキ其ノ習ヒ子今不レ忘ズ然レバ其レヲ傳ヘ申サム費長房答テ云ク我レ其ノ骸チ誰ト不レ知ズト云ヘド道ニ有テ人ニ踏レシ哀ブガ故ニ埋隱シテ而ルニ今來テ仙ノ法ヲ傳ヘ教ヘム事喜ビ速ニ我レ可レ習シト然レバ夢ノ内ニ此レヲ習フ習ヒ取リツ見テ夢覺ヌ其ノ後習ヒ如ク行ニ忽ニ身輕ク成テ即チ虚空ニ飛ブニ障リ无シ此レヨ後費長房仙ト有ケリ然レバ自然ラ道ノ邊ニ骸有テ恥カシ人ニ踏ナバ可ニ埋隱シ其ノ魂必ズ喜ブ事也トナ語リ傳ヘタトヤ

返字目次及
シ一本ニナ
震且ノ下
漢トアルベ
違フ諸本還
ルニ作ル

◎後漢書卷七十二下方術傳

費長房者汝南人也。曾爲市掾。市中有老翁賣藥。懸一壺於肆頭。及市罷輒跳入壺中。市人莫之見。唯長房於樓上觀之異焉。因往再拜奉酒脯。翁知長房之意其神也。謂之曰。明日可更來。長房旦日復詣翁。翁乃與入壺中。唯見玉堂嚴麗。旨酒甘肴盈衍其中。共飲畢而出。翁遂不聽與人言之。後乃就樓上候長房曰。我神仙之人。以過見責。今事畢當去。子寧能相隨乎。樓下有少酒與卿爲別。長房使人取之不能勝。又令十人扛之猶不舉。翁聞笑而下樓。以一指提之而上。視器如一升許。而二人飲之終日不盡。長房遂欲求道。而願家人爲憂。翁乃斷一青竹。度與長房身齊。使懸之舍後。家人見之即長房形也。以爲縊死。大小驚號遂殯葬之。長房立其傍。而莫之見也。於是遂隨從入深山。踐荆棘於群虎之中。留使獨處。長房不恐。又臥於空室。以朽索繫萬斤石於心上。衆蛇競來齧索且斷。長房亦不移。翁還撫之曰。子可教也。復使食糞。糞中有三蟲。臭穢特甚。長房意惡之。翁曰。子幾得道。恨於此不成如何。長房辭歸。翁與一竹杖曰。騎此任所之則自至矣。既至可以杖投葛陂中也。又爲作一符曰。以此主地上鬼神。長房乘杖須臾來歸。自謂去家適經旬日。而已十餘年矣。即以杖投陂。顧視則龍也。家人謂其久死不信之。長房曰。往日所葬但竹杖耳。乃發冢剖棺杖猶存焉。

孔子爲教盜跖行其家怖返語 第十五

今昔震旦ノ□代ニ柳下惠ト云フ人有ケリ世ノ賢キ人トシ人ニ重ク被レ用レタ其ノ弟ニ盜跖ト云フ人有リ一ノ山ノ懷ヲ棲テ諸ノ惡ク武キ人ヲ多ク招キ集メテ我が具足トシ他人ノ物ヲバ善惡ヲ不撰ズ我が物トス遊ビ行ク時ニハ此

代ノ上周ノトアルベシ

ノ惡ク猛キ者共チ引キ具セル事既ニ二三千也道ヲ亡シ人ヲ煩シ諸ノ不吉マ事ノ限リヲ好テ業トス而ル間兄ノ柳下惠道ヲ行ク間ニ孔子會ヒ給ヌ孔子柳下惠ニ語テ云ク汝ヤ何レノ所ヘ行ソ自ラ面リ申サム思フ事ノ有ツル幸ニ會ヒ給ヘリ柳下惠何事ヲ宣ハム爲ルゾ孔子ノ云ク面リ申サム思フ事ハ君ガ御弟ノ盜跖諸ノ惡キ事ノ限リヲ好ムテ諸ノ猛ク惡キ輩ヲ招キ集テ伴テ多シ人ヲ令レ歎メ世ヲ亡ス何ソ君兄トシ不ニ教給ゾト柳下惠答ヘテ云ク盜跖ハ弟也ト云ヘド我が教ヘニ可レ隨キ者ニ非ズ然レバ年來歎キ乍ラ不レ教ザル也ト孔子ノ云ク君不レ教バ我レ彼ノ盜跖ガ所ニ行テ教ムト思フ何ニト柳下惠答テ云ク君更ニ盜跖ガ所ニ行テ不レ可ニ教給ズ君妙ナル御言ヲ盡シテ教ヘ給フト云ヘド更ニ可レ隨者ニ非ズ還テ惡キ事出來ナム努々其ノ事不レ可有ズト孔子ノ云ク惡シト云モ盜跖人ノ身受ル者ナレ自然ヲ善キ事ヲ云ハム趣ク事モ有リナ其レ兼テ不承引ジト云テ君兄トシ不レ教ズシ不レ知顔ヲ作テ任セテ見給フハ極メテ惡キ事也吉々シ見給ヘ自ラ行テ教ヘ直シテ見セ進ラム言ヲ吐テ去リ給ヌ其ノ後孔子盜跖ガ所ニ御マ馬ヨリ下テ門ニ立テ見レバ有ル者皆或ハ甲冑ヲ着テ弓箭ヲ帶セリ或ハ刀劍ヲ横タヘ兵仗ヲ取レリ或ハ鹿鳥等ノ諸ノ獸ヲ斃ヌ物ノ具等ヲ陳无ク置キ散セリ如此ク諸ノ惡キ事ノ限リヲ仕タリ孔子人ヲ招テ云ヒ入レサ給フ魯ノ孔丘ト云フ人參レリ使還リ來テ云ク音ニ聞キ及フ人ナリ先ヅ此ニ來ム事何ニ依テソ來ル我レ聞ク行テ人ヲ教フル者ナリ若シ教ガ爲ニ來ルカ然ラバ來テ可レ教シ我が心ニ叶ハム用キム不叶ズバ肝膈ニ作リテム云ヒ出タリ其ノ時ニ孔子盜跖ガ前ニ進ミ出テ庭ニシ先ヅ盜跖ヲ禮シ給フ其ノ後昇テ座ニ着ク盜跖ヲ見レバ甲冑ヲ着タリ劍ヲ帶シ銛ヲ取レリ頭ノ髮ハ三尺許ニ上レリ亂タル事蓬ノ如シ目ハ大ナル鈴ヲ付ガ如シテ見廻シ鼻ヲ吹キイラハカシテ齒ヲ上咋テ鬚ヲイラハカシテ居タリ盜跖ガ云ク汝ガ來レル故ハ何ソ慥ニ可レ申シト其ノ音嘖レル音ニ高クシ甚怖シキ事无限シ孔子此レヲ聞テ思給ハク兼テハ糸カタ

心ノ下一本
オキテトア

取リノ一本
ハツシトア

怖シ氣ナル者トハ不^ツ思^{ザリ}形有様ヲ見音ヲ聞クニ更ニ人ト不^レ思^ズ然レバ心肝碎ケテ振^ル然^レモ思^ヒ念^ジテ孔子云
 ヒ出シ給^ハク人ノ世ニ有^ル事ハ皆道理ヲ身ノ^カ心ノ^ト心ノ^トト爲^ル者也今日天ヲ首ニ頂^キ地ヲ足ニ踏^ヘ四方ヲ固
 メト公ニ敬^ヒ奉^リ下ヲ哀^ビ人ニ情ヲ置^クヲ以テ事ト爲^ル者也而ルニ君承^ハレ心ノ恣ニ惡^キ事ヲ好^ミ給^フト惡^キ事ヲバ
 シ^ンカミ當時ハ心ニ叶^フ様^ドモ終^ニハ惡^キ事也然レバ猶^ハ人ハ善^キニ隨^フナム善^キ事ニハ爲^ル然レバ如^レク申^スニ隨^テ御^ベキ也此
 ノ事ヲ申^サム爲^ニ參^リ來^ツル也盜^跖疵^疾疾^テ雷^ノ如^ク音^ヲ舉^テ云^ク汝^ガ云^フ所^ノ事共一^トシ不^レ當^ズ其^ノ故^ハ昔^シ
 堯舜ト申^ス二人ノ國王御坐^シテ世ニ貴^バレ給^フ事无^レ限^キ然^レモ其^ノ子孫世ニ針指^ス許^ノ所^ヲ不^レ知^ズ亦世ニ賢^キ
 人ハ伯夷叔齊也然^レモ首陽山ノ山ニ臥^セリシ^バ餓^ニ死^ニキ亦汝^ガ弟子ニ顔回ト云^フ者有^キ汝^ガ賢^ク教^ヘ立^タリ云^ヘド
 不^レ覺^ニシ命短^クシ死^ニキ亦汝^ガ弟子ニ子路ト云^フ者有^リキ衛^ノ門^ニ被^レ煞^レ然^レバ賢^キ輩^モ終^ニ賢^キ事无^シ
 亦惡^キ事ヲ我^レ好^ムト云^フモ災身^ニ不^レ來^ズ被^レ讚^ル者四日五日ニ不^レ過^ズ被^レ謗^ル者亦如^レ此^シ然^レバ善^キ事モ永^ク
 被^レ讚^レ惡^キ事モ永^ク被^レ謗^ル事无^シ此^レニ依^テ善^キ事モ惡^キ事モ只我^ガ好^ニ隨^テ容^止ス^ベ也汝^ガ亦木ヲ刻^テ冠^トシ
 皮ヲ以テ衣^リテ世ヲ恐^レテ公ニ仕^レモ再^ビ魯ニ追^レ跡^ヲ衛ニ削^ラル何^ゾ不^レ賢^ヌ然^レバ汝^ガ云^フ所^ノ每^事ニ疎^カ也汝^ガ速
 ニ走^リ還^テ去^ネトシ可用^キ事无^シト云^フ時ニ孔子亦可^レ云^キ事ヲ思^ヒ給^ハザリ座^ヲ起^テ急^ギ出^テ給^ヌ馬^ニ乘^リ給^フ
 ニ吉^ク恐^レ給^レヒニケ轡^ヲ二度^ビ取^リシ^テ燈^ヲ頻^ニ踏^ミ誤^リ給^フ此^レヲ世ノ人孔子倒^レシ給^フト云^フ也ム語^リ傳^タハ
 ルトヤ

○莊子卷六盜跖篇

孔子與柳下季爲友。柳下季之弟。名曰盜跖。盜跖從卒九千人。橫行天下。侵暴諸侯。穴室樞戶。驅人牛馬。取
 人婦女。貪得忘親。不顧父母兄弟。不祭先祖。所過之邑。大國守城小國入保。萬民苦之。孔子謂柳下季曰。夫
 爲人父者必能詔其子。爲人兄者必能教其弟。若父不能詔其子。兄不能教其弟。則無貴父子兄弟之親矣。今
 先生世之才士也。弟爲盜跖。爲天下害而弗能教也。丘竊爲先生羞之。丘請爲先生往說之。柳下季曰。先生
 言。爲人父者必能詔其子。爲人兄者必能教其弟。若子不聽父之詔。弟不受兄之教。雖今先生之辯將奈之何
 哉。且跖之爲人也。心如湧泉意如飄風。強足以拒敵。辯足以飾非。順其心則喜。逆其心則怒。易辱人以言。先生
 必無往。孔子不聽。顏回爲馭子貢爲右。往見盜跖。盜跖乃方休卒徒太山之陽。膾人肝而餽之。孔子下車而前。
 見謁者曰。魯人孔丘聞將軍高義。敬再拜謁者。謁者入通。盜跖聞之大怒。目如明星。髮上指冠。曰。此夫魯國
 之巧僞人孔丘非邪。爲我告之。爾作言造語。妄稱文武。冠枝木之冠。帶死牛之脅。多辭謬說。不耕而食不織而
 衣。搖唇鼓舌擅生是非。以迷天下之主。使天下學士不反其本。妄作孝弟。而徼倖於封侯富貴者也。子之罪大
 極重。疾走歸。不然我將以子肝益畫餚之膳。孔子復通曰。丘得幸於季。願望履幕下。謁者復通。盜跖曰。使來
 前。孔子趨而進。避席反走。再拜盜跖。盜跖大怒。兩展其足。案劍噴目。聲如乳虎。曰。丘來前。若所言順吾意
 則生。逆吾心則死。孔子曰。丘聞之。凡天下有三德。生而長大美好無雙。少長貴賤見而皆說之。此上德也。知
 維天地能辯諸物。此中德也。勇悍果敢聚衆率兵。此下德也。凡人有此一德者。足以南面稱孤矣。今將軍兼此
 三者。身長八尺二寸。面目有光。唇如激丹。齒如齊貝。音中黃鍾。而名曰盜跖。丘竊爲將軍耻不取焉。將軍有
 意聽臣。臣請南使吳越。北使齊魯。東使宋衛。西使晉楚。使爲將軍造大城數百里。立數十萬戶之邑。尊將軍
 爲諸侯。與天下更始。罷兵休卒。收養昆弟共祭先祖。此聖人才士之行。而天下之願也。盜跖大怒曰。丘來

前。夫可規以利。而可諫以言者。皆愚陋恒民之謂耳。今長大美好。人見而說之者。此吾父母之遺德也。丘雖不吾譽。吾獨不自知邪。且吾聞之。好面譽人者。亦好背而毀之。今告我以大城衆民。是規我以利。而恒民畜我也。安可長久也。城之大者莫大乎天下矣。堯舜有天下。子孫無置錐之地。湯武立爲天子。而後世絕滅。非以其利大故邪。且吾聞之。古者禽獸多而人民少。於是民皆巢居以避之。晝拾橡栗暮棲木上。故名曰有巢氏之民。古者民不知衣服。夏多積薪冬則煬之。故命之曰知生之民。神農之世。臥則居々起則于々。民知其母不知其父。與麋鹿共處。耕而食織而衣。無有相害之心。此至德之隆也。然而黃帝不能致德。與蚩尤戰於涿鹿之野。流血百里。堯舜作立羣臣。湯放其主武王殺紂。自是之後。以強凌弱以衆暴寡。湯武以來。皆亂人之徒也。今子修文武之道。掌天下之辯。以教後世。縫衣淺帶矯言僞行。以迷惑天下之主。而欲求富貴焉。盜莫大於子。天下何故不謂子爲盜跖。而乃謂我爲盜跖。子以甘辭說子路而使從之。使子路去其危冠。解其長劍而受教於子。天下皆曰。孔丘能止暴禁非。其卒之也。子路欲殺衛君而事不成。身蒞於衛東門之上。是子教之不至也。子自謂才士聖人邪。則再逐於魯。削迹於衛。窮於齊。闕於陳蔡。不容身於天下。子教子路蒞此患。上無以爲身。下無以爲人。子之道豈足貴邪。世之所高莫若黃帝。黃帝尙不能全德。而戰涿鹿之野。流血百里。堯不慈舜不孝禹偏枯。湯放其主。武王伐紂。文王拘羑里。此六子者世之所高也。孰論之。皆以利惑其真。而強反其情性。其行乃甚可羞也。世之所謂賢士伯夷叔齊。辭孤竹之君。而餓死於首陽之山。骨肉不葬。鮑焦飾行非世。抱木而死。申徒狄諫而不聽。負石自投於河。爲魚鼈所食。介子推至忠也。自割其股以食文公。文公後背之。子推怒而去。抱木而燔死。尾生與女子期於梁下。女子不來水至不去。抱梁柱而死。此四者。無異於磔犬

流豕操瓢而乞者。皆離名輕死。不念本養壽命者也。世所謂忠臣者。莫若王子比干伍子胥。子胥沉江。比干剖心。此二子者。世謂忠臣也。然卒爲天下笑。自上觀之。至於子胥比干。皆不足貴也。丘之所以說我者。若告我以鬼事。則我不能知也。若告我以人事者。不過此矣。皆吾所聞知也。今吾告子以人之情。目欲視色。耳欲聽聲。口欲察味。志氣欲盈。人上壽百歲。中壽八十。下壽六十。除病瘦死喪憂患。其中開口笑者。一月之中不過四五日而已矣。天與地無窮。人死者有時。操有時之具。而託於無窮之間。忽然無異騏驎之馳過隙也。不能說其志意養其壽命者。皆非通道者也。丘之所言。皆吾之所棄也。亟去走歸。無復言之。子之道狂々汲々。詐巧虛僞事也。非可以全真也。奚足論哉。孔子再拜趨走出門。上車執轡三失。目茫然無見。色若死灰。據軾低頭不能出氣。歸到魯東門外。適遇柳下季。柳下季曰。今者闕然數日不見。車馬有行色。得微往見跖邪。孔子仰天而歎曰。然。柳下季曰。跖得無逆汝意若前乎。孔子曰。然。丘所謂無病而自灸也。疾走。料虎頭編虎鬚。幾不免虎口哉。

●宇治拾遺物語卷十五盜跖孔子と問答の事

これも今は昔、唐土に柳下惠といふ人ありき。世の賢きものにして人に重くせらる。その弟に盜跖といふ者あり。一つの山懷に住みて、もろくの悪しきものを招き集めて、おのが伴侶として、人の物をば我が物とす。ありく時は、この悪しきものどもを具する事二三千人なり。道にあふ人を滅ぼし、耻を見せ、よからぬ事の限りを好みて過ごすに、柳下惠道を行く時に孔子にあひぬ。いづくへおはするぞ、自ら對面して聞えんと思ふ事のあるに、かしこくあひ給へりといふ。柳下惠、いかなる事ぞと問ふ。教訓し聞え

んと思ふ事は、その舎弟、もろくの悪しき事の限りを好みて、多くの人を歎かす、など制し給はぬぞ。柳下惠答へていはく、おのれが申さん事をあへて用ふべきにあらず、されば歎きながら年月を経るなりといふ。孔子のいはく、そこ教へ給はずば、われ行きて教へん、いかゞあるべき。柳下惠いはく、更におはすべからず。いみじき詞を盡して教へ給ふとも、靡くべきものにあらず、かへりて悪しき事出て來なん、あるべきことにあらず。孔子いはく、悪しけれど、人の身を得たる者は、おのづから善き事をいふにつく事もあるなり。それに悪しかりなん、よも聞かじといふ事は僻言なり。よし見給へ、教へて見せ申さんと詞を放ちて、盗跖がもとへおはしぬ。馬よりあり門に立ちて見れば、ありとあるもの、猪鳥を殺し、もろくの悪しきことを集へたり。人を招きて、魯の孔子といふ者なん参りたるといひ入るゝに、即ち使歸りていはく、音に聞く人なり。何事によりて來たるぞ。人を教ふる人と聞く。我を教へに來たれるか。我が心にはなほ用ひん、かなはずば肝膈に作らんといふ。その時に、孔子進み出て庭に立ちて、まづ盗跖を拜みてのぼりて座に着く。盗跖を見れば、頭の髪は上さまにして、亂れたる事蓬のごとし。目大きにして見くるべかす。鼻を吹きいからかし、牙を噛み髭をそらして居たり。盗跖がいはく、汝來たれるゆえはいかにぞ、たしかに申せと、怒れる聲の高く恐ろしげなるをもていふ。孔子思ひ給ふ、かねても聞きし事なれど、かくばかり恐ろしき者とは思はざりき。かたちありさま、聲まで人とはおぼえず、肝心も碎けてふるはるれど、思ひ念じていはく、人の世にあるやうは、道理をもちて身のかざりとし、心のおきてとするものなり。天を戴き地を踏みて、四方を固めとし、おほやけを敬ひ奉り、下をあはれみ、人に

情を致すを事とするものなり。然るにうけたまはれば、心のほしきまゝに悪しきことをのみ事とするは、當時は心になふやうなれども、終には悪しきものなり。さればなほ人は善きに随ふをよしとす。しかれば、申すに随ひていまずかるべきなり。その事申さんと思ひて参りつるといふ。時に盗跖、雷のやうなる聲をして笑ひていはく、汝が言ふ事ども一つも當らず。そのゆえは、ひかし堯舜と申す二人の御門世にたふとまれ給ひき。しかれども、その子孫世に針さすばかりの所を知らず。又世に賢き人は伯夷叔齊なり。首陽山に臥せりて飢え死にき。又その弟子に顔回といふ者ありき。賢く教へ給ひしかども、不幸にして命みじかし。又同じき弟子にて子路といふ者ありき。衛の門にして殺されき。しかれば、賢き輩は遂にかしこき事もなし。われ悪しき事を好めど、わざはひ身に來らず。譽めらるゝもの四五日に過ぎず、誇らるゝもの又四五日に過ぎず。悪しき事も善き事も、長く譽められ長く誇られず。しかれば、我が好みに随ひふるまふべきなり。汝又木を折りて冠にし、皮を持ちて衣とし、世をおそり、おほやけに怖ぢ奉るも、二たび魯にうつされ、跡を衛にけづらる、などかしてからぬ。汝がいふ所まことに愚かなり。速に走りかへりね、一つも用ゐるべからずといふ。時に孔子又いふべき事覺えずして、座を立ちて、急ぎ出て馬に乗り給ふに、よく臆しけるにや、轡を二たび取りはづし、鐙をしきりに踏みはづす。これを世の人、孔子たふれすといふなり。

養由天現十日時射落九日語 第十六

代ノ上周ノ
トアルベシ

今昔震旦ノ□代ニ養由ト云フ人有ケリ心極テ猛クシ弓射ル事射ト射ル者掌ヲ指スガ如シ然レバ國王此ノ養由ヲ
武藝ノ道ニ被レ仕ルニ毎事ニ不レ愚ズ此レニ依テ國舉テ養由ニ隨フ而ル間天ニ日十出タリ一シテ照スソ雨不レ降レバ
猶シ早也何ニ況ヤ日十出テ照スニ草木可レ堪キニ非ズ皆枯レ失ヌ此レニ依テ國王ヨリ始メテ大臣百官及ビ民皆歎
キ悲ム事无限シ其ノ時養由心思ハク天ニハ日一出ル此レ人ノ業力ニ依テ有ル事也而ルニ今十ノ日俄ニ出タリ九ノ
日ハ必ズ此レ國ノ爲ニ怪ヲ致セルナ思テ養由弓ヲ取テ箭ヲ矯テ天ニ向テ日ヲ射ルニ九ノ日ヲ射落シタ本ノ一ノ日ハ天
ニ在シテ照ス事本ノ如シ其ノ時ニ養由ガ爲ニ射落サル所ノ九ノ日ヲバ國ノ怪也ト云事ヲ知ヌ然レバ皆人養由ヲ讚メ
テ□スル事无限シ此レヲ思フニ心猛キ人ノ爲ニハ變化ノ者モ顯ル、事也トソ人云ケルト語リ傳ヘタトヤ

○史記卷四周本紀

楚有養由基者。善射者也。去柳葉百步而射之。百發而百中之。左右觀者數千人。皆曰善射。

○淮南子卷八本經訓

堯時十日並出。草木焦枯。堯命羿。仰射十日中其九。鳥皆死。墮其羽翼。

李廣箭射立似虎巖語 第十七

今昔震旦ノ□代ニ李廣ト云フ人有ケリ心猛クシ弓藝ノ道ニ勝レタ而ル間一ノ虎ヲ李廣ガ母ヲ害セリ人有テ李廣
ニ此ノ由ヲ告グ李廣此レヲ聞テ驚テ來テ見ルニ實ニ母虎ノ爲ニ被害レタ然レバ李廣弓箭ヲ取テ虎ノ跡ヲ尋テ追ヒ行
ク即チ一ノ山ノ口ノ野中ニ追ヒ至テ見ルニ虎臥リ李廣此レヲ見テ喜テ射ルニ虎ヲ射立テ事彌ノ齊ニ至ル李廣我ガ

代ノ上漢ノ
トアルベシ

讚メテノ下
アリ本歸伏ト

母ヲ害セル虎ヲ射ル事ヲ喜テ寄テ見ルニ射タル所ノ虎既ニ虎ニ似タル岩ニテ有リ奇異也ト思テ其ノ後此ノ岩ヲ射ルニ
箭不レ立シテ踊リ還ル爰ニ李廣思ハク我ガ母ヲ害セル虎ヲ射ムト思フ心ノ深キニ依テ岩ニモ箭ハ立ツ也ケリ岩ゾト思テ
射ル時ニハ不レ立リト思テ泣々々還ヌ其ノ後此ノ事世ニ廣ク聞テ李廣ガ虎ヲ追テ射タル心ヲ讚メ哀レビケ然レバ實ノ心
ヲ至サム時ハ諸ノ事如此キモ有キベ也トソ世ノ人云ケルト語リ傳ヘタトヤ

○前漢書卷五十四列傳

李廣爲人長猿臂。其善射亦天性。雖子孫他人學者莫能及。李廣出獵。見草中石。以爲虎而射之。中石沒矢。
視之石也。他日射之。終不能入矣。

○法苑珠林卷二十七至誠篇感應緣

楚熊渠。夜行見寢石。以爲伏虎。彎弓射之。沒金鏃羽。下視知其石也。復射之。矢摧無跡。漢世復有李廣。爲右
北平守。射虎得石亦如之。劉向曰。誠之至也。而金石爲之開。況人乎。夫唱而不和。動而不隨。中必有不全者
也。夫不降席而匡天下者。求之己也神記

○曾我物語卷七李將軍が事

昔大國に李將軍とて、猛く勇める武勇の達者あり。一人の子なき事天に祈る憐みにや、妻女懐妊す。將軍
よろこぶ處に、女房いふやう、生きたる虎の肝をこそ願ひなれ。將軍易き事とて、多くの兵を引連れ、野
邊に出て虎を狩りけるに、却て將軍虎に喰はれて亡せにき。乗りたりけるうんしやうれうといふ馬、
鞍の上空しくして歸りぬ。女房怪みて、將軍虎に喰はれるやと問へば、れう涙を流し膝を折り泣けども

叶はず。わが胎内の子は、父を害する敵なり。生れ落ちなば、捨てんと日敷を待つ處に、月日に關守なければ、程なくて生れぬ。見れば男子なり。いつしか捨つべき事を忘れ取あげ、名をかうりよくと付けてもてなしけり。名將軍の子なれば、胎内より、父虎に喰はれけるを安からず思ひ、敵取るべき事をぞ思ひける。光陰矢の如し、かうりよく早や七歳にぞなりにける。或時父重代の刀をさし、角の着きたる弓に、神通の鎗矢を取添へ、腕に下り、父乗りて死にける。らんしやうれうに向つて曰く、汝馬の中の將軍なり。然るに父の敵に志深し。父の取られける野邊に吾を具足せよといふに、馬黄なる涙を流して膝を折り、高聲に嘶えけり。かうりよく大に喜びて、彼のれうに乗り、馬に任せて行くほどに、千里の野邊に出て、七日七夜ぞ尋ねける。八日の夜半に及びて、ある谷間に獸おほく集り居たる其中に、臥長一丈餘なる虎の、兩眼は日月を雙べたる様にて、紅の舌を振りて臥しければ、肝魂を失ふべきに、さる將軍の子なりければ、是こそ父の敵と、矢取つてさし番ひ、よつびいて放つ。過たず虎の左の眼に射立てたり。少し弱ると見えければ、かうりよく馬より飛んで下り、腰の刀を抜き虎を切らんと見ければ、虎にてはなくて、年經たる石の、苔蒸したるにてぞありける。かやうの志にて、つひに敵を討つ。今の世の石竹といふ草、かうりよくが射ける矢なりとぞ、申し傳へたる。

霍大將軍值死妻被打死語 第十八

今昔震旦ノ漢ノ先帝ノ時ニ霍大將軍ト云フ人有ケリ心猛テ悟リ有リ此ノ人國王ノ御娘ヲ妻トシ有リ而ル間其ノ妻

先ハ元ノ誤

死ヌ將軍无限ク戀ヒ悲ムト云モ亦相ヒ見ル事无シ而ルニ將軍忽ニ栢ノ木ヲ伐テ一ノ殿ヲ造テ此ノ死セル妻ヲ其ノ殿ノ内ニシテ葬リシツ其ノ後將軍猶悲シ心ニ不堪テ朝暮ニ彼ノ殿ニ行テ食物ヲ備ヘテ禮シテ還ル如レ此クシ既ニ一年ヲ經ル將軍日晩方ニ彼ノ殿ニ行テ例ノ如ク食物ヲ備フル時ニ昔ノ妻本ノ姿ニシテ出來レリ將軍此レヲ見テ戀ヒノ心深クシ有リト云ドモ恐デ怖ル、事无限シ妻將軍ニ語テ云ク汝我ヲ戀テ如此ク爲ル事實ニ哀レニ貴シ我レ喜ブ所也ト將軍此ノ音ヲ聞クニ彌ヨ恐デ怖ル夜深クシ人無シ將軍逃去ナム思フ間ニ妻將軍ヲ捕ヘテ忽ニ懷抱セム將軍怖ヂ迷テ逃ゲナ爲ルヲ妻手ヲ以テ將軍ノ腰ヲ打ツ將軍打レテ逃去ヌ家ニ歸テ後即チ腰ヲ痛ムテ夜半ニ死ヌ其ノ後皇此ノ事ヲ聞給テ此ノ女靈ヲ貴テ封五百戸ヲ加ヘ給フ其ノ後ハ國ニ災起ラム爲ル時ニハ彼ノ殿ノ内鳴ル事雷ノ音ノ如ク也加之新ル事多シ其ノ殿ノ鳴ル時ハ世人例ノ栢靈殿ノ音鳴ルト云ヒケレバ人ヲ戀ヒ悲ム心深クト如レ然キノ事ヲバ不可爲ズ靈ト成ヌレ本ノ人ノ時ノ心ハ失セテ極テ怖シキ事也トナ語ヲ傳ヘタトヤ

皇ノ上天トアルベシ

不信蘇規破鏡與妻遠行語 第十九

今昔震旦ノ代ニ蘇規ト云フ人有ケリ此ノ人國王ノ使トシ遙ニ遠キ州ヘ行ケル蘇規妻ニ語テ云ク我レ國王ノ使トシ遠キ州ヘ行ク汝ト不相見テ久ベシ然レバ我レ他ノ女ニ不可娶ズ汝亦他ノ男ニ不可近付ズ此レニ依テ一ノ鏡ヲ破テ半ハ汝ニ預ム半ハ我レ持テ行ム若シ我レ他ノ女ニ娶バ我ガ半ノ鏡必ズ飛ビ來テ汝ガ鏡ニ可合シ亦若シ汝ガ他ノ男ニ娶バ亦汝ガ持タル半ノ鏡飛ビ來テ我ガ半ノ鏡ニ可合シト契ルニ妻喜テ半ノ鏡ヲ持テ箱ノ内ニ納メテ置キツ亦蘇規モ此ノ半ノ鏡ヲ取テ身ヲ放ツ事无テ家ヲ出テ彼ノ州ヘ行ヌ其ノ後程ヲ經テ妻家ニ有テ他ノ男ニ娶

不信ノ二字目次ニナシ

リニケ蘇規其ノ事ヲ不知ズシ外ノ州ニ有ル間妻ノ半ノ鏡忽ニ飛ビ來テ蘇規ガ半ノ鏡ニ合フ事沙ノ如シ然レバ蘇規我ガ妻忽ニ約ヲ誤テ他ノ男ニ娶リト云フ事ヲ知テ契ヲ違タル事ヲ恨ケリ然レバ實ノ心ヲ至ス時ニハ心无キ物ソラ如レ此クツ有ケルト語リ傳ルヘタトヤ

◎神異經

昔有夫婦。將別破鏡。人執半以爲信。其妻與人通。鏡化鵲飛至夫前。其夫乃知之。後人因鑄鏡爲鵲。安背上也。

◎古今詩話

陳太子舍人徐德言。尙樂昌公主。陳政衰。謂妻曰。國破必入權豪家。儻情緣未斷。尙冀相見。乃破鏡各分其半。約他日以正月望日賣於都市。及陳亡。其妻果爲楊越公得之。乃寄詩曰。鏡與人俱去。鏡歸人未歸。無復姮娥影。空留明月輝。樂昌得詩悲泣不已。越公知之。愴然召德言而還其妻。

直心季札劍懸徐君墓語 第二十

今昔震旦ノ□代ニ季札ト云フ人有ケリ武藝ノ道ニ勝レテ心直シ其ノ人國王ノ使トシ謀反ノ輩ヲ罰ムガ爲ニ外ノ州ヘ行ク間途中ニシ忽ニ大雨ニ會ヌ然レバ洪水ニ依テ道ヲ行ク事不能ズシ徐君ト云フ人ノ家ニ宿ヌ二月ヲ經テ雨止ミ天晴レテ後徐君ガ家ヲ出テ行ムト爲ルニ季札徐君ニ語テ云ク我レ君ガ家ニ宿シテ既ニ月來ヲ經タリ此レ恩ヲ可レ報キ事也而ルニ我レ命ト共ニ惜ム物有リ此ノ帶セル劍也此レ君ニ與トム思フ而ルニ我レ州ニ行テ謀反ノ者ヲ罰テ還ラム時ニ此レヲ與トム云テ出デテ行ヌ既ニ敵ノ所ニ行テ一年ヲ經テ心ノ如ク敵ヲ罰テ頸ヲ斬テ還ル時ニ徐君ガ家ニ寄テ

直心ノ二字
目次ニナシ

代ノ上ノ周ノ
トアルベシ
宿ヌ二月一
本宿ヌルニ
月トアリ
月一本日ニ
作ル

劍ヲ與トム爲ルニ徐君ガ家ノ門既ニ荒廢シテ野ト成レリ季札此レヲ見テ怪ムデ一ノ古老ノ人ヲ尋テ徐君ヲ問フニ古老ノ云ク徐君疾ク死ニテ季札云ク其ノ墓ハ何ト古老手ヲ以テ指テ其ノ墓彼レ也ト教フ墓ノ上ヲ見レバ三尺許有ル榎ノ木生タリ季札教ヘニ隨テ其ノ墓ニ行テ帶セル所ノ劍ヲ解テ此ノ榎ノ木ニ懸ケテ約ヲ謝シ恩ヲ酬テ去ヌ然レバ心有ル人ハ如レ此クゾ有ケル身ノ護トモ家ノ財トモ可レ爲キ劍ナレ約ヲ不忘ガ故ニ其ノ主无シト云モ墓ノ木ニ懸テ還リナル語リ傳ルヘタトヤ

○史記卷三十一世家

吳季札。吳王壽夢季子也。初使北過徐君。徐君好季札劍。口弗敢言。季札心知之。爲使上國未獻。還至徐。徐君已死。乃解其寶劍。懸徐君冢樹而去。從者曰。徐君已死。尙誰予乎。季子曰不然。始意已許之。豈以死倍吾心哉。札封於延陵。故稱延陵季子。

◎寶物集卷四季札劍ヲ墓ニ懸シ事

徐君ト云シ人、季札ト云人ノハキタル太刀ヲ乞ケレバ、佗ヘ行ク事ノアレバ、今返リ來テ進セント云テ去ヌ。季札急ギ飯リ來テ、乞シ劍ヲトラセンガ爲ニ、徐君ヲ尋ルニ、早ク失ニキト人云ケレバ、徐君ガ塚ヲ尋テ行キ、彼ノ乞ケル太刀ヲ懸侍リケル。徐君ガ塚ノ上ニ、季札ガ劍ヲカクト云ハ是ノ事也。此心ヲ思ヒテ、俊頼朝臣

ナキ跡ニ懸ケ、ル太刀モアル物ヲサヤツカノ間モ忘レハツベキ

トハ讀ミシナリ。

●源平盛衰記卷十五季札劍事

昔、異國ニ季札ト云シ兵アリ。吳王ノ使トシテ魯國ヘ行ケルニ、徐君ト云知人ノ有ケルニ、一夜ノ宿ヲ借
タリケリ。家主徐君、季札ガ帯タル劍ニ目ヲ係テ、口ニハ乞事ナカリケレ共、是モガナト思ヘル氣色見エ
タリケリ。季札心ニ思フ様、ワレ吳王ノ使トシテ他國ヘ行ク。ホシガル貌ダテ如何セン。先ヅ與ヘン事難
レ叶。魯國ヨリ歸ラン時ハ、必ズ與ヘント思テ去ニケリ。季札不レ久シテ吳國ヘ歸ケルニ、又徐君ガ家ニ行
テ、角ト云ケレバ、世ヲ早シテ今ハナシト答フ。季札泣悲テ、墓ハイヅクゾト問ヘバ、家僕相具シテ行ク。
塚ニ松ウエタリ。是徐君ノ墓ト云ケレバ、心ニユルシタリシ劍ナリ。死シタリトテ爭デカ其心ヲ違ヘン
ト思テ、劍ヲ解キ松ノ枝ニ懸テ、徐君ガ靈ヲ祭テ去ル。

(十訓抄中卷參閱)

長安女代夫違枕爲敵被煞語 第廿一

代ノ上唐ノ
トアルベシ

今昔震旦ノ□代ニ長安ニ一人ノ女有ケリ形美麗ニシ心正直也其ノ女ニ夫有リ其ノ夫ニ敵有リ其ノ敵此ノ女ノ夫
ヲ煞ガム爲ニ其ノ家ニ來レリ其ノ時ニ其ノ夫他所ニ行テ其ノ家ニ无シ敵見ルニ夫无バレ妻ノ父ヲ捕ヘテ縛ル女父被
レ縛レタ聞テ内ヨリ出タリ敵女ヲ見テ告テ云ク我レ汝ガ夫ヲ煞ガム爲ニ此ニ來レリ而レニ汝ガ夫无シ汝若シ夫ヲ不
レ出ズバ汝ガ父ヲ煞サスト女敵ニ答ヘテ云ク豈ニ夫ノ无キ故ニ父ヲ煞ス事有ラム然レバ君我ガ言ニ隨テ後ノ時ニ此ノ家
ニ來テ我ガ夫ヲ可レ煞シ此ノ寢屋ニハ夫ハ東枕ニ臥シ我レハ西枕ニ臥ス也後ニ來ラム時東枕ニナ夫ヲ可レ煞ト敵此ノ

事ヲ聞テ父ヲ免シテ去ヌ其ノ後夫來レリ妻夫ニ語テ云ク今夜ハ我レ東枕ニ臥サム君ハ西枕ニ臥セト云テ臥ヌ即チ敵入
リ來テ東枕ナル妻ヲ此レ夫也ト思テ煞シツ其ノ時敵キ既ニ妻ヲ煞セリ夫ハ命ヲ存セリ敵キ此レヲ見テ痛ミ歎ク事无レ限
シ然レバ此レ妻ノ夫ニ代テ枕ヲ替ヘテ被煞ル也ト知ヌ其ノ後敵大キニ此レヲ哀ムテ永ク怨ノ心ヲ止メテ始メテ骨肉ノ
契ヲ成ケリ然レバ昔ハ如此ク我ガ身ヲ棄テ夫ノ命ヲ生タル女人有ケリ此レ極テ難レ有キ事也トソ聞ク人皆云トナム語
リ傳ヘタトヤ

○劉向列女傳節義部

京師節女者。長安大昌里人之妻也。其夫有讐人。欲報其夫而無道。徑聞其妻之仁孝有義。乃劫其妻之父。使
要其女爲中譎。父呼其女告之。女計念。不聽之則殺父不孝。聽之則殺夫不義。不孝不義。雖生不可以行于
世。欲以身當之。乃且許諾曰。旦日在樓上新沐。東首臥則是矣。妾請開戶牖待之。還其家。乃告其夫使臥他
所。因自沐居樓上。東首開戶牖而臥。夜半讐家果至。斷頭持去。明而視之。乃其妻之頭也。讐人哀痛之。以
爲有義。遂釋不殺其夫。君子謂。節女仁孝厚於恩義也。夫重仁義輕死亡。行之高者也。論語曰。君子殺身成
仁。無求生以害仁。此之謂也。

◎晉書載記第十四苻融傳

京兆人董豐。游學三年而返。過宿妻家。是夜妻爲賊所殺。妻兄疑豐殺之。送豐有司。豐不堪禁掠。誣引殺妻。
融察而異之。問曰。汝行往還頗有怪異。及卜筮以不。豐曰。初將發夜。夢乘馬南渡水。反而北渡。復自北而
南。馬停水中。鞭策不去。俯而視之。見兩日在于水下。馬左白而濕。右黑而燥。寤而心悸。竊以爲不祥。還之

夜。復夢如初。問之筮者。筮者云。憂獄訟。遠三枕避三沐。既至。妻爲具沐。夜授豐枕。豐記筮者之言。皆不從之。妻乃自沐。枕枕而寢云々。融乃知馮昌殺之。於是推檢。獲昌而詰之。昌具首服曰。本與其妻謀殺董豐。期以新沐枕枕爲驗。是以誤中婦人。

●源平盛衰記卷十九東歸節女事

昔唐ニ東歸ノ節女ト云ケルハ、長安ノ大昌里人ト云者ガ妻也ケリ。其夫ニ敵アリ、常ニ伺ケレ共殺ス事叶ハズ。カタキ節女ガ父ヲ縛ツテ、女ヲ呼テ云ク、汝ガ夫ハ我ガ大ナル敵也。其夫ヲ我ニ與ヘズバ、汝ガ父ヲ殺サント云ケレバ、女答テ曰ク、妾夫ヲ助ン爲ニ、爭デカ生育ノ父ヲ殺サセン。速ニ汝ガ爲ニ妾ガ夫ヲ殺サシメン。妾常ニ樓上ニ寢ヌル、夫ハ東首ニ臥シ、妾ハ西ヲ枕トス。須ク來テ東首ヲ切レト教テ、家ニ歸テ思ハク、父ニ恩愛ノ慈悲深シ、夫ニ借老ノ情淺カラズ。夫ノ命ヲ助ケントスレバ父ノ命危シ、父ガ身ヲ育マントスレバ、夫ノ身亡ビナントス。不レ如父ヲ助ンガ爲ニ夫ヲ敵ニ與ヘツ、我レ又夫ガ命ニ替ラントテ、自ラ東首ニ伏テ、夫ヲ西ニ枕セリ。敵伺入テ、忽ニ東首ヲ切テ家ニ歸テ、朝ニ是ヲ見レバ、非ニ夫ノ首ニ妻ガ頭也。敵大ニ悲テ、此女父ノ爲ニ孝アリ、夫ガ爲ニ忠アリ、我レイカバセント云フ。終ニ節女ガ夫ヲ招テ、長ク骨肉ノ昵ビヲナシケリ。

(私聚百因緣集卷六節女事。源平盛衰記卷十九袈裟御前ノ事等參閱)

宿驛人隨遺言金副死人置得德語 第廿二

驛ノ上脱字
アラン

今昔震旦ノ代ニ人有テ他州ヘ行ク間日晚レテ驛ト云フ所ニ宿シヌ其ノ所ニ本ヨリ一ノ人宿シテ病ム相ヒ互ニ誰人ト知ル事无シ而ルニ本ヨリ宿シテ病ム人今宿セル人ヲ呼フ呼フニ隨テ寄ヌ病ム人語テ云ク我レ旅ニシ病ヲ受テ日來此ニ有リ既ニ今夜死トス。而ルニ我ガ腰ニ金二十兩有リ我レ死ナム後ニ必ズ我レヲ棺ニ入レテ其ノ金ヲ以テ可ニ納置シト今宿ル人此レヲ聞テ汝ガ姓ハ何ニゾ名ハ何ガ云フ何レノ州ニ有ル人ソ祖ヤ有ルナ問トハム。爲ル間ニ其事ヲモ問ヒ不レ敢ザル程ニ此ノ病ム人絶入ヌレ今宿セル人奇異也。思テ死人ノ腰ヲ見ルニ實ニ金廿兩有リ此ノ人哀ビノ心有テ死人ノ云ニ隨テ其ノ金ヲ取り出シテ少分ヲ以テハ此ノ死人ヲ可ニ納置キ物ノ具共ヲ買ヒ調ヘ其ノ殘ヲ被レガ約ノ如ク少シク不レ殘ズ此ノ死人ニ副ヘテ納置キケ誰人ト不レ知ズト云ヘド。如此クシ家ニ還ヌ其ノ後不レ思懸ニ主ヲ不レ知ザル馬離レテ來レリ此ノ人此ノ馬ヲ見テ此レ定メテ様有ト。思テ取り繫テ飼フ而ルニ我レ主也ト云フ人无シ其ノ後亦臆ノ爲ニ縫物ノ衾ヲ卷キ持來レリ其レモ様有ト。思テ取テ置キツ亦我レ主ト云テモ尋ル人无シ其ノ後人來テ云ク此ノ馬ハ我ガ子某ト云ヒシ人ノ馬也亦衾モ被レガ衾ヲ臆ノ爲ニ卷キ被揚レヌ既ニ君ガ家ニ馬モ衾モ共ニ有リ此レ何ナル事ゾト家ノ主答テ云ク此ノ馬ハ不レ思懸ニ離レテ出來レル也尋ル人无キニ依テ繫テ飼フ衾亦臆ノ爲ニ卷キ持來レル也ト來レル人ノ云ク馬モ徒ニ離レテ來レリ衾モ臆卷キ持來レリ君何ナル徳カ有ルト家ノ主答テ云ク我レ更ニ徳无シ但シ然々ノ驛ニ夜宿シ病ミ煩ヒシ人本ヨリ宿シテ絶入ニキ而ルニ彼レガ云ヒシ隨テ彼レガ腰ニ有シ金廿兩ヲ以テ遺言ノ如ク少分ヲ以テハ彼レヲ可ニ納置キ物ノ具ヲ買ヒ調ヘ其ノ殘ヲ少シク不レ殘ズ彼レニ副ヘテ納置テナ。還ニシ其人ノ姓ハ何ゾ名ヲバ何ガ云フ何ノ州ニ有ル人ト問ハムト問ニ絶入ニキ語レバ來レル人此ノ事ヲ聞テ地ニ臥シ九ビテ泣ク事无限シ涙ヲ流シテ云ク其ノ死ム人ハ即チ我ガ子也此ノ馬モ衾モ皆彼レガ物也君ノ彼レガ遺言ヲ不レ違給ニ

依テ隠レシ^レ德有レバ顯^レル^レ驗シ有テ馬モ衾モ天ノ彼レガ物ヲ給ヒタ^レ也^ト云テ馬モ衾モ不^レ取^ズシ泣々ク還ルニ家ノ主馬ヲモ衾ヲモ還シ渡シケレ^レ遂ニ不^レ取^ズシ去^リニケ^レ其ノ後此ノ事世ニ廣ク聞ユ有テ其ノ人^ノ心^ノ直也^ト世ニ重ク被^レ用^リ此^レヲ始^トシ^テ應^ノ卷^キ持^來レ^ル物ヲ本ノ主ニ還ス事无シ亦主モ我ガ物ト云フ事モ无シ亦卷キ持來レ^ル所ヲモ吉キ所トモ爲也^トナ^リ語^リ傳^ルヘ^タトヤ

病成人形醫師聞其言治病語 第廿三

今昔震旦ニ[□]代ニ身ニ重キ病ヲ受タル人有ケリ其ノ時ニ止事无キ醫師有ケリ彼ノ病ヲ受タル人病ヲ令ニ療治^メム爲ニ其ノ醫師ヲ請^ズル^ニ醫師既ニ請^テ受^ケツ^ニ醫師其ノ夜ノ夢ニ彼ノ病忽ニ二人ノ童ノ形ニ成テ歎^テ云ク我等此ノ醫師ノ爲ニ被^レ傷^レナム^ト何カ可^レ爲^キ何所ニカ^ニ逃^トム^ト爲^ルト云フニ一人ノ童ノ云ク我等膏ノ上膏ノ下ニ入^ナバ醫師何^ノ我等^ヲ傷^ムヤ云フト見^テ夢覺^ヌ其ノ後醫師彼ノ病^ヲ人ノ許^ニ至^テ病ヲ見^テ云ク我^レ此^ノ病^ヲ不^レ可^レ療^ズ針^モ不^レ可^レ至^ズ藥^モ不^レ可^レ及^ズト云テ不^レ治^ズシ返^ヌレ^バ病者即チ死^ヌ膽^ノ下^ヲ膏^ト云ヒ膽^ノ上^ヲ膏^ト云フ也然レバ其ノ所ニ至^ル病ヲ治^ル无^ケレ^バ如此ク云フナル^ニ其ノ後亦重キ病ヲ受タル人有リ同ジ醫師ヲ請^ジテ病ヲ令ニ療治^メム^ト爲^ルニ醫師請^テ受^テ病者ノ許^ヘ行^ク道ニ忽ニ二人ノ鬼有テ歎^テ云ク我等遂ニ此ノ醫師ノ爲ニ被^レ傷^レナム^ト何カ可^レ爲^キト云フニ亦前^キニ夢ニ云ガ^シ如ク我等膏ノ上膏ノ下ニ入^ナバ更ニ力不^レ及^ジト云フ亦一人ガ云ク若シ八毒丸ヲ令^レ服^ラム^ト今一人ガ云ク其ノ時ニコ^シ我等術无^カラ^シ云フヲ聞^テ醫師病^ヲ人ノ所ニ急^ギ行^テ此ノ度ハ八毒丸ヲ令^レ服^ラム^ト病者此^レヲ服^シテ病即チ愈^ヌ然レバ病^者皆^ク心有^テ如此ク云フ也^トナ^リ語^リ傳^ルヘ^タトヤ

代ノ上周ノトアルベシ
童一本童子
ジニ作ル下同

○春秋左氏傳卷十二

成公十年。晉侯有疾病。求醫於秦。秦伯使醫緩爲之。未至。公夢疾化爲二豎子曰。彼良醫也。懼傷我焉。逃之。其一曰。居膏之上膏之下。若我何。醫至曰。疾不可爲也。在膏之上膏之下。攻之不可。達之不及。藥不至焉。不可爲也。公曰良醫也。厚爲之禮而歸之。

震旦賈誼死後於墓文教子語 第廿四

今昔震旦ノ漢ノ代ニ賈誼ト云フ人有ケリ心ニ悟^リ有^テ文ヲ讀^ムニ愚ナル事无シ一人ノ男子有^リ名^ヲ薪ト云フ薪未ダ稚キ時ニ父ノ賈誼死^ヌ然レバ薪未ダ文ヲ學スル事无シ薪文无^シ世^ニ何^ノテカ^レ可^レ有^ル心細ク思ヒ歎^テ夜父ノ墓ニ行^テ諸ノ事ヲ云ヒ次^ケテ泣々ク拜^ス其ノ時ニ賈誼子ノ薪ヲ見^テ出來^テ云ク汝文ヲ可^レ學^キ也^ト薪ノ云ク我^レ文ヲ學^セム^ト思^フト云ドモ誰^ヲ師^ト爲^テカ^レ可^レ學^キト賈誼ノ云ク汝文ヲ學^セム^ト思^ハバ如此ク夜々此ニ來^テ我^レニ隨^テ可^レ學^シト然レバ薪其ノ後父ノ教ヘニ隨^テ夜々墓ニ行^テ文ヲ學^スル^ニ既ニ十五年ヲ經^タリ如此ク習^フ間ニ既ニ其ノ道ニ達^ヌ國王此ノ由ヲ聞^キ給^テ薪ヲ召^テ被^レ仕^ル實^ニ其ノ道ニ達^レリ然レバ重^キ者^ニ被^レ用^レテ遂^ニ業ヲ遂^ゲツ^ニ其ノ後ハ薪墓ニ至^ルト云ヘド賈誼更ニ見^エザ^リ賈誼死^テ後面^リ子^ニ見^エテ文ヲ教^ヘテ業ヲ令^レ遂^ムル^ニ事奇^ニ異^ニ難^レ有^キ事^トナ^リ語^リ傳^ルヘ^タトヤ

高鳳任梓州刺史迎舊妻語 第廿五

竿或ハ下ニ
作ルベシ
同ジ

今昔震旦ノ漢ノ代ニ高鳳ト云フ人有ケリ幼稚ノ時ヨリ心ニ智ヲ有テ晝夜ニ文ヲ學ビテ更ニ他ノ思ヒ无シ而ルニ高鳳極テ家貧クシ妻一人ヨリ外ニ相ヒ副ヘル者无シ然リト云ヘド高鳳猶世間ノ事ヲ不知テ只文ヲ學ビテ年月ヲ送ル間ニ忽ニ夕サリ可レ食キ物无シ然レバ妻隣家ニ行テ麥ヲ求テ持來テ夕サリ食ニ宛シテ庭ニ曝ス妻高鳳ニ語テ云ク我レ夕サリ食物无ニ依テ隣家ニ行テ麥ヲ求テ持來テ庭ニ曝ス若シ鶏出來テ此ノ麥ヲ食ハマ遠ク可レ令ニ追去シ我レハ火ヲ取テ來ト云テ出デヌ其ノ後鶏出來テ此ノ庭ノ麥ヲ食フ然レド高鳳文學ニ他ノ心无ガ故ニ此レヲ不見入テ鶏心ニ任セテ麥ヲ皆食ヒツ妻返リ來テ見ルニ麥无シ何ニ此ノ麥ハ无キト問ニ高鳳不知ザル由ヲ答フ其ノ時ニ妻大キニ嘖テ云ク汝文學スト云ドモ世間ノ事ヲ不知テ極テ愚也今ヨリ我レ汝ニ不相副シト云ヘバ高鳳ノ云ク我レハ今年有テ富貴ノ身ト可レ成シ汝其ノ時ヲ可レ待シト云モ妻更ニ其ノ言ヲ不信テ去リ離レヌ其ノ後其ノ妻竿州ト云フ所ニ行テ夫ニ嫁ニ而間四年ヲ經テ高鳳遂ニ竿州ノ刺史ニ任ゼリ然レバ高鳳富貴ノ身ト成テ彼ノ州ニ下ル間ニ竿州舉テ道ヲ揮ヒ所ヲ淨メ騒ギ營ム事无限シ州ノ貴賤ノ男女員不知ズツドヒ集テ刺史ノ下ルヲ見ル其ノ中ニ刺史ノ舊キ妻有テ今ノ夫ト相共ニ數ノ中ニ入テ此レヲ見ルニ刺史髣髴ニ舊妻ノ數ノ中ニ有ルヲ見テ止メテ人ヲ以テ告テ云ク我レハ汝ガ舊キ夫ニハ非ズヤ汝ハ我が本ノ妻ニハ非ズヤ云ヒ遣バ妻此レヲ聞テ大キニ喜テ數ノ中ヨリ出來タリ近ク召シ寄セテ見ルニ實バ哀レニ思フ事无限シ刺史舊キ心不失シテ舊妻ヲ召取テ本ノ如ク令レ居メテ養レバ刺史ノ今ノ妻ハ恥テ去トナム語リ傳ヘタトヤ

○後漢書卷七十三逸民傳

高鳳字文通。南陽葉人也。少爲書生。家以農畝爲業。而專精誦讀書夜不息。妻嘗之田曝麥於庭。令鳳護雞。

時天暴雨。而鳳持竿誦經。不覺潦水流麥。妻還怪問。鳳方悟之。其後遂爲名儒。乃教授業於西唐山中。鳳年老執志不倦。名聲著聞。太守連召請。恐不得免。自言本巫家。不應爲吏。建初中將作大匠任隗。舉鳳直言到公車。託病逃歸。推其財產悉爲孤兄子。隱身漁釣終於家。

○前漢書卷六十四列傳

朱買臣字翁子。吳人也。家貧好讀書。擔束薪行且誦書。其妻亦負載相隨。數止買臣毋歌謳道中。買臣愈益疾歌。其妻羞之求去。買臣曰。我年五十當富貴。妻怒曰。如公等終餓死溝中耳。遂去。後買臣詣關上書。武帝召見。說春秋言楚詞。帝甚悅之。拜會稽太守。買臣入吳界見其故妻。妻夫治道。呼使後車載其夫妻。到太守舍給食之。居一月妻自經死。

●唐物語

むかし朱買臣、會稽といふ所に住みけり。世に貧しくわりなくしてせむ方なかりけれど、文讀み物學ぶ事晝夜おこたらず。そのひまには薪をこりて、世を渡るはかりごとをしけり。かくて年月を経るに、あひ具したりける女、限りなく貧しきすまひを堪へ難くや思ひけむ、我も人もあらぬさまになりて世を試みむなど、細やかにうち語らひければ、かくてしもやありはつべき。猶今年ばかりは心強くあひ念せよと、萬づにこしらへけれども、終に聞かてその年の内に離れにけり。男戀ひ悲しめども、いふかひなくて次の年にもなりぬるに、この人のさえ才學世に勝れたるを、帝聞かせ給ひて、その國の守になされぬ。始めて國に下りける有様、心詞も及ばずめてたかりけり。かゝれども猶ありし妻のことを心にかけて、一國

の内を尋ね求めさすれども、似たる人なくて明し暮すに、野に出て狩し遊びける時、事もなのめならず怪しく侘びしげなる賤の女が、かたみといふものを臂にかけて、菜を摘みてゐざりありくを、ゆゑしげのもの有様やと見る程に、我が昔のともと見なしてけり。猶僻見にやと目を留めて見るに、いかにも違ふ所なかりければ、人知れず悲しく覺えて、くるゝや遅さと呼びとりてけり。女、我が過つ事もなきに、いかなる事にか當りなむずらむと恐れ惑ひけれど、ありし昔の事など細やかに語らひければ、女あさましく覺えて、この男をうち見るより、いかゞ思ひけむ、いたく惱み煩ひて、曉方に絶え入りけり。

もろともに錦を着てやかへらましうきにたへたる心なりせば
心短きは、何事につけても口惜しき事にこそ。錦をさて故郷に歸るとは、この人のことなり。

(十訓抄下卷。源平盛衰記卷十九朱買臣錦ノ袴ノ事等參閱)

文君興箏値相如成夫妻語 第廿六

今昔震旦ノ漢ノ代ニ文君ト云フ女有ケリ形端正ナル事世ニ无レ並シ國王ニ仕フル寵愛シ給フ事无限シ亦見ル人モ
文君ヲ見テ不レ讚ズト云フ事无シ然レバ文君ヲ妻ムガ爲ニ假借スル人世ニ多カリ云モ未ダ若キ程ニテ男ニ觸レバ事无
テ禁中ニ有リ其ノ時ニ相如ト云フ男有ケリ年若クシ形美麗也亦箏ヲナシ世ニ无レ並ク彈ケル此レヲ聞ク人不レ感ズト
云フ事无シ而ル間相如籬ノ外ニテ箏ヲ彈クニ文君籬ノ内ニ有テ此レヲ聞クニ哀ニ目出タキ事无限シ感ニ不堪シテ終
夜不レ寢シテ此レヲ聞ク相如モ此レヲ知テ手ヲ出シテ箏ヲ彈ク曉ニ成ル程ニ文君此レヲ聞クニ身ニ染テ哀レニ思ハレ籬

ノ外ニ出テ相如ニ會ヌ相如年來文君ニ心ヲ係タル間カク會バレ喜ブ心无限クシ文君ヲ搔キ抱テ密ニ出ヌ家ニ將
行テ永ク契ヲ成シテ棲ム程ニ世ニ此ノ事不レ聞ズ然レバ文君ガ父文君既ニ失ニタリ東西南北ヲ騒ギ求ムト云モ求メ
得ル事无シ其ノ後二年ヲ經テ文君ガ父遂ニ此ノ事ヲ聞キ喜ビテ成シテ衾并ニ錢三萬ム送リ遣リケ文君感ニ不堪
ズ身ヲ棄テ、出テテ會ケム何許ナリケ其ノ比人云トナム語リ傳ヘタトヤ

○前漢書卷五十七司馬相如傳

卓文君。蜀郡臨邛富人卓王孫女。新寡好音。司馬相如與客至其家。酒酣鼓琴。而以琴心挑之。相如從車騎。雍容閑雅甚都。文君從戶窺之。心悅而好之。恐不得當也。夜亡奔相如。相如與馳歸成都。家徒四壁立。文君久之不樂。謂長卿曰。第俱如臨邛。從昆弟假貸。猶足以爲生。乃之臨邛。盡賣車騎買酒舍。令文君當壚。相如自著犢鼻褌。與庸保雜作。滌器於市中。王孫耻之。杜門不出。昆弟諸公更謂王孫曰。有一男兩女。所不足者非財也。今文君既失身於長卿。長卿故倦游。雖貧其人材足依也。王孫分與文君僮百人錢百萬。歸成都買田宅爲富人。久之蜀人楊得意。爲狗監侍武帝。帝讀子虛賦而善之曰。朕獨不得與此人同時哉。得意曰。臣邑人司馬相如自言爲此賦。上驚召問以爲郎。

●唐物語

むかし相如といふ人ありけり。世にたぐひなきほどに、貧しくてわりなかりけれど、よろづの事をしり、才學ならびならして、琴をぞめてたくひきける。卓王孫といふ人のもとにゆきて、月のあかさ夜、よもすがらさんをしらべてゐたるに、この家あるじのむすめに卓文君ときこゆる人、あはれにいみじくおぼえ

て、常はこれをもめて興じけるを、この文君が父母、相如にちかづく事をいとひにくみけれど、このねをやあはれとおもひしみにけん、この男にあひにけり。女がたの父、よろづのたからにあきみちて、世のわびしき事をしらざりけり。かゝれども、このわび人にあひぐしたる事を、いと心づきなさまにおもひとりて、いかにもむすめのゆくへをしらざりけれど、露ちり苦しとおもはてなん、とし月をすぐしける。この夫、蜀といふ國へゆきけるみちに、昇僊橋といふ橋ありけり。それをあゆみわたるとて、橋はしらに物をかきつけけり。われ大車肥馬にのらずば、また此のはしをかへりわたらじとちかひて、蜀の國にこもりにけり。その後思ひの如くめでたくなりてなん、橋をかへりわたりたりける。女年比まづしくてあひぐしたるかひありて、したしきうとき世の中の人々も、たぐひなくうらやみける。

しづみつゝわがかきつけしことの葉は雲井にのぼるはしにぞありける
心ながくて、身をもてけたぬは、いまもむかしも、なほいみじくこそきこゆれ。

震旦三人兄弟賣家見荆枯返直返住語 第廿七

烟一本烟ニ作ル

今昔震旦ノ□代ニ兄弟三人有テナバ田達ト云ヒ次ナバ田烟ト云ヒケケ父母死テ後三人共ニ一家ニ住シテ世ヲ過ス其ノ家ニ紫ノ荆有リ四時ニ花榮テ面白キ事无限シ然レバ世ニ希ルナ物ト云テ見ル人皆ナ此ノ荆ヲ不感ズト云フ事无シ而ル間何ナル事カ有ケム此ノ三人ノ兄弟同心ニ相語テ云ク去來我等此ノ家ヲ賣テ其ノ直ヲ三ニ分テ三人シテ□ケリト取テ此ヲ去ムト云テ即チ家ヲ賣テ直ヲ各分チ取テ去リナ爲ル日此ノ荆明旦ヲ以テ三ニ

分テ掘リ取テ去リナ爲ルニ其ノ夜忽ニ其ノ荆失ヌ明旦ニ見ルニ荆无シ其ノ時ニ三人ノ兄弟亦相ヒ語テ云ク此ノ荆人不レ取テズシ既ニ失ニタ此レ我等ガ此ヲ去ル故也然レバ草木ソラ尙シ別離ヲ惜ム也ケリ何況ヤ人ヲヤ然レバ我等猶此ヲ不レ去ジト云テ即チ直ヲ返シテ三人共ニ本ノ如ク居ヌ其ノ時ニ荆亦榮ニ生ル事本ノ如キ也然レバ草木モ皆昔ハ如レクソ有ケルト語リ傳ヘタトヤ

○續齊諧記

京兆田真兄弟三人。共議分財生費皆平均。惟堂前一株紫荆樹。共議欲破三片。明日就截之。其樹即枯死。狀如火然。真往見之。大驚謂諸弟曰。樹本同株。聞將分斫。所以顛頓。是人不如木也。因悲不自勝。不復解樹。樹應聲榮茂。兄弟相感合財寶。遂爲孝門。真仕至大中大夫。

震旦國王行江釣魚見大魚怖返語 第廿八

今昔震旦ノ□代ニ國王大臣公卿及ビ百官ヲ曳將テ□ト云フ大ナル江有ル所ニ行幸シテ魚ヲ釣テ逍遙スル事有ケリ忽ニ江ノ邊ニ多ノ屋ヲ造テ其ノ莊リ美麗ヲ盡セリ而ル間魚多ク釣リ得タル事其ノ員ヲ不知ズ然レバ國王此レヲ見テ大臣公卿ト共ニ興ジ給フ事无限シ然レバ此ノ多ノ魚ヲ膾ニ造テ種々ニ調ヘ備ヘテ食シ給ハム爲ル間ニ既ニ日晩方ニ成ヌ其ノ時ニ江ノ面ヲ見レバ水上極テ怖シ氣ニ成ル國王ヨリ始メテ諸ノ人此レヲ見テ怪ムテ恐テ怖ル、事无限シ而ル間忽ニ水中ヨリ浮ビ出ツル者有リ諸ノ人此レヲ見ルニ大ナル魚ノ形也長サ一丈餘也其レ魚ノ形也ト云ヘド頭ヲ見レバ童ノ頭也眼キラメキテ甚ダ怖シ鼻口皆有テ人ノ如シ國王ニ向テ音ヲ舉テ申テ云ク悲哉今日國王此

ノ江ニ來リ給テ多ノ魚ヲ煞シ給ヘリ願クハ君此ヨリ後煞生シ給フ事无レト云フ音極テ怖シ殘ノ魚ヲモ作レル膽ヲモ皆江ノ中ニ投ケ棄ツ其ノ膽江ノ中ニ入テ各生キテ水中ニ入ヌ其ノ後此ノ大魚モ水中ニ曳キ入バレ不見ズ成ヌ其ノ時ニ國王彌ヨ怖^レ忽ニ大臣百官ヲ引テ宮ニ還給ヒヒニケリ語リ傳ヘタトヤ

◎三秦記

昆明池。漢武帝鑿之習水戰。中有靈沼神池。云堯時洪水。停船此池。池通白鹿原。人釣魚於原。綸絕而去。魚通夢於武帝。求去其鉤。明日帝遊戲於池。見大魚銜索曰。豈非昨所夢乎。取魚去鉤而放之。帝後池邊得明珠一雙。

震旦國王愚斬玉造手語 第廿九

震旦ノノ下
周トアルベシ

今昔震旦ノ^レ代ニ一人ノ玉ヲ造ル者有ケリ名ヲ卞和ト云ケリ玉ヲ造テ天皇ニ奉ルケ天皇他ノ玉造ヲ召テ此ノ玉ヲ見セ給バレ其ノ玉造此ノ玉ヲ見テ此ノ玉ハ光モ无クテ不用ノ物也ト申バレ天皇大キニ嘖リ給テ何デ此ル不用ノ物ヲ奉テ公ヲ欺^テ其ノ本ノ玉造ヲ召テ左ノ手ヲ被^レ斬^ニ其ノ後代替テ他ノ天皇位ニ即キ給テ亦前ノ玉造ヲ召テ玉ヲ造ラセ給バレ造テ奉ルケ前ノ天皇ノ如ク他ノ玉造ヲ召テ見セ給ケル其ノ度モ亦前ノ如ク此ノ玉光モ无ク不用ノ物也ト申バレ亦前ノ如ク天皇嘖リ給テ此ノ度ハ右ノ手ヲ被^レ斬^ニ和泣キ悲ム事无限シ而ル間亦代替テ他ノ天皇位ニ即キ給ヒヌ卞和尙不^レ懲ズ玉ヲ造テ天皇ニ奉^ル亦他ノ玉造ヲ召テ見セ給テ尙ホ此レハ様有^ラ思シ食^テ瑩^セ給バレ世ニ並ビ无ク艶光ヲ放テ不^レ照ヌ所无ク照^レシケ天皇喜ビ給テ卞和ニ賞ヲ給リケ然レバ卞和前ノ二代ニハ

涙ヲ流シテ泣キ悲ビケニ二代ト云フニ賞ヲ蒙テソ喜ニケ此レニ依テ世ノ人前ノ二代ノ天皇ヲバ皆誇リ申ケリ今ノ天皇ヲバ賢ク御ケリ讚メ申ケリ此レ二代ノ天皇ノ愚ニ御ケル也尙様有^ラ思廻シ可^レ給キニ^カ手ヲ被^レ斬^ル弊^キ也亦卞和モ不^レ懲ズ玉ヲ奉ケル極テ^テ前ノ二代ニハ既ニ左右ノ手ヲ被^レ斬^レ此ノ度ビ若シ前ノ二度ノ如ク有^カ此ノ度ハ頭ヲ被^レ斬^シト世ノ人疑^ドモ^レ卞和ガ^レ誣^テ奉^ルモ思^フ様^コソ有^ケメ然レバ萬ノ事ハ尙此ク強ク可^レ思^キ也トゾ人云ケルト語^リ傳^ヘタトヤ

○韓非子卷四和氏篇

楚人和氏。得玉璞於楚山中。奉而獻之厲王。厲王使玉人相之。玉人曰石也。王以和爲誑。而刖其左足。及厲王薨。武王即位。和又奉其璞而獻之武王。武王使玉人相之。又曰石也。王又以和爲誑。而刖其右足。武王薨。文王即位。和乃抱其璞。而哭於楚山之下三日三夜。淚盡而繼之以血。王聞之。使人問其故曰。天下之刖者多矣。子奚哭之悲也。和曰。吾非悲刖也。悲夫寶玉而題之以石。貞士而名之以誑。此吾所以悲也。王乃使玉人理其璞。而得寶焉。遂命曰和氏之璧。

●俊賴無名抄卷下

もろこしに、卞和といへる玉つくりのありけるが、玉をつくりて、みかどにたてまつりたりけるを、みかど、こと玉つくりをめて見せさせ給ひければ、光もなく不用の物なりと申しければ、いかでかゝる不用のものをば奉りけるぞとて、左の手をさらせ給ひたり。さて又世かはりて、あたらしくたせ給へる帝に、又玉をたてまつりけるを、はじめのやうに、玉造をめてとはせ給ひければ、これ又不用の玉なり

と申しければ、又右の手をさられにけり。泣きかなしむ事かぎりなし。涙つきて血のなみだをながして、よるひるなきけり。又世の中かはりて、あたらしきみかどいとおはしましたるに、なほこりずまに、玉を造りて奉りければ、帝玉つくりをめて、やうあらむとてみがかせさせ給ひければ、えもいはずひかりをはなちて、てらさぬ所なかりけり。さて二代といへるたびまで、血のなみだをながしてなきけるが、三代といふたび、賞蒙りてぞよろこびける。帝王のおろかにおはしますためしに申す事なり。

●三國傳記卷二和氏連城壁事

漢ニ言ク、昔下和ト云フ者荆山ニ遊ンデ、璞玉トテ未ダ琢カザル玉ノ石ノ、大サ尺ニ餘ルヲ求メ得テ、世ニ比ヒナキ珠ナルベシ、琢カセテ御覽在レトテ、是ヲ楚ノ厲王ニ獻ズ。王則チ玉造ヲ召テ見セシムルニ、玉人はハ石也玉ニ非ズト奏ス。故ニ詐ハル事其科不淺トテ、彼ガ左ノ足ヲ斬ラル。無罪シテ、此刑ニ相ヘル事ヲ悲デ居タリケリ。次ニハ武王即位アリ、和又此璞ヲ獻ズ。王悦テ玉人ニ琢カシムルニ光ナシ。是石也ト申ス。武王我ヲ欺クコト惡シト怒テ、則チ右ノ足ヲ斬テ、荆山ノ中ニ捨ラル。角テ廿餘年ヲ過ルマデ猶命存シテ、此玉ヲ抱テ啼哭ス。落ル泪ノ玉、血ノ色ナラズト云事ナシ。其後文王即位有テ、彼ノ山ニ入テ狩シ玉フ事三日三夜、下和兩ノ足ヲ斬ラレテ、泣悲ム事ヲ御覽有テ、天下ニ足ヲ斬ラル、者多シ、奚ゾ哭スルコト甚シキヤト問ヒ玉ヘバ、和ガ云ク、吾全ク此刑ニ相ヘル事ヲバ不歎。唯君昏ク臣諛イテ、君子ハ退キ佞人ハ進テ、不知世實ニ返テ吾ヲ詐レルト云テ、二代ノ君ニ兩ノ足ヲ斬ラル。然ルニ其斬ラレタル事ヲバ哭カズ、美玉ノ不顯事ヲ悲ム也ト奏ス。文王此事ヲ聞テ、其玉ヲ召テ玉人ニ琢セラル、

ニ、其光天地ニ映徹セリ。之ヲ行路ニ懸ケ、レバ、車十七兩照シケレバ、照車ノ玉ト名付テ、是ヲ宮殿ニ撥レバ、夜十二街ヲ耀カス、故ニ夜光ノ玉トモ云ヘリ云々。

漢武帝蘇武遣胡塞語 第三十

衛律ハ誤ナ
ラ下同ジ

今昔漢ノ武帝ノ代ニ蘇武ト云フ人有ケリ天皇[□]依テ此ノ人ヲ胡塞ト云フ所ニ遣ルニ久ク返リ不^レ得ズシ年來其ノ所ニ有ケル程ニ亦衛律ト云フ人其ノ所ニ行ルニ衛律行キ着クマ其ノ所ノ人ニ先ツ蘇武ハ有ヤ否ヤト問バケレ其ノ所ノ人蘇武ハ有ケル隱ガム爲ニ謀ヲ成シテ蘇武早ウ失テ年久ク成メト答ケル衛律隱シテ虚言ヲ云フゾ心得テ蘇武不^レ死ズシ未ダ有ル也此ノ秋鷹ノ足ニ文ヲ結付テ蘇武ガ書ヲ天皇ニ奉バケレ鷹王城ニ飛ビ來テ其ノ書ヲ天皇ニ奉タリ天皇其ノ書ヲ御覽ジテ蘇武于^レ今有リト云フ事ヲ思シ食タリ此レ謀也ト云ケレ其ノ所ノ人謀ニテ有バケレ隱シテ益无^シト思テ實ニハ未ダ不^レ死ズシ有リト云テ蘇武ヲ衛律ニ會セタリ鷹ノ足ニ文結付タル事ハ衛律ガ謀ノ言ナレシ依テ蘇武出來レバ世ノ人此レヲ聞テ衛律ヲ譏メ感^ジケレ然レバ虚言ナレ事ニ隨テ可^レ云キ也ケリ衛律ガ謀ノ言ハ賢カリケリ語^リ傳^ルヘタトヤ

○前漢書卷五十四列傳

蘇武字子卿。杜陵人。武帝時。以中郎將持節使匈奴。時衛律負漢在匈奴。單于使律勸降於武。武不肯從。迺幽武置大窖中。絕不飲食。天雨雪。武臥齧雪與旃毛并咽之。數日不死。匈奴以爲神。乃徙武北海上使牧羝。羝乳乃得歸。武杖漢節牧羊。臥起操持。節旄盡落。昭帝立。匈奴與漢和親。漢求武等。匈奴詭言武死。武官屬

タリケル。秋ノ雁ノ連ヲ亂ラズ飛ビケルニ、蘇武天ニ仰テ歎テ云ク、春ハ北ニ來ルノ翅、秋ハ南ニ往クノ鳥ナリ。我ガ舊里ヲモ飛過グラシ。心アラバ言傳セント云ヒケレバ、天道哀レトヤ覺シケン、二羽ノカリガネ飛下リ、蘇武ガ前ニゾ居タリケル。武悦デ指ヲ食切テ血ヲ出シ、一紙ノ文ヲ書キツ、雁ノ翅ニ結付タリケレバ、南ヲ指テ飛行ヌ。漢昭帝、上林苑ニ御幸シテ、木々ノ紅葉觀覽アリケル折節、秋ノ夕ノ雁、雲居遙ニ飛ビケルガ、一紙ノ書ヲ落シタリ。帝怪ミ思召シ、取上グ是ヲ御覽ズレバ、蘇武ガ狀ニゾ有ケル。其狀ニ云ク

昔籠ニ巖穴之洞、徒送ニ三春之愁歎、今放ニ曠田之畝、空同ニ胡敵之一族、設身留永朽ニ於胡國、必神還再仕ニ于漢君。

トゾ書タリケル。

昔爲ニ帝闕之近臣、今同一足之諸鳥、悲淚空成ニ野外之露、爭歸ニ古郷ニ再仕ニ漢王。

是ヲ觀覽アリテ、サテハ蘇武ハ未ダ胡國ニアリ、爭デカ空ク他國ノ民トナスベキトテ、昭帝、胡王單于ニ呢ヲナシ給ヒ、金銀ノ寶ヲ遣シテ蘇武ヲ贖ヒ給ヒケレバ、單于蘇武ヲ許シテ漢宮ヘゾ返シケル云々。蘇武ハ十六ニシテ胡國ニ行ク。十九年ヲ經テ後、三十五ニテ舊里ニ歸ル。盛ナリシ年ナレドモ、胡國ノモノ思ニ鬢鬚白ク成テ、漢王ノ御前ニ參テ、單于ニ被虜テ、十九年悲ミヲ吞シ事、官兵悉ク片足ヲ切レシ事語リ申シテ、其後ニ李陵ガ一卷ノ書ヲ進ス。漢王觀覽有テ御涙ヲ流シ、大ニ後悔シ給ヘドモ無力。去ドモ蘇武ハ、舊里ニ歸テ再ビ妻子ヲ見ルノミニ非ズ、後ニハ典屬國ト云フ官ヲ賜テ君ニ仕ヘ奉ル。孝宣皇

帝ノ御宇神爵二年ニ、八十餘ニシテ薨ジケリ。甘露三年ニ、帝功臣四十二人ヲ麒麟閣ニ畫シ給ケルニ、蘇武其中ニアリ。一紙ノ雁ノ書ナカラマシカバ、爭デカ加様ノ幸アルベキ。去バ是ヨリシテ、文ヲバ雁書トモ雁札トモ云ヒ、使ヲバ雁使トモ名付タリ。

●平家物語卷ニ蘇武が事

古ハ漢王、胡國をせめ給ひし時、始めて李少卿を大將軍にて、三十萬騎をひけらる。漢の戦よわくして、胡國の軍かちにけり。あまつさへ大將軍李少卿、胡王の爲にいけどらる。次に蘇武を大將軍にて、五十萬騎をひけらる。今度も又漢の戦よわくして、胡國の軍かちにけり。兵六千餘人生取にせらる。其中に蘇武をはじめとして、むねとの兵六百卅餘人すぐり出て、一々にかた足を切ておつばなたる。則ち死ぬる者も有り、程へて死する者も有り。其中に、蘇武は一人しなざりけり。かた足をばきられながら、山にのぼつて木のみをひろひ、里に出てねぜりをつみ、秋は田づらのおちぼひろひなどしてぞ、露の命をば過しける。田にいづらも有ける雁共、蘇武に見なれておそれざりければ、是らはみな我故郷へかよふ物ぞかしとなつかしくて、思ふ事一筆書て、あひかまへて、これ漢王にえさせよといひふくめて、かりのつばさにむすび付てぞはならける。かひくしくもたのものかり、秋はかならずこしちより都へかよふ物なるに、漢の昭帝、上林苑に御ゆう有しに、夕ざれの空うすぐもり、何となく物あはれなりける折ふし、一つの雁とびわたる。其中より雁一つさがつて、おのがつばさにむすびつけたる玉づさを、くひきつてぞおとしける。官人は是を取て御門へ參らせたりければ、ひらいてえいらんあるに、むかしは、巖窟の洞にこ

當惠請守者。得夜見漢使。常惠教使者言。天子射上林中得雁。足有係帛書。言在某澤中。使者如惠語以讓單于。單于驚謝。由是得還。拜爲典屬國。秩中二千石。賜錢二百萬公田二頃宅一區。武留匈奴十九歲。始以強壯出。及還鬚髮盡白。

●俊頼無名抄卷下

漢の武帝と申しけるみかどの御時に、胡塞コセといへる所こに、蘇武といへる人をつかはしたりけるが、えかへらて年ごろありけるを、衛律といひける人の又ゆきて、蘇武はありやととひければ、あるをかくして、その人はうせて、年ひさしくなりぬといひければ、そらごとをかしくしていふぞと心えて、蘇武しなざなり。この秋かりのあしにふみをかきて奉れり。そのふみをみかど御覽じて、蘇武今にあるとはしろしめしたりと、はかり事をなしていひければ、しか、さるにてはやくなしと思ひて、まことにはありといひて、あはせたりけるとぞ。

●源平盛衰記卷八漢朝蘇武事

昔漢武帝ノ時、胡國ノ凶奴朝家ニ不隨ケレバ、李陵ヲ大將軍トシ、蘇武ヲ副將軍トシテ、胡國ノ王單于ヲ被責ケリ。漢朝ヨリ彼ノ國ヘハ、五萬里ノ道ナレバ、九年ニ一度行キ還ル程也。胡國ノ狄エヒス城ヲ百重ニ構ヘタリ。李陵勅ヲ重シ命ヲ輕ジテ、先陣ニ進デ攻戰フ。狄不堪シテ引退ク。勝ニ乘テ攻入リツ、九十ノ城ヲ靡シケリ。李陵今一ノ城ニ打入テ見ルニ、凶賊退散シテ、只胡國ノ美人ノミアリ。官軍亂レ入りケレバ、美人歎テ云ク、天命ヲ背キタテマツルニ依テ、妾ガ輩ドモ、或ハ身命ヲ亡シ或ハ行方ヲ知ズ、生

テモ別レ死テモ別レヌ。願クハ漢ノ使、我等ヲ助ケヨト悲ミ泣ク。李陵、敵ノ謀トハ不知シテ、胡國ノ女ニ心ヲ移シテ遊ケル處ニ、凶奴四方ヲ打圍ミ、李陵ヲ生捕ニシケリ。副將軍ニ引ヘタル蘇武、生年十六歲、心ウシト思テ、死生不知ニ戰ヒケレ共、大陣破レヌレバ、殘黨不レ全習ニテ、蘇武モ同ク虜ラル。胡王議シテ云ク、大將二人ハ、定メテ是レ漢朝ノ功臣ナラン、徒ニ命ヲ斷ツ事不レ可レ然。罪ヲ宥メテ我國ノ臣下トスベシトテ、自餘ノ兵ハ皆片足ヲ切テ追放ツ。死スル者ハ多ク、助カル者ハ希レ也。李陵此形勢ヲ見テ、終ニ胡王ニ從ヘリ。蘇武未ダ隨ハザリケレバ、胡王語ツテ云ク、汝命ヲ助ケント思ハ、我ニ從ヘ、將相トシテ召仕ント、蘇武答ヘテ云ク、ソレ忝ク漢王ノ勅ヲ蒙テ、汝等從ヘン爲ニ此國ニ來レリ。何ゾ死ヲ遁レンガ爲ニ、還テ狄ノ類ニ屈セントイヘバ、胡王大ニ嘖テ、武ヲ惱ス事二年、後ニハ囚ヒトヤニ籠テ食ヲ絶ツ。蘇武羊ノ毛ニ雪ヲ裹テ食シツ、不レ死ケレバ、胡王イヨク其賢ナル事ヲ知テ、囚コシラヨリ出シテ誘テ云ク、我ニ公主ト云フ祕藏ノ娘アリ、形世ニ勝レタリ。汝ニ與テ將相トセントイヘ共不レ從。胡王問テ云ク、命ハ人ノ寶也、官ハ人ノ品也。汝何ゾ將相ニハ不レ成、空ク身ヲ亡サントスルト。蘇武答テ云ク、授レ妻爲レ相、汝當ニ不仁、任レ身受レ死、我爲ニ忠臣トイヘバ、胡王不レ及レ力、北海ノ邊ニ放チ捨テ、羊ヲゾ飼セケル。漢王此事ヲ傳ヘ聞キ給テ、蘇武ハ實ニ功臣也、李陵ハ二心アリトテ、父ガ死骸ヲ掘起シ、老母兄弟罪セラル。蘇武ハ甲斐ナキ命ハ生タレ共、形ヲ宿ス奇ノ臥戸モナク、飢ヲ支ル朝夕ノ食物モナシ。韋韞毳幕、以レ之禦ニ風雨、羶ワシキ肉酪ノ漿、カレヲ以テ飢渴ヲ休メ、年月ヲ送ケレバ、故郷ノ戀サ不レ斜。角テ海邊野澤田中ナドニ迷ヒ行ケル程ニ、後ニハ禽獸鳥類モ見馴テ驚事ナシ。繫ガヌ月日明暮テ、十九年ヲゾ經

タリケル。秋ノ雁ノ連ヲ亂ラズ飛ビケルニ、蘇武天ニ仰テ歎テ云ク、春ハ北ニ來ルノ翅、秋ハ南ニ往クノ鳥ナリ。我が舊里ヲモ飛過グラシ。心アラバ言傳セント云ヒケレバ、天道哀レトヤ覺シケン、二羽ノカリガネ飛下リ、蘇武ガ前ニゾ居タリケル。武悦デ指ヲ食切テ血ヲ出シ、一紙ノ文ヲ書キツ、雁ノ翅ニ結付タリケレバ、南ヲ指テ飛行ヌ。漢昭帝、上林苑ニ御幸シテ、木々ノ紅葉觀覽アリケル折節、秋ノ夕ノムノ雁、雲居遙ニ飛ビケルガ、一紙ノ書ヲ落シタリ。帝怪ミ思召シ、取上グ是ヲ御覽ズレバ、蘇武ガ狀ニゾ有ケル。其狀ニ云ク

昔籠ニ巖穴之洞、徒送ニ三春之愁歎、今放ニ曠田之畝、空同ニ胡敵之一族、設身留永朽ニ於胡國、必神還再仕ニ于漢君。

トゾ書タリケル。

昔爲ニ帝闕之近臣、今同ニ一足之諸鳥、悲淚空成ニ野外之露、爭歸ニ古郷ニ再仕ニ漢王。

是ヲ觀覽アリテ、サテハ蘇武ハ未ダ胡國ニアリ、爭デカ空ク他國ノ民トナスベキトテ、昭帝、胡王單于ニ呢ヲナシ給ヒ、金銀ノ寶ヲ遣シテ蘇武ヲ贖ヒ給ヒケレバ、單于蘇武ヲ許シテ漢宮ヘゾ返シケル云々。蘇武ハ十六ニシテ胡國ニ行ク。十九年ヲ經テ後、三十五ニテ舊里ニ歸ル。盛ナリシ年ナレドモ、胡國ノモノ思ニ鬢鬚白ク成テ、漢王ノ御前ニ參テ、單于ニ被虜テ、十九年悲ミヲ吞シ事、官兵悉ク片足ヲ切レシ事語リ申シテ、其後ニ李陵ガ一卷ノ書ヲ進ス。漢王觀覽有テ御涙ヲ流シ、大ニ後悔シ給ヘドモ無力。去ドモ蘇武ハ、舊里ニ歸テ再ビ妻子ヲ見ルノミニ非ズ、後ニハ典屬國ト云フ官ヲ賜テ君ニ仕ヘ奉ル。孝宣皇

帝ノ御宇神爵二年ニ、八十餘ニシテ薨ジケリ。甘露三年ニ、帝功臣四十二人ヲ麒麟閣ニ畫シ給ケルニ、蘇武其中ニアリ。一紙ノ雁ノ書ナカラマシカバ、爭デカ加様ノ幸アルベキ。去バ是ヨリシテ、文ヲバ雁書トモ雁札トモ云ヒ、使ヲバ雁使トモ名付タリ。

●平家物語卷二蘇武が事

古ヘ漢王、胡國をせめ給ひし時、始めて李少卿を大將軍にて、三十萬騎をむけらる。漢の戰よわくして、胡國の軍かちにけり。あまつさへ大將軍李少卿、胡王の爲にいけどらる。次に蘇武を大將軍にて、五十萬騎をむけらる。今度も又漢の戰よわくして、胡國の軍かちにけり。兵六千餘人生取にせらる。其中に蘇武をはじめとして、むねとの兵六百餘人すぐり出て、一々にかた足を切ておつばなたる。則ち死ぬる者も有り、程へて死する者も有り。其中に、蘇武は一人しなざりけり。かた足をばきられながら、山にのぼつて木のみをひろひ、里に出てねぜりをつみ、秋は田づらのおちぼひろひなんどしてぞ、露の命をば過しける。田にいくらも有ける雁共、蘇武に見なれておそれざりければ、是らはみな我故郷へかよふ物ぞかしたとなつかしくて、思ふ事一筆書て、あひかまへて、これ漢王にえさせよといひふくめて、かりのつばさにむすび付てぞはなちける。かひなくしくもたのものかり、秋はかならずこしちより都へかよふ物なるに、漢の昭帝、上林苑に御ゆう有しに、夕ざれの空うすぐもり、何となく物あはれなりける折ふし、一つの雁とびわたる。其中より雁一つさがつて、おのがつばさにむすびつけたる玉づさを、くひきつてぞおとしける。官人は是を取て御門へ參らせたりければ、ひらいてえいらんあるに、むかしは、巖窟の洞にて

められて、三春の愁歎をおくり、今は曠田の畝にすてられて、胡敵の一族となれり。たとひかばねは胡の地にちらすといふとも、たましひは二たび君邊につかへんとぞ書たりける。それよりしてこそ、ふみむをば雁書とも雁札とも又名づけけれ。あなむざん、蘇武がほまれのとよりけれ。此者共が命の、長たいきて有にこそとて、李廣といふ將軍に仰せて、百萬騎を向らる。今度は漢の戦つよくして、胡國の軍やぶれにけり。みかたた、かひにかちぬと聞えしかば、蘇武は曠野の中よりはひ出て、これこそ古への蘇武よと名のる。かた足はさられながら、十九年の星霜を送り迎へ、こしにかゝれて舊里へぞ歸りける。蘇武は十六の年胡國へむけられし時、御門よりくだし給はつたりけるはたをば、まいて身をはなたずもちたりしを、今取出て御門の御げんさんに入たりければ、君も臣もかんとあなむざんめならず。蘇武は君の御爲に大功ならびなかりしかば、大國あまた給はつて、其上典屬國といふ司をぞ下されける。

二國互挑合戰語 第卅一

今昔震旦二ノ國有リ一ナバ
 〔ト云フ一ナバ〕
 〔ト云フ此ノ二ノ國中惡クシ相互ニ挑ム事无限シ各我レ
 罰勝ムト爲レド國ノ程モ軍ノ員モ等クシ勝劣无クシ年來ヲ經ル間ニ
 國ノ王死ヌ其ノ王ノ皇子有リト云ドモ未ダ
 幼稚ニシ隣國ノ責メナ可レ支キニ非ズ然レバ國ノ内ノ軍皆思ハク我等カク此ノ國ニ居テ命ヲ徒ニ失ハリ只不レ如ジ敵
 ノ國ニ隨ヒナ此ノ國ニ王ノ在ツル時コソ其ノ羽ニ隱レテ不被レ破シテ有ツル太子在マヌ云ヘド未ダ幼稚ニシ者ノ心ヲ
 不ニ知給ヘシ我等不隨ズ被レ煞レム事疑ヒ不有ジ然レバ責メ蒙テ隨リハ只進ミテ行キ向ヒナ後ニ隨ハム人ハ

今少シモ前立バ一賞モ蒙リナ云ツ不劣ジ不負ジト多ノ人彼ノ國ニ行向バレ國ノ内ニ人無シ適ニ有ル人モ強キ心モ
 無シ彼ノ國ノ王責メ來ラム時ニ頸ヲ延ベテ隨ハム思タル氣色共現也敵ノ國ノ王此ノ事ヲ聞テ云ク我レ彼ノ國ニ行向
 ヲリ只其ノ國ノ太子ヲ召ニ遣ラバ更ニ遁ル、事ヲ不得ヾト云テ使ヲ遣テ云ク其ノ國ニ太子ト云フ者有リト聞ク速ニ來
 テ可レ隨シト然ラバ國ヲモ預ケテ令レ知メム若シ不來ズバ其ノ頸ヲ可レ斬シト國ニ殘レル人此ノ事ヲ聞テ恐テ怖レテ大
 臣公卿太子ニ申シテ云ク君國ヲ治メムト先ヾ命ヲ可レ持給キ也命失バレ國王ノ位モ益無シ亦國ノ王子トシ在マサ思
 スト國ノ内透徹リテ譬ヒ此ノ國ニ軍千人有リト云フト彼ノ國ノ軍一人ニ可レ當キニ非ズ彼レハ狙ト有リ我レハ魚ノ肉
 村ト被レ下ニヒタ迎ヘ可レ爲キ方无シ然レバ速ニ敵ノ國ニ參リ向ヒ給テ身ヲ全クシ國ヲ被レ預レバ可レ持給キ也ト
 勸ムル時ニ太子ノ云ク恥ヲ知ルチ人トス命ヲ持ツト云テ遂ニ不レ死ザル者无シ孔子ノ賢シモ死ニキ盜跖ガ勇メリ死ニキ
 然レバ死ヌル事ハ人トシ遂ニ不レ遁ヌ道也我レ世ニ生キ留テ祖ノ墓ヲ人ニ踏セテ何ノ爲ニカ然レバ只不レ隨ズ被レ煞レ
 ム日ヲ待テ國位ヲ棄テム云テ隨ハム思ヘル氣色无シ大臣公卿此レヲ聞テ或ハ思ハク我ガ太子ハ年ヲ計フレバ不レ離
 ヌ程也心ハ大ナル國ニ餘リ給ケリ我等年來公ニ仕リテ勤メ有テ怠リ无シト思ヒツレ今日ハ幼キ君ニ可レ當クモ非ザリ行
 ク末遙ニ在マス君ソラ如此キ命ヲ惜ミ不レ給ズ我等慈ニ命ヲ惜テ何ニカセ云フ或ハ恐テ怖レテ迷フ者モ有リ而ル間太
 子敵ノ國ヨリ來タル使ヲ召出シテ一ノ人ニ頸斬リノ劔ヲ令レ持テ使ニ仰セテ云ク此ニシ汝ガ頸ヲ可レ斬シト云ヘド汝サ此
 ニテ死ナバ彼ノ國ノ王ニ此ノ事ヲ可レ語キ人不レ有ジ然レバ汝チ生キテ見ヨト云テ草ヲ取テ人形ヲ造テ彼ノ國ノ王ノ名
 ナ付テ太子自ノ名ヲ呼テ其ノ國ノ太子ノ敵ノ國ノ王ノ頸ヲ斬ルト叫テ此ノ草ノ人形ヲ斬リツ使チモ軍ノ將軍ヲ召テ頸
 ナ斬ル様ニ學テ追ヒ還シツ使本國ニ還テ此ノ事ヲ語ル王此レヲ聞テ大キニ曠チ成シテ員不レ知ヌ軍ヲ引將テ行向テ既

二國ノ境ノ内ニ入テ太子ヲ召シニ遣リ^{オコセタ}太子此レヲ聞テ一人ノ軍ヲモ不^レ發ズ亦怖^レ氣色无^クテ只今行向フト云ヒ還セリ其ノ時ニ前ニ可^レ隨キ由^テ勸メシ大臣公卿ハ然^レバ云テ皆彼ノ敵ノ□ニ隨ヌ或ハ殘リ居テ太子ト諸共ニ命ヲ棄テム事ヲ待テ空^ニ仰テ居タリ太子既ニ出向ト爲ル時ニ具セル物共有^リ足高ク付タル床子二ツ瓶子一ツ硯墨筆此等ヲ鬻^ツ結タル童子二人ニ令^レ持メテ出向テ一ノ床子ヲ打テ立テ太子其レニ尻ヲ懸テ坐シヌ其ノ前ニ二ノ床子ヲ立テ一ニハ瓶子ヲ置ク一ニハ硯ヲ置テ墨ヲ令^レ摺ム其ノ時ニ敵ノ方ノ多ノ軍等此レヲ見テ楯ヲ叩テ咲フ事无限シ王ハ我レニ隨ガム爲ニ文ヲ書テ令^レ得^ト爲ル也ケリ如此キ硯墨筆ヲ具セル思テ防ガム心有^ニハ如此クニ可^ニ出向^キ非ズ只爲ム様ヲ見^テ首ヲ斬^ラメ思^テ見^ル程ニ太子墨ヲ濃ク令^レ摺メテ筆ヲ塗シテ瓶子ノ頸ニ書キ廻ス其ノ後筆ヲ置テ硯ヲ拔テ瓶子ノ頸ニ宛テ敵ノ王ニ向テ云ク汝ガ若干ノ軍ハ我ガ一ノ劔ニ可^レ當キ非ズ汝デ王ヨリ始メテ軍等皆其ノ頸ヲ見ヨ此ノ瓶子ノ頸ニ書キ廻シ墨ハ皆汝等ガ頸ニ廻^タ我レ此ノ瓶子ノ頸ヲ一刀ニ打落シ墨ノ汝等ガ頸ニ廻^リタモ皆落トスト敵ノ王ヨリ始メテ若干ノ軍此レヲ聞テ互ニ其ノ頸ヲ見^ル一人^トシ其ノ墨ヲ通^ル人无^クシ王ヨリ始メ皆墨ノ廻^リタ事瓶子ノ如シ太子ハ目ヲ見^暎テ既ニ瓶子ノ頸ヲ打落シテ其ノ時ニ敵ノ國ノ王忽ニ馬ヨリ下テ二ノ手ヲ合セテ太子ニ向テ居タリ若干ノ軍ハ皆弓ヲハヅシ太刀ヲ棄テ面ヲ土ニ付テ臥セリ王ノ云ク我今日ヨリ後太子ヲ君トシ傳キ奉ラム願クハ太子頸ヲ免シ給ヘト請フ其ノ時ニ太子シバチ燒テ手ニ付テ天皇ノ位ニ昇ヌト名乗ル敵ノ國ノ王ハ仕^リ人ト名乗テ隨^テ還^ケリ然^レバ難^ク有^キ國ニテ有^ケルト語^リ傳^ヘトヤ

震旦盜人入國王倉盜財煞父語 第卅二

今昔震旦^一代ニ國王ノ財寶ヲ納メ置タル大ナル庫藏有^ケリ其ノ藏ニ財寶ヲ盜ミ取ラム爲^ニ盜人二人入^リニケ祖^ヤ也祖ハ藏ノ内ニ入テ財寶ヲ取^リ出^ス子ハ外ニ立テ取^リ出^ス物ヲ取テ立テリ而^ル間藏ヲ護ル者等來^ル外ニ立テ^ル子其ノ氣色ヲ見^テ思^ハク人來^ルト云^フ我^レハ逃^テ不^可レ捕^ズ藏ニ有^ル我ガ祖ハ逃^ゲ得^ズ事不^能ズ必^ズ捕^トス生^テ恥^チ見^ヨリ不^如ジ祖ヲ煞シテ誰人ト云^フ事ヲ不^知レ止^ム思^ヒ得^テ子近ク寄テ祖ニ云ク既ニ二人來^リ何^ガセ爲^ルト祖此レヲ聞^テ何^ラ何^コニ有^ル云テ藏ノ内ニ乍^ラ立^ラ顔ヲ指シ出^タ子其ノ祖ノ頸ヲ太刀ヲ以テ打テ落シテ頸ヲ取^テ逃^ケ去ヌ其ノ時ニ藏護^リノ者共藏ノ前ニ來^テ見^ル藏ノ戸打テ破^タリ人入^リト見^ル驚^キ騒^テ登^テ見^レバ藏ノ内ニ血多ク流^レリ怪^ムテ吉ク見^レバ頭无^キ死人有^リ亦藏ノ財物多ク失^タリ然^レバ國王ニ此ノ由ヲ申^シ上^グ國王ノ宣^ハク其ノ藏ノ内ニ頭无^クテ有^ラム死人ハ此レ藏ニ入^ル盜人也此レ祖子ナラ祖ハ藏ノ内ニシ財物ヲ取出^シ子ハ外ニ立^テ其^レヲ受^ケ取^ル間人來^リ會^ハレ内ヨリ逃^ゲ不^可レ出^散テ可^レ被^レ捕^キ誰人ト不^レ令^レ知^ジガ爲^ニ子父ガ頸ヲ取^テ逃^ケル心得^テ其ノ國ノ習^シテ本ヨリ祖死^テ後日ノ善惡ヲ不^撰ズ三日ノ内ニ必^ズ葬^ス事定^レル習也然^レバ其ノ頸无^キ人ヲ取^リ出^シテ道ノ辻ニ令^ニ棄^置メテ竊^ニ人ヲ遣^シテ令^見ム此ノ盜人我ガ祖ヲ取出^テ辻ニ置^ツト見^テ此^レ必^ズ人付テ護^ルト心得^テ日晩方ニ成^テ構^ヘテ人吉ク醉^ヌ酒ヲ求^メテ多ク瓶ニ入^レテ肴ヲ相^シテ我^レハ異體ノ様ヲ作^テ此^レヲ荷^ヒ持^テ其ノ死人ノ邊ヲ過^テ彼ノ護^ル者共終日ニ護^リ疲^レテ極^テ飢^レバ此ノ酒肴ヲ荷^ヒ持^テ通^ルヲ奪^ヒ取^テ吉飲^ミツ其ノ後此ノ盜人構^ヘテ吉ク乾^ル木ノ少シモ火ニ指^シ寄^セバ停^リ无^ク燃^ヌ車ニ積^テ牛ヲ係^テ遣^リ持^テ行^ク間ニ此ノ死人ノ邊ヲ過^ル暗^キ程ニ誤^{タル}様ニ以^テ成^シテ此ノ死人ノ上ニ打^チ係^ケツ車遣^ル人ノ云ク我^レ極^{タル}誤^ヲ致^セリ速^ニ人ヲ呼^テ具^シテ取^ラム云テ棄^テ去^ヌ此ノ護^ル者共吉ク醉^テ頭^ヲ逆^ニ皆寢^入テ臥^テ此ノ事ヲ何モ不^レ知^ズ然^レバ見^答

停一本滞ニ作ル

皆ノ下死一人無
クシテトア

ムル人モ无キ程ニ火ヲ燃シテ道ヲ行ク人此ノ死人ノ邊ヲ火ヲ打チ振テ過ルニ火ヲ打チ係テ過ギヌ護ル者共皆寢入テ不
レ知ザル程ニ死人皆焼ケヌ護ル者共皆
テ不
人無クシテ灰ノミ有
等谷チ蒙テ頸被レ取ムト恐テ迷フ
ト云ヘド國王ニ此ノ由ヲ申ス國王此ノ護ル者共谷メ給フ事无テ宣ハク此ノ盗人極テ賢キ者也ト宣フ亦其ノ國ノ
習シテ本ヨリ父母ヲ葬テ三日ガ内ニ必ズ浴ムル河有リ其ノ河ヲ必ズ浴ムトス然レバ今日ヨリ三日ガ間ニ其ノ河ヲ浴ム
者チ必ズ捕テ進レト宣旨ヲ被レ下レヌ人付テ護ルト見バ定メテ不レ浴ジ然レバ可レ搦キ軍ヲバ遠ク置テ若キ女チ一人河
ノ邊ニ居ヘテ可レ令見シ出來テ河浴ムル者有ラバ女ノ告ムニ隨テ圍ミ寄テ可レ搦シト被レ定レヌ然レバ女一人ヲ置テ令
レ護ル間ニ一人ノ男出來テ其ノ女ニ睦レテ二人臥シヌ興キ上リテ男ノ云ク極ク熱シ汗漉ト云テ河ニ下テ水ヲ浴テ上
テ亦女ト吉ク契ル其所ニ行會ハム吉ク云ヒ置テ去メ女ハ只河ヲ浴ゾト思テ人ニモ不レ告テ三日過テ國王何ニト尋ネ
給フニ更ニ河浴ムル人无シト申ス國王極テ怪シキ事也トテ其ノ女ニ此ノ事ヲ尋問ヒ給フニ女ノ申サク更ニ來テ河浴ム
ル者无シ只一人ノ男來テ夫妻ト可レ成ベキ契テ語テ二人臥シテ後ニ熱シ汗漉ト云テ河ニ下テ上テ行キ去テ其ノ所
ニ行キ會ハム申シテ去ニシ者ナム有リシ其チバ態ト水浴ムル不レ思シ也ト國王此レヲ聞テ只其メリ此レガ謀リニ毎度
ニ負ル事ハ極テ嫉キ事也トテ其ノ女ヲ籠メ置テ他ノ男ニモ不レ令レ嫁シ被レ置レヌ若シ其ノ男ノ子チヤ懷妊セル事モヤ
有ルト云フ疑ヒナル其ノ疑ヒモ驗ク此ノ女懷妊シヌ國王喜ビ給フ事无限シ月滿テ子既ニ生レヌ其ノ國ノ習シテ本ヨリ
我ガ子ノ生レタル此レハ我ガ子ト不レ知モ三日ガ内ニ行會テ必ズ父其ノ子ノ口ヲ吸フ事有リ然レバ此ノ女若シ懷妊
シテ子産ミタバ其ノ子ノ口ヲ吸ハム者ヲ搦ガ爲ニ女ニ他ノ男ヲバ不レ令レ嫁シ被レ置レタ也ケル然レバ其ノ生レタ子チ
母ニ令レ抱メテ市ニ被レ出レヌ若シ男出來テ此ノ子ノ口ヲ吸フ事有ラバ必ズ可レ令レ搦シト護ルニ更ニ來テ子ノ口ヲ吸フ

男无シ而ル間一人ノ男來□餅ヲ持タリ此ノ子チ見テ極テ嚴シキ子カナ此ノ餅令レ食メム餅嚼テ兒ニ吞セヌ然レバ
母モ只我子□嚴ミテ物ヲ吞リト思テ止メ搦ズル者共然ノ如キ思テ不レ搦ズ母モ亦見タル事モ无シ國王亦尋ネ間
ヒ給フニ口ヲ吸フ人无キニ依テ不レ搦ザル也只此ノ子チ嚴ミテ餅ヲ嚼テ吞ムル男有ツト國王此レヲ聞テ奇異ニ嫉ク思ヒ
給フト云ヘド今ハ可レ爲キ方无クテ止メ其ノ後年月ヲ經テ隣ノ國ニ軍發テ其ノ國ノ王ヲ討テウカレタル人位ニ即ヌト
聞キ給フ其ノ謀心モ不レ及ズ思ヒ給フ間ニ其ノ隣ノ國ノ新キ王此ノ國ノ王ノ娘ヲ后ト爲ムト云ヒ送レリ此ノ國ノ王速
ニ此ノ事ヲ受ケツ日ヲ定メテ會セ給フ其ノ日ニ成テ隣ノ國ノ新キ王眞不知ヌ軍ヲ引將テ超ヘ來ル此ノ國ニモ其ノ營ミ
无レ量シ娘ヲ嚴ミ傳テ已ニ會セ給ヒツ三日ヲ過テ隣ノ王后ヲ具シテ本國ニ返リナム時ニ舅ノ王聲ノ王ニ會テ物語ノ次
ニ舅ノ王居寄テ忍テ聲ノ王ニ云ク君ハ先年ニ自ノ藏ニ入テ財取リ給ヒシ人カ御心ノ程ヲ聞クニ然リト思ナリ努々メ不
レ可ニ隱給フズト聲ノ王此レヲ聞テ打チ頬突テ然カサニ侍リ舊事ヲ被レ仰レ不レ出ト云テ后ヲ具シテ本國ニ返テ住ケレ
舅ノ王イミジキ者ノ心ニ遂ニ負テ娘ヲ會セツ事ト思ヒ給ヒケレ後々ニハ他ノ國ノ王ニモ不レ蔑ゾ有ケル其ノ聲ノ
王ノ德也ケリト語リ傳ヘタトヤ

○法苑珠林卷三十一 潜遁篇引證部

生經云。佛告諸比丘。乃昔過去無數劫時。姉弟二人。姉有一子。與舅俱給官御府織。見帑藏中奇寶好物。即
共議言。吾織作勤苦。藏物多少寧可共取用解貧乏。伺夜人定。鑿作地窟。盜取官物不可算數。明監藏者。覺物
減少以啓白王。王詔之曰。勿廣宣之令外知聞。舅甥盜者謂王不覺。王曰。至于後日必復重來。且嚴警守以用
待之。得者收捉無令放逸。藏監受詔即加守備。其人久々則重來盜。外甥教舅。舅今年尊體羸力少。若爲守

者所得不能自脫。我力强盛當濟挽鼻。鼻適入窟爲守者所執。執者喚呼諸人。甥捉不制。畏明識之。輒截鼻頭出窟持歸。晨曉藏盤具以啓聞。王又詔曰。擧出其屍置四交路。其有對哭取死屍者。則是賊魁。棄之四衢警守積日。人馬填噎塞路奔突。其賊射鬪。載兩車薪置其屍上。守者啓王。王詔候伺。若有燒者收縛送來。於是外甥教童執炬舞戲。人衆總鬧以火投薪。薪然熾盛守者不覺。具以啓王。王又詔曰。若鬪維更增嚴伺。其來取骨則是元首。甥又覺之。兼煨釀酒特令醇厚。詣守備者微而沾之遺。守者連昔饑渴見酒聚飲。飲酒過多皆共醉寐。酒瓶盛骨而去。守者不覺。明復啓王。王又詔曰。前後警守竟不緝獲。其賊狡黠更當設謀。王卽出女莊嚴寶飾。安立房室於大水傍。衆人侍衛伺察非安。必有利色來趣女者。逆抱捉喚令人收執。他日異夜甥尋竊來。因水放株令順流下。唱嗽葦隱。守者驚趣謂有異人。但見株杙。如是連昔數數不變。守者睡眠。甥卽乘株到女房室。女則執衣。甥告女曰。用爲牽衣可捉我臂。甥素凶黠。預持死人臂以用授女。女便放衣捉臂。而大稱叫運。守者寤甥得脫走。明具啓王。王又詔曰。此人方便獨自無雙。久捕不得當奈之何。女卽懷妊。十月生男男大端正。使乳母抱行周徧國中。有人見鳴便縛送來。抱兒終日無就鳴者。甥爲餅師住餅爐下。小兒饑啼。乳母抱兒。趣餅爐下市餅哺兒。甥見兒鳴。具以白王。王又詔曰。何不縛送。乳母答曰。小兒饑啼。餅師授餅因而鳴之。不識是賊。何因白之。王又使母更抱兒出。見近兒者便縛將來。甥沽美酒。呼母伺者勸酒醉眠。便盜兒去。醒寤失兒。具以啓王。王又詔曰。卿等頑賤貪嗜狂水。既不得賊復亡失兒。甥時得兒抱至他國。前見國王。占謝答對引經說義。王大歡喜。輒賜祿位以爲大臣。而謂之曰。吾之一國智慧方便無逮卿者。欲以臣女若吾之女。當以相配自恣所欲。對曰不敢。君王見哀。其實欲索本國王女。王曰善哉。從所志願。王卽自以爲子。遣使求彼王

女。王卽可之。卽遣使者欲迎王女。勅其太子。五百騎乘皆使嚴整。甥爲賊臣甥懷恐懼。若到彼國。王必覺我見執不疑。便啓其王。若王見遣。當令人馬衣服鞍勒一無差異。乃可迎婦。王然其言。王令二百五十騎在前。二百五十騎在後。甥在其中跨馬不下。女父自出屢觀察之。王入騎中躬執甥出。爾爲是非。前後方便捕何叵得。稽首答曰。實爾是也。王曰。卿之聰黠天下無雙。卿之所願。以女配之得爲夫婦。佛告諸比丘。欲知爾時外甥者則吾身是。外國王者舍利弗是。其舅者今調達是。女婦翁者輸頭檀王是。婦母者摩耶夫人是。其婦者拘夷是。其子者羅雲是。佛說是時莫不歡喜。

立生贊國王止此平國語 第卅三

代ノ上周ノ
トアルベシ
今昔震旦ノ
代ニ
ト云フ人有ケリ震旦ノ北ノ方ニ
ト云フ大ナル國有リ彼ノ人其ノ國ノ王ト成テ既
ニ彼ノ國ニ行ク國ノ境ニ入テ王國人ニ云ク此ノ國ニハ年ノ内ニ何ナル事カ有ル亦何ソ國ハ廣シト云モ民ハ少ク亦所
ハ荒レタル國ノ人答テ云ク此ノ國ニ昔ヨリ今ニ至ルマ毎ノ年ニ一度極タル大事有リ此レニ依テ國ニ人少クシ家モ空キ也
ト王ノ云ク其レハ何事ト國ノ人ノ云ク此ノ國昔ヨリ神強クテ在マス而ルニ毎ノ年ニ一度祭有リ其ノ祭ニハ國ノ内ニ家
高ク身豊ナル人ノ娘ノ年十五六ナル形美麗ニシ未ダ不レ嫁ザル撰ビ定メテ今年ノ御祭ノ日ヨリ潔齋シテ御注連ヲ給リ
テ一年ノ間精進ニシ明ル年ノ御祭ノ日ニ成テ諸ノ神寶等ヲ相ヒ具シ彼ノ女ヲ立テ、聳ニ乘セテ大海ノ邊ニ將行
テ船ニ令レ乘メテ海ニ放レバ即チ海ノ底ニ入ヌ然レバ其レヲ神ノ御使人ニ奉リ其レヲ神ノ御妻ニシメ給フ也然レバ國ノ人
其ノ事ニ佗ビテ國ニ跡ヲ不レ留ズ亦精進愚ナレ其ノ家亡ビヌ亦國ニ大水出デテ人ヲ流シ里ヲ失フ然レバ民有付ク事難

シト王ノ云ク然ラバ吉ク潔齋ヲ不レ怠^ズシ可^レ祭^キ也ト國人此レヲ聞テ彌ヨ恐テ迷フ事无限シ其ノ後月日過テ亦ノ年ノ御祭ニ成ヌ其ノ時ニ王ノ云ク此ノ御祭ニ自ラ可^レ參シト然レバ國ノ内軒^ノ錦ヲ張リ玉ノ瓔珞ヲ以テ莊^レリ王ノ御行事ノ初^メニ嚴キ事例ニ勝^リ諸ノ官不^レ闕^ズ皆仕^レリ國ノ内舉テ此レヲ見^ル王見^レバ玉ノ疊ニ色々ノ錦ヲ張^リテ諸ノ財^ヲ盡クシ莊^レリ多クノ人前後ニ繞^リ立^リ高^ク方ニハ靦^馬ニ乘テ亦或ハ幡^ヲ持^チ或ハ鉞^ヲ捧^リ或ハ鬘^ヲ差^シ或ハ神^ヲ取^レル者員不^レ知ズ多カ^ク其ノ尻ニ父母親族員ヲ盡シテ車ニ乘テ泣ク送^ル王此レヲ見^テ彼ノ父母ノ思^フ事何許^{ナル}ラ思^フニ糸惜^キ事心肝^ヲ碎^クガ如シ其ノ時ニ王ノ云ク彼ノ御疊暫ク可^レ留シ我レ此ノ國ヲ知^テ初^メテ奉^ラム生贄^ヲ見^テ奉^ラメ疊^ヲ留^メサセ靦^馬皆馬ヨリ下^テ傳^キ合^{ヘル}事无限シ其ノ時ニ王寄^テ御疊ノ帷^ヲ搔^上ゲテ見^レバ錦ノ帳ノ内ニ金ノ床^ヲ立^テ、其ノ上ニ五十六歲許ノ端正ナル女人髮^ヲ上^ゲテ玉ノ莊^ヲ玉ノ鬘^ヲ差^シ隱^シテ有^リ泣^ク事无限シ王此レヲ見^レ我レ悲^キ事无限シ涙^ヲ落^ルヲ押^入レテ云ク暫ク可^レ待^シ此ノ女人ハ極^ク異^様也ケリ此レハ偏^ニ我^レノ蔑^ル也最初ノ御祭^ヲ吉ク勤^メヨト我^レ自^ラ參^ツル前々ノ人ハ御祭^ニ如^レ此^ハカク奇^キ者^ヲ撰^ビ定^メテ奉^レバ國モ亡^ビ神モ嘖^リ給^フコソ有^ケレ此^レハ我等ソラ近^付キ可^レ仕^キ者^ニ非^ズ指^替テ可^レ奉^キ也ト云^フニ皆人恐^テ迷^フ事无限シ其ノ時ニ王一人ノ巫^ヲ召^テ云ク御神ハ何所^ニ在^ト巫答^テ云ク御神ハ海ノ底^ニ在^ス而^ルニ祭ノ日ハ此^ニ近^付キ在^シテ此ノ人ヲ請^取リ給^フ其ノ時ニハ風吹^キ浪立^テ海ノ面極^テ恐^シ氣也而^ル時^ナム請^取リ給^ハト知^ル不^レ然^ザバ請^取リ不^レ給^ズト知^ル也ト王ノ云ク然也但^シ今日^ハ此ノ御祭^ヲ止^メテ此ノ由^ヲ申^シ延^ベテ吉^キ日^ヲ撰^ビ定^メテ生贄^ヲ差^替テ奉^ラム思^フ速^ニ此ノ由^ヲ可^レ申^シト云^ハ巫ノ云ク何^カ申^サム其ノ時ニ王ノ云ク汝等^ハ年來^仕リ付^テ御神^ノ被^レ仰^ル、樣^ハ云^フハ何^ゾ神^ノ在^ス所^ヲ不^レ知^ザル而^ル間^ニ海ノ面極^テ惡^クシ高^キ浪立^ツ王然^バ

コ御神ノ不在^ス前^ニ速^ニ參^リ向^テ此ノ由^ヲ申^シ返^リ來^レト云^テ一人ノ巫^ヲ破^船ニ令^レ乘^メテ海^ニ放^ツ見^ルニ其ノ船漂^テ巫海^ニ落^入ヌ其ノ後王ノ云ク今^ハ參^リ着^キキマ^ラ遲^ク返^リ來^ル哉^ト亦次ノ巫^ヲ召^シテ云ク日高^ク成^ヌ何^ゾ遲^ク來^ルソ亦重^テ汝參^レト頸^ヲ突^テ海^ニハメツ亦見^ル事^ヲ奇^キカ^ナヤト次々ノ巫^不殘^ズ海^ニ突^キ入^レツ其ノ後御神ノ御返^事ヲ聞^テ吉^キ女^ヲ求^メテ御祭^ヲ可^レ勤^キ也ト云^テ此ノ女^ヲ相^見シテ返^テ妻^トシ置^キツ國ノ人此^レヲ見^テ極^ク恐^テ迷^フ王ハ國ノ内ニ池^ヲ令^レ掘^メテ水^ヲ湛^ヘテ旱^ナラ此^レヲ以^テ田^ヲ作^レ若^シ雨降^テ大水出^バ溝^ヲ掘^テ水^ヲ去^ト俸^ツ此ノ女人ノ父母親族ハ喜^ブ事^ヲ无限シ女人ハ后^ト成^テ亦无^ク被^レ傳^ル此^レヨ後風雨時^ニ隨^ヒテ國ノ内心^ニ叶^テ民平^シテ國榮^ニテ露^恐ル、事^ヲ无^シ其ノ國^ニ絶^ニケリ語^リ傳^ヘトヤ

○史記卷百二十六滑稽傳

魏文侯時。西門豹爲鄴令。豹到問民所疾苦。長老曰。苦爲河伯娶婦。以故貧。豹問其故。對曰。鄴三老廷掾。常歲賦歛百姓。收取其錢得數百萬。用其二十萬爲河伯娶婦。與祝巫共分其餘錢持歸。當其時。巫行視人家女好者云。是當爲河伯婦。卽婢取洗浴之。爲治新繒綺縠衣。閒居齋戒。爲治齋宮河上。張緹絳帷女居其中。爲具牛酒飯食。行十餘日。共粉飾之如嫁女床席。令女居其上。浮之河中。始浮行數十里乃沒。其人家有好女者。恐大巫祝爲河伯取之。以故多持女遠逃亡。以故城中益空無人。又困貧。所從來久遠矣。俗語曰。卽不爲河伯娶婦。水來漂溺人民。豹曰。至時幸來告。吾亦往送女。至其時豹往會河上。三老官屬豪長者里父老皆會。其巫老女子也。所從弟子十人。皆衣繒單衣立大巫後。豹呼河伯婦視之曰。是女不好煩大巫。爲入報河伯更求好女。卽使吏卒拘大巫。投之河中。有頃曰。何久也。弟子趣之。凡投三弟子。豹曰。巫嫗弟子是

女子也。不能白事。頗三老爲入白之。復投三老河中。豹簪筆磨折。嚮河立待良久。又曰。三老不還。欲使廷掾與豪長者一人入趣之。皆叩頭流血色如死灰。豹曰。延掾起矣。狀河伯留客之久。若皆罷去歸矣。吏民大驚恐。從是不敢復言河伯娶婦。豹即發民鑿十二渠。引河水灌民田。皆得水利民人足富。豹名聞天下澤流後世。

聖人犯后蒙國王答成天狗語 第卅四

今昔震旦ノ代ニ云フ所ニ遙ニ人氣ヲ遠ク去テ深キ山ノ奥ナル谷ニ柴ノ庵ヲ造テ戸ヲ閉テ人ニモ不被知シテ年來行フ聖人有ケリ此ノ聖人年來ノ行ノ力ニ依テ護法ヲ仕テ鉢ヲ飛バシ食ヲ繼ギ水瓶ヲ遣テ水汲マス然レバ仕フ人无シト云モ諸事思ヒニ叶テ乏キ事无シ而ルニ此ノ聖人國王ノ后ノ有様ヲ文中ニ説ケル見テ何バレカクハ讚ニカト忽ニ見シキ心付ヌ天女ハ境界ニ非ズ只間近キ所ノ后ヲ見ト思フ心有テ久ク成ヌ然レバ可爲キ方无シ而ル間祕文ノ中ヲ見ルニ不動尊ノ誓ヲ説ク事有リ其ノ中ニ仕者有テ國王ノ后也ト云モ自ラ負テ行者ノ心ニ隨トヘム有ル誓ヲ見テ愛欲ノ心ニ不堪シテ試ニ仕者ニ申サバ思フ心付ヌ其ノ間ニ宮迦羅ト申ス仕者顯レテ聖人ト語ヒ給フ時ニ聖人ノ申サク我レ年來思フ事有リ叶ハ給ヤト仕者ノ宣ハク我レ本ヨリ憑テ係タル人ノ願フ事ヲ一トシ不叶ズト云フ事无ク聞ムト云フ誓ヒ有リ行者ニ仕ヘム事佛ニ仕ルガ如シ佛ノ境界ハ虛言无シ何ナル事也ト云モ何ゾ誓ヲ違ヤト行者此レヲ聞テ喜ビテ成シテ申サク我レ本ヨリ不動尊ヲ憑奉テ獨リ深キ山ニ居テ勤メ行フ亦ニ心无シ而ルニ國王ノ后ト申ヌナ女人ハ何ナル有様カ有ル極テ見キマホシ近來候ナル三千人ノ后ノ中ニ形貌端正ナラ負テ御坐シナム申セバ宮迦羅ノ宣ハク系安キ事也然ラバ必ズ明日ノ夜負テ將參ラム契テ返リ給ヒヌ其ノ後聖人乍喜ガフ夜モ難曙ク日モ難晚シ

然レバハ然カレドモノ誤

宮一本空ニ作ル下同ジ

只有リシヲ九字誤脱ア

此ノ事ヲ聞テ後更ニ他ノ事不レ思ズ心ニ思ヒ亂テ居タリ既ニ其ノ夜ニ成テ今ヤト待ツ程ニ夜少シ深更ル程ニ世ニ不レ似ズ香シキ香一山芬リ滿タリ此レハ何事ニカ有ラム思フ柴ノ戸ヲ押シ開テ入ル天女ト云フナ者ノ如クナ者ヲ宮迦羅負テ指置テ出給ヒヌ聖人見レバ金ノ玉銀ノ色々ノ玉ヲ微妙ニ身ヲ莊レリ百千ノ瓔珞ヲ係タリ様々ノ錦着テ種々ノ花ヲ造テ首ニ付ケ衣ニ付ケ諸ノ財盡シテ身ノ莊ト爲リ香シキ香可レ譬キ方无シ震旦ノ后ハ必ズ其ノ句卅六町香況ヤ狹キ一庵ノ内可レ思遣シ瓔珞ノ響玉ノ音打合テ細ク鳴リ合ヘリ髮ヲ上ゲテ簪ニハ色色ノ瑠璃ヲ以テ蝶ヲ造リ鳥ヲ造テ其ノ莊リ言モ不レ及ズ御燈明ノ光リニ諸ノ玉光リ合テ其ノ人光ヲ放ツ如シ打扇ヲ差隱シタ天人ノ降下ガ如シ其ノ人ノ顔初テ月ノ山ノ葉ヨリ出ルガ如シ我ニモ非テ恐シト思ヒタ氣色實ニ哀ル類无ク殿シ聖人此レヲ見ルニ心モ遮テ肝モ迷ヒヌ年來ノ行ヒモ忽ニ壞レテ念ジ不可過ズ三千人ノ后ノ中ニ年若ク形美麗ナル宮迦羅ノ撰テ負テ將御レバ世ニ无レ並シ劣ニモ聖人ノ目ニハ何カ況ヤ世ニ類无ク國中ニ此レニ等キ无ケレ聖人心肝モ无キ様ニテ手ヲ取リ觸ル、后可レ遁キ方无シ山ノ中ノ人モ不レ通ヌ所ニ夢ノ様ニテ來タレ只怖テ泣キ居給ヘリ未ダ不レ見習ヌ柴ノ庵ニ極テ恐シ氣ナル姿ナル聖人ノ有レバ惣テ恐ニ手ヲ取リ觸レバ生ニ非テ泣ク事无限シ然レバ櫻ノ花ノ雨ニ濕タル如シ而ル間聖人泣々ク佛ノ思シ食サム事ヲ恐レ思フト云モ年來ノ本意モ不レ堪ズ遂ニ后ヲ犯シツ曉ニ成テ宮迦羅來リ給テ后ヲ搔キ負テ返リ給ヒヌ其ノ後聖人他ノ事不レ思ズ只此ノ后ノ事ヲ心ニ係テ戀ヒ歎キ居タリ日晚ル、程ニ亦宮迦羅御マシ聖人ニ會ヒ給ヒテ宣ハク亦ヤ可ニ將參キ亦他ノ后ヲ見ムト思スト聖人ノ申サク只有リシ將御セト然レバ前ノ如ク負テ御レバ聖人ノ申サク只有リシ曙シ難シ亦曉ニ來リ給テ搔キ負テ返リ給ヒヌ如此クシ既ニ數月ヲ經ルニ后既ニ懷妊シ給ヘリ而ル程ニ國王三千人ノ后バレ必ズ皆不レ知給ケリ而ル間國王此ノ所

ニ渡リ給ヘルニ懷妊シタ氣色也國王ノ宣ハク汝后ノ身トシ既ニ他ノ男ニ近付ケリ此レ誰ガ爲ル事ゾト后ノ宣ハク我
 レ更ニ態ト男ニ近付ク事无シ極テ奇異ナル事ナム有ルト國王何事ゾト問ヒ給フニ后ノ宣ハク其ノ程ヨリ此ノ月
 來夜半許ニ十五六歳許ナル童子俄ニ來テ我レヲ搔キ負テ飛ガ如ク行テ極テ深キ山ノ中ニ將行レバ一ノ柴ノ庵ノ狹キ
 ニ恐ロシ氣ナル聖人ノ有ルナ極テ恐クシ惶ドモレ可レ通キ方无クシ近付ク程ニ自然ラカク罷リ成ル也ト國王宣ハ
 ク何方ニ行クト思ユル幾時許カ行クト后ノ宣ハク何方ト更ニ思ズ只鳥ノ飛モリ猶シ疾ク飛ビ行クニ一時許ニ行着
 クハ遙ニ遠キ所ニコ有ルメ申シ給ヘバ國王ノ宣ハク今夜將行カム手ノ裏ニ濃ク墨ヲ塗テ紙ヲ濕テ持テ其ノ庵ノ障子ニ
 押シ付ケヨ教ヘ給マヘ后國王ノ教ノ如クニ持テ給ヘリ而ル間宮迦羅聖人ノ所ニ來テ宣ハク今ヨリ後此ノ事可レ止給
 シ惡キ事出來リナム聖人ノ申サク只何カニ有レ前々ノ如ク迎ヘテ給ヘト宮迦羅ノ宣ハク後ニ更ニ恨ミ給フ事无カレ宣
 テ前ノ如クニ負テ將御シヌ后サル氣无キ様ニテ濕タル紙ヲ以テ手ノ裏ノ墨ヲ潤シテ障子ニ押付ケツ曉ニ例ノ宮迦羅來
 テ負テ返リ給ヒヌ其ノ朝ニ國王后ノ所ニ渡リ給ヒテ問ヒ給ヘバ后然々カ押シ付ケツ申シ給ヘバ國王亦后ノ手ノ裏ニ墨
 ヲ塗テ紙ニ多ク令ニ押付メテ諸ノ人ヲ召シテ此レヲ給テ宣旨ヲ下シテ宣ハク國內ニ深ク幽ム山ノ中ニ聖人ノ居
 ム所ヲ尋テ此レニ似タラ手ノ跡有ラム所ヲ憐ニ尋ネ得テ見テ可レ參シト被レ下レヌ使等宣旨ヲ奉テ四方四角ノ山ヲ
 尋ルニ遂ニ彼ノ山ノ聖人ノ庵ニ尋ネ至ヌ見ルニ此ノ手ノ形有リ違フ事无シ然レバ使返テ此ノ由ヲ申シ上ケ國王此レヲ
 聞テ宣ハク彼ノ聖人既ニ后ヲ犯セリ其ノ罪不レ輕ズ然レバ速ニ遠キ所ニ可レ流遣シト被レ定レテ云所ニ流シ
 遣バレ聖人流所ニシ歎キ悲ムテ思ヒ入テ死ヌ即チ天狗ニ成ヌ多ク天狗ヲ隨ヘテ天狗ノ王ト成ヌ而ルニ亦傳ノ天狗有
 テ云ク彼ノ天狗ハ既ニ國王ノ責ヲ蒙テ流罪ニテ死タル者也ト云テ不レ交ズ然レバ十萬人ノ伴ノ天狗ヲ引將テ他國ニ渡

例ノノ下
本如クトア

リニケリ
トナム
語り傳ヘタ
トヤ

(本書卷二十染殿后爲天狗被燒亂語參閱)

國王造百丈石卒堵婆擬煞工語 第卅五

今昔震旦ノ代ニ百丈ノ石卒堵婆ヲ造ル工有ケリ其ノ時ノ國王其ノ工ヲ以テ百丈ノ石卒堵婆ヲ造リ給ヒケ問ニ
 既ニ造リ畢テ國王思ヒ給ヒケ様我レ此ノ石卒堵婆ヲ思ヒノ如ク造リ畢テ極テ喜ブ所也而ルニ此ノ工他ノ國ニモ行テ
 此ノ卒堵婆ヲ起テム爲ラム然レバ此ノ工ヲ速ニ煞ムト思ヒ得給ヒテ此ノ工ノ未ダ卒堵婆ノ上ニ有ル時ニ不レ可レ下シ
 テ麻柱ヲ一度ニハラト令レ壞メツ工可レ下キ様モ无クテ奇異也ト思テ卒堵婆ノ上ニ徒ニ居テ爲方无シ我ガ妻子
 共然リト此ノ事ヲ聞キツ聞テバ必ズ來テ見ツラ故无クシ我レ死ナムズラ思ハシ物ヲト思フト云ヘ下音ヲ通ス程コソハ呼ハ
 メ目モ不レ及ズ音モ不レ通ヌ程ナレカモ不レ及テ居タリ而ル間此ノ工ノ妻子共此ノ事ヲ聞テ卒堵婆ノ本ニ行テ匝リ行テ
 見モレ更ニ可レ爲キ方无シ妻ノ思ハク然リト我ガ夫ハ可レ爲キ方无ハ不死ジ者ヲ構ヘ思フ事有ラム者ヲト憑ミ思テ
 匝リ行テ見ルニ工上ニ有テ着タル衣ヲ皆解テ亦斫テ糸ニ成シツ其ノ糸ヲ結ビ繼ギツ契ヲ降スガ極テ細クテ風ニ被レ吹レ
 テ飄ヒ下ルヲ妻下ニテ此レヲ見テ此レコ我ガ夫ノ驗シニ下ル物ヲト思テ契ヲ動セバ上ニ夫此レヲ見テ心得テ
 動カス妻此レヲ見テ然レバコ思テ家ニ走リ行テ續ミ置タル取リ持來テ前ノ糸ニ結ヒ付ケツ上ニ動カス隨テ下ニモ
 動ニ漸ク上ニ此ノ度ハ切タル糸ヲ結ヒ付ケツ其レヲ絡リ取レバ亦糸ノ二程ナル細キ結ヒ付ケツ亦其レヲ
 絡リ取レバ亦太繩ヲ結ヒ付ケツ亦其レヲ取レバ其ノ度ハ三絡四絡ノ繩ヲ上ゲツ亦其レヲ絡リ上ゲ取リツ

其ノ時ニ其ノ繩ニ付テ構テ傳ヒ下リヌ逃テ去リニケケ 彼ノ卒堵婆造リ給ヒケケ 國王功德得給ヒケケ世舉テ此ノ事ヲ謗ケリト語
リ傳ヘタトヤ

嫗毎日見卒堵婆付血語 第卅六

今昔震旦ノ代ニ州ト云フ所ニ大ナル山有リ其ノ山ノ頂ニ卒堵婆有リ其ノ山ノ麓ニ里有リ其ノ里ニ一人ノ
嫗住ム年八十許也其ノ嫗日ニ一度必ズ其ノ山ノ頂ニ有ル卒堵婆ヲ上テ拜ケリ大キニ高キ山バレ 麓ヨリ峯ヘ昇ル程嶮
ク氣惡クシ道遠シ然レド雨降ルト不レ障ズ風吹クト不レ止ズ雷電スト不レ恐ズ冬ノ寒ク凍レルモ夏ノ熱ク難レ堪キニ一日ヲ
不レ闕ズ必ズ上テ此ノ卒堵婆ヲ禮リ 如此ク爲ル事年來ニ成ヌ人此レヲ見テ強ニ其ノ本縁ヲ不レ知ズ只卒堵婆ヲ禮
ムナメ 思フ程ニ夏極テ熱キ比若キ男童子等此ノ山ノ峯ニ上テ卒堵婆ノ本ニ居テ冷ム間此ノ嫗腰ハ二重ナル者ノ杖ニ
リト 汗ナ中ヒツ卒堵婆ノ許ニ上リ來テ卒堵婆ヲ見レバ只卒堵婆ヲ匝リ奉ルナメ 思フニ卒堵婆ヲ匝ル事ノ怪レバ
係テ 汗ナ中ヒツ卒堵婆ノ許ニ上リ來テ卒堵婆ヲ見レバ只卒堵婆ヲ匝リ奉ルナメ 思フニ卒堵婆ヲ匝ル事ノ怪レバ
此ノ冷ム者共一度ニモ非ズ度々此レヲ見テ云ク此ノ嫗ハ何ノ心有テ苦シキ 如此クハ爲ルニ有ラム 今日來バ 此ノ事
問ハム云ヒ合セケ程ニ常ノ事ナレ 嫗這々上リニ此ノ若キ男共嫗ニ問テ云ク嫗ハ何ノ心有テ我等ガ若ク冷ガム 爲ニ來
ラ 猶苦シキ冷ガム 爲ニ來ニ思ヘド冷事モ无シ亦爲ル事モ无キニ老タル身ニ毎レ日ニ上リ下ル、極テ怪シキ事也此
令レ知メ給ヘト嫗ノ云ク此ノ比ノ若キ人ハ實ニ怪シト思ス 如此ク來テ卒堵婆ヲ見ル事ハ近來ノ事ニモ非ズ我レ者ノ
心知リ初メテ後此ノ七十餘年毎レ日ニカク上テ見ル也ト男共ノ云ク然レバ其ノ故ヲ令レ知メ給ヘト云フ也ト嫗ノ云ク
己レガ父ハ百廿ニテ死ニシ祖父ハ百卅ニテ死ニシ亦其レガ父ヤ祖父ハ二百ニ餘テ死ニケケ 其等ガ云ヒ置キケル 此ノ卒

堵婆ニ血ノ付カム時ゾ此ノ山ハ崩レテ深キ海ト可レ成キト父ノ申シ置シカ 麓ニ住ム身ニテ山崩レバ打ナ襲ハレ死ニモ
爲レト 若シ血付カバ逃テ去ラム 思テカク毎レ日ニ卒堵婆ヲ見ル也ト男共此レヲ聞テ嗚呼ツキ 嘲テ恐シキ事カナ崩レム
時ハ告ゲ給ヘト云テ喉ヒケル 嫗我レヲ喉ヒ云フト不ニ心得レ然也何デカ我レ獨リ生カム 思テ不ニ告申ムト云テ卒堵婆
ヲ匝リ見テ返リ下ヌ其ノ後此ノ男共ノ云ク此ノ嫗ハ今日ハ不來ジ明日ゾ亦來テ卒堵婆ヲ見ムニ怖テ 令レ走メテ喉ハム
云ヒ合ハセ 血ヲ出シテ此ノ卒堵婆ニ塗リ付テ男共ハ返テ里ノ者共ニ語テ云ク此ノ麓ナル嫗ノ毎レ日ニ上テ峯ノ卒堵婆
ヲ見ルガ怪レバ其ノ故ヲ問フニ然々ナム云ヒツ明日怖シ 令レ走メム卒堵婆ニ血ム 塗テ下ヌ 里ノ者共此レヲ聞テ然
ノ崩レナ物カナ云ヒ喉フ事无限シ嫗亦ノ日上テ見ルニ卒堵婆ニ濃キ血多ク付タリ嫗此レヲ見テ迷ヒ倒レテ走返テ叫
テ云ク此ノ里ノ人速ニ此ノ里ヲ去テ命ヲ可レ生シ此ノ山忽ニ崩レテ深キ海ト成トス如此ク普ク告ケ廻シテ家ニ返リ來
テ子孫ニ物ノ具共ヲ荷ヒ令レ持メテ其ノ里ヲ去ヌ此レヲ見テ血ヲ付ケシ男共喉ヒ合ヒタ 程ニ其ノ事ト无ク 世界サ
ザメキ 嗚リ合タリ風ノ吹キ出ツル 雷ノ鳴ルカ 思テ怪シブ程ニ虚空ツ、暗ニ成テ奇異ニ恐ロシ氣也而ルニ此ノ山動ギ
立タリ此レハ何々ニト云ヒ嗚リ合タル程ニ山ハ只崩レニ崩レ行ク其ノ時ニ嫗實チ云ルヒケケ物ヲナ 云テ適ニ逃得タル輩有
リト云モ 祖ノ行キケケ方チ不レ知ズ子ノ逃ケム道ヲ失ヘリ 況ヤ家ノ財物ノ具知ル事无クシ 音チ 叫ビ合タリ此ノ
嫗一人ハ子孫引キ具シテ家ノ物ノ具共一ツ失フ事无クシ 兼テ逃ゲ去テ他ノ里ニ靜ニ居ケリ此ノ事ヲ喉ヒシ者共ハ不
逃敢ニテ 皆死ニケケ然レバ年老タラ 人ノ云ハム事チバ可レ信キ也カクテ此ノ山皆崩レテ海ニ成ケリ奇異ノ事也トナ語
傳ヘタトヤ

○淮南子卷二假真訓

夫歷陽之都。一夕反而爲湖。勇力聖知與罷怯不肖者同命〔鴻烈解〕歷陽。淮南國縣名。昔有老嫗常行仁義。有二諸生過之。謂曰。此國當沒爲湖。謂嫗視東城門闕有血。便走上北山勿顧也。自此嫗便往視門闕。闕者問之。對曰如是。其暮門吏。故殺雞血塗門闕。明日老嫗早往。視門見血便上北山。國沒爲湖。與門吏言其事適一宿耳。一夕且而爲湖也。勇怯同命無遺脫也。

○述異記卷上

和州歷陽淪爲湖。昔有書生遇一老姥。姥待之厚。生謂姥曰。此縣門石龜眼血出。此地當陷爲湖。姥後數往視之。門吏問姥。姥具答之。吏以硃點龜眼。姥見遂走。上北山顧城遂陷焉。

○搜神記卷十三

由拳縣。秦時長水縣也。始皇時童謠曰。城門有血。城當陷沒爲湖。有嫗聞之。朝々往窺。門將欲縛之。嫗言其故。後門將以犬血塗門。嫗見血便走去。忽有大水欲沒。縣主簿令幹入白令。令曰。何忽作魚。幹曰。明府亦作魚。遂淪爲湖。

●宇治拾遺物語卷二唐率都婆に血付く事

昔、もろこしに大きな山ありけり。その山の頂に、大きな率都婆一つたてりけり。その山のふもとに里に、年八十ばかりなる嫗オウナの住みけるが、日に一度、その山の峯にある率都婆をかならず見けり。たかく大きな山なれば、ふもとより峯へのぼるほど、峻しくはげしく道遠かりけるを、雨ふり雪ふり、風ふき雷カミなり、しみこほりたるにも、又あつく苦しき夏も、一日もかかず必ずのぼりて、この率都婆を見けり。

かくするを人え知らざりけるに、わかき男ども童部の、夏あつかりけるころ峯にのぼりて、率都婆のもとに居つゝすゞみけるに、この嫗あせをのごひて、腰二重なるもの杖にすがりて、率都婆のもとに来て、率都婆をめぐりければ、をがみ奉るかと思れば、率都婆をうちめぐりては、すなはちかへりくすること一度にもあらず、あまた度このすゞむ男どもに見えにけり。この嫗は何の心ありて、かくは苦しきにするにかとあやしがりて、今日みえば、この事問はんといひあはせけるほどに、常の事なれば、この嫗はふくのぼりけり。男ども嫗にいふやう、わ嫗は何の心によりて、我らがすゞみに来るだに、あつく苦しき大事なる道を、すゞまんと思ふによりて、のぼり来るだにこそあれ。すゞむこともなし、別にすることもなくて、率都婆を見めぐるを事にて、日々にのぼりあるこそあやしき嫗のわざなれ。このゆゑ知らせ給へといひければ、この嫗、わかき主たちは實にあやしと思ふらん。かくまうて来てこの率都婆みること、此のごろの事にしも侍らず。物の心しりはじめてより後この七十餘年、日ごとにかくのぼりて率都婆を見たてまつるなりといへば、その事のあやしく侍るなり。その故をのたまへと問へば、おのれが親は、百二十にてなんうせ侍りにし。祖父は百三十ばかりにてぞうせ給へりし。それに又父の祖父などは、二百餘年までぞ生きて侍りける。その人々のいひおかれたりけるとて、この率都婆に血のつかん折になん、この山はくづれて深き海となるべきとなん父の申しおかれしかば、ふもとに侍る身なれば、山くづれなば、うちおほはれて死にもぞすると思へば、もし血つかば逃げてのかんとて、かく日ごとに見はべるなりといへば、この聞く男ども、をこがりあざけりて、恐ろしきことかな。くづれん時はつけ給

へなど笑ひけるをも、我をあざけりていふとも心得ずして、さらなり、いかてかは我一人逃げんと思ひて、告げ申さるべきといひて、歸りくだりにけり。この男ども、この姫は今日はよも來じ。明日また來て見んに、おどして走らせてわらはんと言ひあはせて、血をあやして率都婆によくぬりつけて、この男ども歸りくだりて、里のものどもに、このふもとなる姫の日ごと峯にのぼりて、率都婆みるをあやしさに問へば、しかくなんいへば、明日おどしてはしらせんとて、率都婆に血をぬりつるなり。さぞくづらんものやなどいひ笑ふを、里のものども聞きつたへて、をこなることのためしに引きわらひけり。かくて又の日姫のぼりて見るに、率都婆に血の大きにつきたりければ、姫うち見るまゝに、色をたがへて倒れまろび、はしりかへりて叫び言ふやう、この里の人々、とく逃げのきて命いさよ。この山はたゞ今くづれて、ふかき海になりなるとすと、あまねく告げまはして、家に行きて、子孫どもに家の具足どもおほせもたせて、おのれもちて、手まどひして里うつりしぬ。これを見て血つけし男ども、手うちて笑ひなどするほどに、その事ともなく、さゞめきのしりあひたり。風の吹き來るか、雷のなるかと思ひあやしむほどに、空もつゝやみになりて、あさましく恐ろしげにて、この山動き立ちにけり。こはいかにくとのしりあひたる程に、たゞくづれにくづれもてゆけば、姫はまことしげなるものをなどいひて、逃げ得たるものあれども、親の行方もしらず、子をも失ひ、家の物の具もしらずなどして、をめき叫びあひたり。この姫一人ぞ子孫も引き具して、家の物の具一つも失はずして、かねて逃げのきて、しづかに居たりける。かくてこの山皆くづれて、深き海となりければ、これをおざけり笑ひしものどもは、皆死

にけり。あさましき事なりかし。

長安市汲粥施人姫語 第卅七

今昔震旦ノ長安ノ市ニ粥ヲ多ク煮テ市ノ人ニ令食ムル姫有ケリ此ノ市ニ行キ違フ人ノ員不知ズ日ノ出ヅル時ヨリ日ノ入ル時ニ至ルマ市門ヲ出入ニスル市門ノ前ニ粥ヲ多ク煮儲テ百千ノ器ヲ並ベ置テ其ノ粥ヲ其ノ器ニ盛テ人ニ令食ムル功德ヲ造ケリ而ルニ始メハ其ノ粥ヲ杓ニ汲テ甕ニ器ニ入ルニ漸ク年月積ルニ隨テ功入レバ一二丈ヲ去テ杓ニ粥ヲ汲テ擲ゲ入ガ、塵許モ不^{コボサ}泛^{ザリ}ケリ猶年月ヲ經テ久ク積ルニ隨テ四五丈去テ杓ニ粥ヲ汲テ擲ゲ入ガ、露許モ不^{ザリ}泛^ルケ見ル人ノ云フ様ハ然ラバ何事也ト云フト年來ノ功入ラバ如此ク可有キ事也ナム云合ケルト語ヲ傳ヘタトヤ

於海中二龍戰獵師射一龍得玉語 第卅八

今昔震旦ニ一人ノ獵師有ケリ海邊ニ山ノ指出タル所ニ行テ鹿ノ來ヲ待テ射ムト思テ隱レ居タル間ニ見レバ海ノ中ニ二ノ龍出來タリ一ハ青シ一ハ赤シ此ノ二ノ龍互ニ啾合^{グヒアヒ}テ戰フ獵師奇異也ト見テ居タル間ニ一時許リ戰テ青龍負テ逃ヌ獵師其ノ夜其ノ所ニ宿シヌ亦ノ日見レバ昨日ノ同時ニ至テ亦此ノ二ノ龍出來ヌ前ノ如ク啾合テ戰フ程ニ亦青龍負テ逃ヌ既ニ二日青龍負ヌ獵師此ノ事ヲ見ムガ爲ニ猶シ其ノ夜其ノ所ニ宿シヌ三日ト云フニ亦二ノ龍出來ヌ前ノ如ク啾合ニ亦青龍負ク弱ク見ニ見ルニ糸惜キ事无限シ其ノ時ニ獵師ノ思ハク此ノ三日見ルニ二日ハ既ニ青龍負ヌ彼レヲ助ガケム爲ニ赤龍ヲ射煞^{ムト}シテ思テ箭ヲ矯^ダテ赤龍ニ指シ宛テ、射ルニ最モ中ヲ射ツ然レバ赤龍逃テ海ミノ中ニ入ヌ此レニ依テ

青龍身平カニシテ亦海ノ中ニ入マ其ノ後見レバ青龍海ノ中ヨリ出來レリ玉ヲ噉テ陸ヲ指テ來ル爰ニ獵師ノ思ハク青龍既ニ敵ノ赤龍ヲ射ニ依テ勝ツ事ヲ得タリ此レ我ガ恩ニ依テ也然レバ其ノ恩ヲ報ガセム爲ニ寶珠ヲ持來テ我レニ令レ得ト爲ル也ト心得テ海邊ニ寄バテ青龍獵師ヲ見テ彌ヨ近付キ來テ玉ヲ陸ニ吐キ置テ海ノ中ヘ返リ入マ其ノ時ニ獵師玉ヲ取テ家ニ返マ其ノ後諸ノ財心ニ任セテ出來テ乏キ事无シ然レバ家豐ニ成テ財寶ニ飽キ滿マ此レ奇異ノ事也トナ世ニ語リ傳ヘタルトヤ

○法苑珠林卷六十四漁獵篇感應緣

吳末。臨海人。入山射獵爲舍住。夜中有一人長一丈。着黃衣白帶來。謂射人曰。我有讐寇明當戰。君可見助當有相報。射人曰。自可助君耳。何用作報。答曰。明食時君可出溪邊。敵從北來我南住。應白帶者我黃帶者彼。射人許之。明出果聞岸北有聲。狀如風雨草木四靡。視南亦爾。唯見二大蛇長十餘丈。于溪中相遇便相盤繞。白鱗勢弱。射人因引弩射之。黃鱗者即死。日將暮復見昨人。來辭謝云。住此一年獵。明年慎勿復來。來必有禍。射人曰善。還停一年獵。所獲甚多家致富。數年後憶先山多肉。忘前言復更往獵。復見先白帶人。語之曰。我語君勿復來。君不能見用。讐子已大。今必報君。非我所知。射人聞之甚怖。便欲走。乃見三烏衣人皆長八尺。俱張口向之。射人即死出續搜神記

燕丹令生馬角語 第卅九

今昔震旦ノ秦ノ代ニ燕丹ト云フ人有ケリ此ノ人心猛ク悟リ有リ幼稚ノ時ニ國王ニ隨テ秦ニ趣ク其ノ後返ラム思フト

云ヘド返ル事ヲ不得ズシ父母ヲ見ル事无シ此レニ依テ燕丹父母ヲ戀悲テ國王ニ返ラム事ヲ請フニ更ニ不レ許ズ而ルニ猶泣キ悲ムデ返ラム事ヲ請フニ國王ノ宣ハク汝ガ然ラバ白キ烏ノ頭白キ馬ノ角生ムタラ我レニ令レ見メヨ其ノ時ニ許シテ汝ガ返ト燕丹此レヲ聞テ泣キ悲ムデ天ニ仰テ願フニ忽ニ白キ烏ノ頭ヲ得タリ地ニ伏テ請フニ角生タル馬來リ此レヲ得テ國王ニ申スニ國王奇異ノ事也ト思テ速ニ燕丹ヲ返シ許シツ然レバ燕丹思ヒノ如ク舊キ郷ニ返テ父母ヲ見テ悲ミ喜ビケリ語リ傳ヘタルトヤ

○史記卷八十六荊軻傳

燕太子丹者。故嘗質於趙。而秦王政生於趙。其少時與丹驩。及政立爲秦王。而丹質於秦。秦遇丹不善。故丹亡歸。歸而求爲報秦王者〔索隱〕燕丹求歸。秦王曰。烏頭白。馬生角乃許耳。丹乃仰天歎。烏頭即白。馬亦生角。

○燕丹子上卷

燕太子丹質於秦。秦王遇之無禮。不得意欲求歸。秦王不聽。謬言。令烏白頭馬生角。乃可許耳。丹仰天歎。烏即白頭馬爲生角。秦王不得已遣之。

●源平盛衰記卷十七始皇燕丹事

唐國ニ燕太子丹ト云フ人、秦始皇ヲ傾ントテ軍ヲ起シタリケルガ、燕丹ハ軍ニ負ケ、始皇帝ニ捕ハレテ深ク誠メオカレ、六箇年ヲ經ニケリ。燕丹ハ我身ノ事ハイカバセン、故郷ニ老イタル親ノアリケルヲ、今一度イカバシテ見奉ントゾ悲ミケル。丹、始皇ニ歎キ申ケルハ、今ハ本國ニ免シ遣ハシ給ヘ、六箇年ヲ過

テ禁獄例ナシ。又本國ニ老イタル父母アリ、イカバカリカハ歎キ悲ミ給フラン。今一度見エ奉ラバヤト云ヒケレバ、始皇欺テ、烏ノ頭ノ白ク成ンヲ見テ免スベシト宣ヒケリ。燕丹心憂ゾ思ヒケル。サテハ戀キ父母ヲ見ズシテ、是ニシテ空ク亡ン事コソ悲シケレト、夜ハ天ニ仰ギテ祈リ明シ、晝ハ地ニ伏シテ歎キ晩ス。實ニ祈誓ノ驗ノアリケルニヤ、頭白キ烏飛ビ來ツテ始皇帝ニ見エタリ。燕丹斜ナラズ悦テ、山烏頭白シ、ワレ本國ヘ歸ラント云フ。始皇カサネテ曰ク、馬ニ角生タラン時歸スベシト猶免サズ。燕丹今ハ日來ノ憑ミモ盡キハテ、爲方ナク思ヒケレ共、猶理ヲゾ思ヒケル。願クハ天地ノ神明、今一度故郷ニ歸テ、再ビ父母ヲ見セシメ給ヘトテ、明テモ暮テモ涙ニ咽ビテ祈リケリ。祈リノ甲斐アリテ、角馬庭上ニイナ、キケリ。始皇是ヲ見給テ、燕丹ハ天道ノ加護深キ者也ケリ。白鳥角馬ノ瑞恐レアリトテ、免シテ本國ヘ返シ遣ハシケリ。

●平家物語卷五咸陽宮の事

燕の太子丹、秦の始皇帝にとらはれて、いましめをかうぶる事十二年、ある時燕丹涙をながして、われ故郷に老母あり、いとまを給はつて、今一度かれを見んとぞなげさける。始皇帝あざわらつて、汝にいとま給はん事、馬に角おひ、烏の頭の白くならんを待つべきなりとぞ宣ひける。燕丹天にあふぎ地にふして、ねがはくは馬につの生ひ、烏の頭白くなしてたべ。本國へ歸つて、今一度母をみるとぞいのりける。かの妙音ぼさつは、靈山淨土に啓して不孝の輩をいましめ、孔子顔回は、支那震旦に出て忠孝の道をはじめ給ふ。みようけんの三ぼろ、孝行の心ざしをあはれみ給ふ事なれば、馬に角おひて宮中に来り、からすの

頭白くなつて庭前の木にすめりけり。始皇帝、烏頭馬角の變におどろき、綸言かへらざる事をふかく信じて、太子丹をなだめつゝ、本國へこそ返されけれ。

(寶物集卷一秦始皇燕太子丹ノ事參閱)

利德明德興、酒常行會語 第四十

今昔震旦ノ□代ニ利德明德ト云フ二人ノ上戸有ケリ此ノ二人三日ヲ不過ズ常ニ相ヒ互ニ行キ會テ酒ヲ呑ムヲ以テ業トス而ル間利德田蕩ノ爲ニ家ヲ出ヌ明德利德ガ出タル不知ズシ利德ガ家ニ來レリ然而レド家ノ主无キニ依テ家ノ内ニ酒坏ヲ請テ家ノ池ノ橋ノ上ニ居テ池ノ水ヲ汲テ酒坏ヲ指テ水ヲ呑ムテ返ヌ其ノ暮ニ利德家ニ返ニ妻有テ利德ニ明德ガ來リツ事ヲ語ル利德此レヲ聞テ明ル朝ニ池ノ橋ノ上ニシ水ヲ汲ム事昨日ノ如クシ誦シテ曰ク御酒ノ欲ハ非ズ明德ガ來ル也ト云ル昔ハ酒ヲ呑ムニ依テモ如レ此キゾ有ケルト語リ傳ルヘトヤ

芥一本欲ニ作ル

證攷
今昔物語集卷上終

大正二年六月十三日印刷
大正二年六月十六日發行

今昔物語集附定價金貳圓參拾錢

著作
所權
有作

發行所

(明治二十九年六月設立)

東京合資
神田會社
富山房

電話一〇三六番
本局四一三〇番
振替口座五〇一

纂訂者 芳賀矢一
發行者 東京市神田區裏神保町九番地
合資富山房
代表者 坂本嘉治馬
同所合資會社富山房社長
印刷者 牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
高桑基次

牛込區市谷加賀町一丁目二十番地
秀英舍工場印刷

最高評忽ち十二版

文部省文藝委員 會選定 ギョ氏オ原作 文學博士鷗外森 林太郎先生譯

フアウスト

四六判極美裝上下
二冊特價
一一圓八拾錢
(正價金參
圓五拾錢)
送料內地十
支臺樺卅五
錢支四十五
錢

フアウストの名篇は、從來久しく邦人に翹望せられたるも、其内容は僅かに一部學者文士の間のみ弄ばれたるに止りき。今や鷗外博士の完譯成るに及び、將た之を臺本として東京大阪兩帝劇に演ぜらるゝに及び、一般人士初めて其の眞味に指を染むるを得て、永き間の渴望は忽ち大潮の如く漲り、賣行實に空前の盛況を呈せり。是蓋し、原著の金聲譯文の玉音相和して、フアウストを邦人不朽の所有物となしたるに由る。幽玄深大なる哲人的思索と情火烈々たる詩人的想像の醴泉を酌まんとするものは速かに本書に來れ。

帝國大學圖書館長 文學士 和田萬吉先生著

最新 謠曲物語

編後
菊判全一冊總振假名
插畫木版色刷其他畫圖
定價金 貳圓
郵稅內地金十二錢

現今謠曲及能樂の流行空前の盛と稱せらる。此時に當り樂譜即諸流の節附本以外に謠曲を學び能樂を観る人々の爲に適當なる豫習書なきは、眞に斯界の闕點といふべし。編者此に慨あり、其自ら經驗せる所に基き、謠曲學習者をして謠曲の結構脚色を明にし、曲中人物の性格態度に通ぜしめん爲に、原文を平易なる近體文に翻し謠曲の短所なる冗句繁語を艾りて主旨の徹底を圖りたるもの即本書なり、斯道に遊ぶ人先此を以て入門の資とせば、毎曲に對し的確なる觀念を得て造詣必ず速かなるべく能樂を観る人亦之によりて解眞の捷徑を得ん。其他謠曲に於て劇詩化せられたる我古傳説の如何を知らんとする人々は一本を各家庭に備へて兒女と共に興話の料とするも妙なり。

天覽 台覽 謠曲物語

編前
菊判全一冊總振假名
插圖木版色刷其他三十八圖
定價金 貳圓
郵稅內地金拾貳錢

本編は畏くも天覽台覽に上りたるのみならず、各宮家に於ても御嘉納遊ばされ、中にも伏見宮殿下には最も興趣深き著なり、後編も出來次第御希望の令詞ありたりと承はる、是れ誠に本書の光榮とする所なり。

芳賀文學博士著

九 版

國民性十論

四六判洋裝全一冊
紙數二百六十餘頁
定價金七拾錢
郵税金六錢

世界の舞臺に立て活動せんとするには、先づ自國民持自の性質を十分理解し置くを要す。是れ常に國民としての義務なるのみならず、國運の發展を謀り自己の向上進歩を全うするに於て、必要缺く可からざる要素なれば也。本書は國民特有の性質を神話、文學、語學、法律、美術、風俗等の各方面より縱横に論斷せるもの、着想奇警、引證的確、よく我國體の精華を發揮し、よく我國國民の真相を暴露す。森嚴莊重の論あり、滑稽諧謔の談あり。何人に向つても一讀卷を釋く能はざらしむる快味を與ふ。眞に是れ各人必讀の書也。疑もなく國民必購の書也。

九 版

國文學史十講

菊判洋裝美本全一冊
紙數二百八十餘頁
定價金七拾五錢
郵税金八錢

本書は帝國教育會に於ける十回の講義を基として論述せるものを、更に改版して増訂を加へたるもの該博なる考證、明快なる論斷、よく我が國文學史の大綱を盡せり。蓋し國文學史中の最も典據と爲すに足るもの也。

坪内博士序 杉谷代水先生譯補

八 版

希臘神話

裝釘優美紙數四百廿六頁
泰西名畫二十餘枚入
定價壹圓五十錢
郵税(内地)十二錢
郵税(外地)廿五錢

時處を通じ泰西文藝に於ける最大勢力は希臘文藝にして、神話は又其本源精髓ともいふべし。ダンテ、沙翁より、ゲーテ、ワグネルに至るまで、繪畫に彫刻に戯曲に詩文に演説にはた音樂に毎に其題材となり引例となり故事となりて、古今大小のあらゆる作家に盛用せらるゝものは希臘神話也。希臘神話の知識なくして泰西の著譯を讀むは背景なき演劇を觀るに等し。而もホーマア以下の詩曲に散見する者は複雑多端を極め初學の苦むを常とせるが、本書は其本末を叙して最も要を得たるポードウイン氏の古神話傳を全譯して中幹として其他の典籍によりて大に枝葉の物語を補ひ、神人地物の名には考證的註釋を施し又「エニード」の梗概を添へて羅馬神話をも概見せしめられたれば、一讀の下多趣多景なる神話全領の所傳に通ずるを得べし。かく全景を描けるものは邦文にては一冊も無し、本書は其嚆矢也。譯筆亦苦心を重ね高遠清雅なるクラッシュムの妙を顯明せり。

文學士 藤澤古雪先生譯(シルレル原作)

悲劇 オルレアンの少女

菊判全一冊
定價四十五錢
郵税八錢

第八版

オルレアンの少女、ジャンダクの奇蹟は獨逸文豪シルレル、入神の筆を以て一篇の戯曲を爲す、其事や痛快、其文や沈痛、言々血ならざる無く、句々涙ならざるなし、蓋し悲劇中の上乘なるもの。一少女の苦衷赤誠が如何に祖國の尊嚴を保ちしかを知ると同時に獨逸文學の精華を味ふを得べし。

纂編訂校家大八代現

庫文著名珍袖

各編共に稀世の珍書にして、収録せる者は何れも天下の逸品、特に著者の自筆本又は寫本等を取りて上梓せるもの、形態分量の適當なること、寸珍本にして一冊二百頁なるが爲に閱覽に時間を費さず携帯手頃にして至便、以て旅行に伴ふべく以てポケットに收むべく起臥繙讀自在なり。

一	芭蕉翁繪詞傳附句集	一四	謠曲二十番
二	近松淨瑠璃三種	一五	世間娘氣質
三	雨月物語	一六	日本永代藏
四	假名文章娘節用	一七	日本新永代藏
五	今昔物語	一八	萬載集才藏集
六	近江縣物語	一九	花月草紙
七	狂言二十番	二〇	鳩翁道話
八	西行山家集	二一	緞手摺昔木偶
九	風流志道軒傳	二二	夢想兵衛 <small>蝶胡</small> 物語
一〇	(脚本)春花五大力	二三	同後篇
一一	俳諧水滸傳	二四	假名手本忠臣藏
一二	よものあか	二五	慶長見聞集
一三	國姓爺合戦	二六	源氏物語忍草

ず應に需高へ揃取部全

庫文著名珍袖

二七	松の葉	四〇	保元物語
二八	春雨物語	四一	平治物語
二九	世間用心記	四二	太平記忠臣講釋
三〇	をりく草	四三	芭蕉翁文集
三一	和漢朗詠集	四四	因果物語
三二	松浦佐用媛石魂錄	四五	神皇正統記
三三	同後編	四六	殉難前後草
三四	東遊記	四七	海道記、廻國雜記
三五	落語選	四八	忠臣藏皮肉論
三六	續々鳩翁道話	四九	近世畸人傳
三七	英草紙	五〇	川柳選
三八	笑談五種		
三九	他我身の上		

既刊書解題進呈
往復はがき申込次第

寸珍類美本
每編二百頁
口繪
寫真版入

定價

各冊上製卅錢
並製廿三錢
郵税金四錢

入箱

●上製五十冊拾參圓五十錢(送料五十六錢)
●同廿五冊金七圓(送料廿八錢)
●箱代實費五十冊入五十五錢(送料二十四錢)
●廿五冊入三十五錢(送料十六錢)

帝國博物館 歴史部員 高橋健自先生著

鏡と劔と玉

洋装頗美本全一冊石版及
コロタイプ版百數十個
定價金一圓五十錢
郵税金八錢

畏れども 三種の神器に關する 講説は本書を繙くに非ずんば知らずして止みなん。鏡と劔と玉とは古人の尊重せし所にして、之に關する研究は考古學上に將た歴史上等閑に附する能はざるもの。著者は考古學に精通して現に皇室博物館歴史部學藝委員たり。今其の學識を傾注して此書を著はす、書中にはコロタイプ版石版等を以て鏡劔玉の寫真無數を加へ叙述頗る精確也。之れ獨り史家藝術家が珍とするに足るのみならずして一般人士も亦本書に依りて多大の興味を喚起すべきは勿論なりとす特に南北朝問題に關しても亦精讀に値すべきを疑はざる也。

久留島武彦先生著 鏑木清方先生挿畫

久留島お伽講壇

四六判 頗美本
石版着色挿畫十一葉
定價金壹圓
郵税金八錢

●慈愛深き父兄に告ぐ 通俗講話界の先覺者たる著者の講話に就ては世既に定評あり。本書は其の十八番とも稱すべきもの十一篇を收め、天真爛漫たる裡に、自然の人情を現はし、面白く讀み行く間に微妙なる教訓に觸れしむ。眞にお伽話の上乗也。家庭の最良讀み物、教育家の絶好話料たるを疑はず。



終

